広大科研
15
11610534
0130484527

G・ビューヒナー研究

研究課題番号　11610534

平成十一年度—平成十四年度科学研究費補助金・基盤研究(C)(2)

研究成果報告書

平成十五年三月

研究代表者
広島大学大学院文学研究科教授
河原俊雄

中央図書館

広島大学図書
0130484527

研究組織

研究代表　　河原　俊雄（広島大学大学院文学研究科教授）

交付決定額（配分額）

（単位千円）

	直接経費	間接経費	合計
平成１１年度	1.600	0	1.600
平成１２年度	600	0	600
平成１３年度	500	0	500
平成１４年度	500	0	500
総計	3.200	0	3.200

研究発表

（１）学会誌等

１．河原俊雄　ビューヒナー研究（四）－殺人者の言葉から始まった文学－　第三部『ヴォイツェック』と『レンツ』の研究史。広島大学文学部「広島大学紀要」第六十巻特輯号三、１－９５頁。２０００年１２月。

２．河原俊雄　家族宛のビューヒナーの手紙は「見せかけの嘘」か？
—Ｔ．Ｍ．マイアーのビューヒナー書簡論批判—　日本ビューヒナー協会。２００１年６月。

３．河原俊雄　レッシングの『エミーリア・ガロッティー』試論。－誘導のディスクール－「ドイツ・文学の描くその紋様」棗田光行先生退職記念論集。２００２年５月。

4. 河原俊雄　ヴァーグナーの『リエンツィー』から『さまよえるオランダ人』へ　－ベルリンでの上演を手がかりに－「ドイツ文学論集」第３５号。日本独文学会中国四国支部。２００２年１０月。

5. 河原俊雄　ビューヒナー研究（五）－殺人者の言葉から始まった文学－　第四部『ヴイツェック』と『レンツ』の時代背景。広島大学大学院文学研究科「広島大学大学院文学研究科論集」第六十二巻特輯号四、１－６９頁。２００２年１２月。

（2）口頭発表

1．河原俊雄　シンポジウム「拠り所を求めてさまよう群集」　－ビューヒナーの『ダントンの死』から－日本独文学会。徳島大学。１９９９年１０月。

2．河原俊雄　デュレンマットの『老貴婦人の訪問』－Deutsches Theater Berlin 2000 年の上演報告－。広島独文学会。広島大学。２０００年９月。

3．河原俊雄　シンポジウム「言葉は生の現実をどこまで表現できるか」広島独文学会。広島大学。２０００年９月。

4．河原俊雄　デュレンマットの『老貴婦人の訪問』－Ｔｈ．ラングホーフの演出－　日本演劇学会。大阪府立大学。２００１年１０月。

5．河原俊雄　ヴァーグナーの『リエンツィー』から『さまよえるオランダ人』へ　日本独文学会中国四国支部。香川大学。２００１年１１月。

6．河原俊雄　ヴァーグナー・シンポジウム。『トリスタンとイゾルデ』のH．クプファーの演出。広島独文学会。広島大学。２００２年６月。

7．河原俊雄　ベルリン・シャウビューネでの『ダントンの死』の上演報告。日本ビューヒナー協会。獨協大学。２００２年６月。

8．河原俊雄　ヴァーグナー『トリスタンとイゾルデ』の第二幕最終場面の演出比較。早稲田大学ドイツ語学文学会。早稲田大学。２００２年１０月。

はしがき

一九九八年、『殺人者の言葉から始まった文学　―G．ビューヒナー研究―』（鳥影社）を出版した。本研究は、この著書で展開した論を裏付け補足し、ビューヒナー研究史上における本研究の位置を明確に示し、あわせて、『ヴォイツェック』と『レンツ』の作品が生まれた土壌となる当時の時代背景を主として殺人者の精神鑑定という問題に焦点を絞り明らかにしたものである。科学研究費申請の当初の目標も研究史の概観と時代背景の解明に的を絞り込んだ。そしてそれぞれの成果がここに収めた二編である。すなわち、ビューヒナー研究（四）は研究史を、ビューヒナー研究（五）は時代背景を、それぞれ調査し検討し、従来の論を参照しこれに対して批判的な観点から自らの見解を提示しようと試みたものである。もとより不足した部分、従来の論への解釈のかたより等、難点は多々あると思う。ご批判いただければ幸いである。

申請者のビューヒナー研究の論点は、『ヴォイツェック』と『レンツ』が、戯曲と小説というジャンルの違いはあるものの、ひとつの同様の様式で構成されているということを、文体研究の側面から明らかにしようとしたことにある。その様式とは、客観的で合理的な通常の筋とは異なり、主人公の感覚のつながり、それも主として原始的で本能的な感覚を基軸にして作品を組み立てるという手法である。ここを主張し力説した論は調べた限り内外を問わず従来まだなかったと思えたので、できるだけ詳細になおかつ客観的に論述する必要を痛感した。いささか冗長と思える部分も今にしてみれば感じるが、テクストに即して厳密にということを旨としたので、こうした形をとらざるを得なかった。

合理的な筋ではなく主人公の感覚によるつながりで作品を構成する。これが、ビューヒナーの作品のもっとも優れた魅力的な部分だと申請者はとらえる。そして、ここがほかの文学作品や演劇やオペラの新しい解釈への道をぐんと広げた。研究期間の後半、レッシングやヴァーグナーやデュレンマット等の演劇・オペラへの関心が広がったのも、申請者の中でビューヒナー研究を通して得た文体研究の成果が反映された結果である。言葉の戦略的な機能、群衆の問題、主人公の感覚による一見断片的としか思えないがしかし基底のところで通じている太くて直線的な流れ。こうした観点からほかの作品を見る視点が、本研究によって新しく生まれ育ちつつある。

二〇〇一年に、ベルリンのシャウ・ビューネで観た『ダントンの死』の公演、アルバン・ベルクのオペラ『ヴォツェック』

の分析、さらには、二〇〇〇年代の新演出によるヴァーグナーを中心にしたさまざまなオペラ上演の考察。本研究をベースにした関連分野への研究への情熱はさまざまに広がりつつある。

ベルリンやウィーンでのビューヒナーの戯曲や、その戯曲を台本にしてオペラ化した作品の上演はそう多くはない。このため、研究期間の広範に企図したビューヒナーの作品に対する演劇学的な側面からのアプローチが未完のままに終わった。これは今後の課題としたい。

時代背景を探るにあたり、当時の精神医学の動向を本格的に分析したという点で、ゼーリング＝ディーツの論が大いに役立った。この論文は、公表される以前の段階で大阪府立大学の谷口廣治氏からコピーをいただいた。また、ほとんどうずもれていたシェーネの秀作『レンツ』論は九州大学の池田紘一氏からその論の所在を教えていただき、ベルリンでの研修期間にほぼ一ヶ月かけて各図書館を回りやっと見つけ出したものである。この二つの論は計り知れないほど本研究に役立った。この場を借りて両氏に感謝したい。

ビューヒナー研究（四）

―殺人者の言葉から始まった文学―

第三部　『ヴォイツェック』と『レンツ』の研究史

河原俊雄

目次

はじめに……1
略号……2
一、ルカーチとフィエートアの論争……7
ルカーチ……7
フィエートア……10
論争の要点および批判……19
二、社会史的立場からの研究……22
ハンス・マイアー……22
ポッシュマン……26
アルベルト・マイアー……30
三、存在論的立場からの研究……36
コーベル……36
ヴィトコフスキー……40
再びポッシュマン……45
四、その他の流派……49
グンドルフ……49
ヒンドラー……49

ティーアベルガー……51
シャオプ……52
アーレント……53
ピルガー……54
五、マールブルク学派……57
トーマス・ミヒアエル・マイアー……57
デットナー……77
ゲルッシュ……85
註……87

【はじめに】

ビューヒナーほどさまざまなアプローチが可能な作家はそう多くはいないだろう。受容史がそのことを示している。ハウプトマン、ヴェーデキントらの自然主義の作家たちによって本格的に注目され、それ以降、ホーフマンスタール、ムージル、リルケ、ブレヒト、カネッティー、デュレンマット、ツェラーン……。きりがない。これらの作家たちはいずれも、ビューヒナーの文学からなにかを見つけだし自らの創作の糧にしている。しかしながら、右に挙げた作家たちを一括りでまとめられる概念などまずない。あまりに傾向が異なる。さほどに、ビューヒナーの文学は多様に読まれてきた。

その文学を研究対象にする。そこでは、受容史同様、さまざまなアプローチの可能性がある。本研究はその中の一つの可能性でしかない。それは、一条のスポットライトに似ている。彼の文学全体を隈なく照らしだす網羅的な研究ではない。そもそも、それは不可能に近い。それほどに、ビューヒナーの文学は開かれており奥が深い。

そこで、この「第三部『ヴォイツェック』と『レンツ』の研究史」では、一九三〇年代から現在に至るまでの『ヴォイツェック』と『レンツ』の研究史の概略を批判的に紹介し、第一部『ヴォイツェック』（『ビューヒナー研究（一）』広島大学文学部紀要第五四巻特輯号三、一九九四年）、第二部『レンツ』1／2（『ビューヒナー研究（二）』同第五六巻特輯号二、一九九六年）、第二部『レンツ』2／2（『ビューヒナー研究（三）』同第五七巻特輯号二、一九九七年）の研究史上における位置を明らかにしたい。

なお、第一部『ヴォイツェック』と第二部『レンツ』は、ドイツ語学文学振興会から一九九七年度の刊行助成を得て『殺人者の言葉から始まった文学―G・ビューヒナー研究』という書名で一九九八年三月に鳥影社より出版した。

【略 号】

AMÄ =Albert Meier: Georg Büchners Ästhetik. In: Georg Büchner Jahrbuch 2/1982. In Verbindung mit der Georg Büchner Gesellschaft und der Forschungsstelle Georg Büchner - Literatur und Geschichte des Vormärz - im Institut für Neuere deutsche Literarur der Philipps-Universität Marburg herausgegeben von Hubert Gersch, Thomas Michael Mayer und Günter Oesterle, Frankfurt am Main (Europäische Verlagsanstalt) 1983, S.196-208.

AMW =Albert Meier: Georg Büchner 》Woyzeck《. München (Fink) 1980.

AG =Dieter Arendt: Georg Büchner über Jakob Michael Reinhold Lenz oder: 》die idealistische Periode fing damals an《. In: Zweites Internationales Georg Büchner Symposium 1987. Referate. Herausgegeben von Burghard Dedner und Günter Oesterle, Frankfurt am Main (Anton Hain Meisenheim)1990, S.309-332.

BD= Maurice B. Benn: The Drama of Revolt. A Critical Study of Georg Büchner. London, New York, Melbourne (Cambridge) 1979.

BDT =Georg Büchner: Dantons Tod. Kritische Studienausgabe des Originals mit Quellen, Aufsätzen und Materialien. Hrsg. von Peter von Becker. Frankfurt am Main (Syndikat) 1980.

BN =Bonaventura (E. A. F. Klingemann): Nachtwachen. Im Anhang: Des Teufels Taschenbuch. Herausgegebenen von Wolfgang Paulsen. Stuttgart (Reclams Universal-Bibliothek Nr. 8926) 1990.

BOG =Hermann Bräuning-Oktavio: Gerog Büchner. Gedanken über Leben, Werk und Tod. Bonn (Bouvier) 1976. (=Abhandlungen zur Kunst-, Musik-, und Literaturwissenschaft, Bd. 207)

CG =Clarus, Johann Christian August: Die Gutachten des Hofrats Clarus zum Fall Woyzeck. Die Zurechnungsfähigkeit des Mörders Johann

Christian Woyzeck, nach Grundsätzen der Staatsarzneikunde aktenmässig erwiesen von Dr. Johann Christian August Clarus, K. Sächsischen Civilverdienst- und des Kaiserl. Russischen Wladimirordens IV. Klasse Ritter, ordentl. des. Professor der Klinik, des Kreisamts, der Universität und der Stadt Leipzig Physikus u. Arzt am Jakobsspital etc (Das zweite Gutachten). Früheres Gutachten des Herrn Hofrath Dr. Clarus über den Gemütszustand des Mörders Joh. Christ. Woyzeck, erstattet am 16. Sept. 1821 (Das erste Gutachten). In: Georg Büchner: Sämtliche Werke und Briefe. Historisch-kritische Ausgabe mit Kommentar, Bd. 1. Hrsg. von Werner R. Lehmann. München (Hanser) 3. Aufl. 1979, S.485-537, S.538-549.

DG =Inge Diersen: Büchners Lenz im Kontext der Entwicklung von Erzählprosa im 19. Jahrhundert. In: Georg Büchner Jahrbuch 7 (1988/89). Tübingen (Niemeyer) 1991, S.91-125.

DL =Burghard Dedner: Büchners Lenz: Rekonstruktion der Textgenese. In: Georg Büchner Jahrbuch 8 (1990-94). Tübingen (Niemeyer) 1995, S.3-68.

DW =Burghard Dedner: Die Handlung des Woyzeck: wechselnde Orte - 》geschlossene Form《. In: Georg Büchner Jahrbuch 7 (1988 / 89). Tübingen (Niemeyer) 1991, S.144-170.

E/H,E =Die Esquirol's allgemeine und specielle Pathologie der Seelenstörungen. Frei bearbeitet von Karl Christian Hille. Nebst einem Anhange kritischer und erläuternder Zusätze von J. C. A. Heinroth. Leipzig 1827.

GH =Walter Grab: Der hessische Demokrat Wilhelm Schulz und seine Schriften über Georg Büchner und Friedrich Ludwig Weidig. In: Georg Büchner Jahrbuch 2/1982, Frankfurt am Main (Europäische Verlagsanstalt), 1983, S.227-248.

GL =Georg Büchner: Lenz. Studienausgabe. Im Anhang: Johann Friedrich Oberlins Bericht 》Herr L.....《 in der Druckfassung 》Der Dichter Lenz, im Steintale《 durch August Stöber und Auszüge aus Goethes 》Dichtung und Wahrheit《 über J. M. R. Lenz. Herg. von Hubert Gersch. Stuttgart (=Reclams Universal-Bibliothek Nr. 8210) 1984.

GSQ =Hubert Gersch in Zusammenarbeit mit Stefan Schmalhaus: Quellenmaterialien und 》reproduktive Phantasie《. Untersuchungen zur Schreibmethode Georg Büchners: Seine Verwertung von Paul Merlins Trivialisierung des Lenz-Stoffs und von anderen Vorlagen. In: Georg Büchner Jahrbuch 8 (1990-94), Tübingen (Niemeyer)1995, S.69-103.

GW =Alfons Glück: Woyzeck - Clarus - Büchner (Umrisse). In: Zweites Internationales Georg Büchner Symposium 1987. Referate. Frankfurt am Main (Anton Hain Meisenheim)1990, S.425-440.

HMG =Hans Mayer: Georg Büchner und seine Zeit. Wiesbaden 1946; Berlin 1947; Wiesbaden und Berlin 1960. Frankfurt am Main (= surkamp taschenbücher 58)1972.

HS =Walter Hinderer: 》Dieses Schwanzstück der Schöpfung《 : Büchners Dantons Tod und die Nachtwachen des Bonaventura. In: Georg Büchner Jahrbuch 2/1982. Frankfurt am Main (Europäische Verlagsanstalt), 1983, S.316-342.

JG =Gerhard Jancke: Georg Büchner. Genese und Aktualität seines Werkes. Einführung in das Gesamtwerk. Kronberg/Ts(= Scriptor Taschenbücher S 56) 1975.

KG =Erwin Kobel: Georg Büchner. Das dichterische Werk. Berlin/New York (de Gruyter) 1974.

KGO =Volker Klotz: Geschlossene und offene Form im Drama. München 5. Aufl. 1970.

KW =Egon Krause: Georg Büchner: Woyzeck. Texte und Dokumente. Kritisch herausgegeben von Egon Krause. Frankfurt am Main (Fischer) 1969.

LF =George Lukács: Der faschistisch verfälschte und der wirkliche Georg Büchner. In: Wege der Forschung Band LIII. Georg Büchner. Herausgegeben von Wolfgang Martens. Darmstadt (Wissenschaftliche Buchgesellschaft) 3. Aufl. 1973, S.197-224. (Aus: Lucács, Deutsche Literatur in zwei Jahrhunderten. Neuwied 1964. Zuerst 1937)

PG =Henri Poschmann: Georg Büchner. Dichtung der Revolution und Revolution der Dichtung. Berlin und Weimar(Aufbau)1983.

PI =Andreas Pilger: Die 》idealistische Periode《 in ihren Konsequenzen. Georg Büchners kritische Darstellung des Idealismus in der Erzählung Lenz. In: Georg Büchner Jahrbuch 8 (1990-94), Tübingen (Niemeyer) 1995, S.104-125.

PS =Henri Poschmann: 》Wer das lesen könnt《. Zur Sprache natürlicher Zeichen im Woyzeck. In: Zweites Internationales Georg Büchner Symposium 1987. Referate. Frankfurt am Main (Anton Hain Meisenheim)1990, S.441-452.

TL =Richard Thieberger: Lenz lesend. In: Georg Büchner Jahrbuch 3 (1983), S.43-75.

TMMA =Thomas Michael Mayer: 》Wegen mir könnt Ihr ganz ruhig sein...《 Der Argumentationslist in Georg Büchners Briefen an die Eltern. In: Georg Büchner Jahrbuch 2/1982, S.249-280.

TMMB =Thomas Michael Mayer: Büchner und Weidig - Frühkommunismus und revolutionäre Demokratie. Zur Textverteilung des 》Hessischen Landboten《. In: Heinz Ludwig Arnord (Hrsg.): Georg Büchner I /II. München (edition text + kritik) 1979, S.16-298.

TMMT-I = Thomas Michael Mayer: Zu einigen neueren Tendenzen der Büchner-Forschung. Ein kritischer Literaturbericht (Teil I): In: Heinz Ludwig Arnord (Hrsg.): Georg Büchner I/II. München (edition text + kritik)1979, S.327-356.

TMMT-II = Thomas Michael Mayer: Zu einigen neueren Tendenzen der Büchner-Forschung. Eine kritischer Literaturbericht (Teil II: Editonen): In: Heinz Ludwig Arnord (Hrsg.): Georg Büchner III. München (edition text + kritik) 1981, S.265-311.

VL = Karl Viëtor: ›Lenz‹, Erzählung von Georg Büchner. In: Wege der Forschung Band LIII. Georg Büchner. S.178-196. (Aus: Germann. -Roman. Monatsschrift 25. 1937)

VT = Karl Viëtor: Die Tragödie des heldischen Pessimismus. Über Büchners Drama ›Dantons Tod‹. In: Wege der Forschung Band LIII. Georg Büchner. Herausgegeben von Wolfgang Martens. Darmstadt (Wissenschaftliche Buchgesellschaft) 1965, 3. Aufl. 1973, S.98-137. (Aus: DVjs 12. 1934)

VW = Karl Viëtor: Woyzeck. In: Wege der Forschung Band LIII. Georg Büchner. S.178-196. (Aus: Das Innere Reich 3. 1936)

WG = Wolfgang Wittkowski: Georg Büchner. Persönlichkeit. Weltbild. Werk. Heidelberg (Winter) 1978. (= Reihe Siegen. Beiträge zur Sprach- und Literaturwissenschaft, Bd.10)

一、ルカーチとフィエートアの論争

『ヴォイツェック』と『レンツ』の研究史を概観するにあたり、『ダントンの死』がいかに解釈されてきたか、これを無視することはできない。[二]

アルベルト・マイアーはこう言っている。

「ビューヒナーのテクストは、まじりけのない目には、まるで、それ自体で存在する現実の模写のように見えるので、受け手の側は、その作品に向かっての第一歩を踏み出す際に、自分が自分の現実の中でどう振る舞うのか、それと同じように振る舞うことが可能になる。」[三]

簡単に言えば、ビューヒナーの文学は現実をそのまま写し取ったものであるから、自らの現実に対する読み手の姿勢がそのまま作品解釈に反映される、ということであろう。ルカーチの論はその典型である。

【ルカーチ】

『真のビューヒナーとファッショ的に歪められたビューヒナー』（一九三七年）[四]という題名が示すように、この論には、反ファシズムの政治的姿勢が鮮明に表れている。発表されたのは、ビューヒナーの没後百年にあたる一九三七年。まさに、ヒットラーのナチ政権がドイツを牛耳った時期である。

ルカーチはまず、『ダントンの死』の「群集」（die Masse）に注目した。パリ市民の悲惨な生活状態が、ダントンとロベスピエールの対立の根本原因であり、同時に、ダントン派没落の原因ともなるので、「この合唱（群集の声、

筆者注）は、従来のものよりも能動的であり、直接筋に介入する」（LF 258）と言う。しかし、「ビューヒナーはかなり意識的な手法でこの群集場面の役割を制限し、指導的で『世界史的人物』（die welthistorischen Individuen）の悲劇的運命に、合唱のようなものとして理念的に気分的に連れそうようにした」（LF 258）と見る。つまり、基本的には、群集を英雄の添えものと考えた。そして実際、この劇で展開される問題は、ロベスピエール対ダントンの戦いの中にすべて最高度に表現されていると言い切り、これ以降、両者の論争に目を向けながら作品論を展開する。これは、ルカーチのビューヒナー論の中でも非常に重要な分岐点である。この後、彼はこう分析する。

ダントンは封建制度打倒のために戦った「偉大なブルジョワ革命家」（ein großer bürgerlicher Revolutionär, LF 259）である。しかし、その戦いが一段落し、革命がさらに進行して、今度はいよいよ革命の最終目標である「資本主義の桎梏からの貧者救済」の局面に至ると、彼は無為徒食の輩と堕し、これがために市民の標的となった。第三幕十場でダントンの処刑を決定する第二の市民の台詞は、ダントンのこの無為徒食を糾弾した台詞であり、これは市民とダントンの離反を示す。これに対して、ロベスピエールとサン・ジュストこそが「平民の革命」（die plebejische Revolution, LF 263）を追求したのであり、ビューヒナーは自らの主張をこの二人の台詞に託した。そして、「ビューヒナーは、無為倦怠を倦んだブルジョワ階級の顕著な特徴とみなしている」（LF 260）ことを力説する。これがルカーチの論の骨子である。

この論文には、一九三七年という時代の動向が濃厚に出ている。この三年前に出たフィエートアの『英雄的ペシミスムスの悲劇』（一九三三年）[五]をルカーチがここで徹底的に批判した根拠は、ペシミスムスを強調すれば、資本主義本来の矛盾に反逆しようとする市民の力を削ぎ、「奇跡」を願う方向に市民の関心を向けてしまい、これがやがて強力な指導者を待望する気運を助長しファシズムへと直結すると考えたからである（LF 218f.）。

事実、アルベルト・マイアーによれば、ナチズムのビューヒナー受容には二つの側面があったという。一つは政治

的に危険な作家としてこれを抑圧すること、そしてもう一つは、逆に、ナチズムのためにこの作家を利用しようとする動きである。後者の例として、『ヴォイツェック』は「民族的統一理念の現実化」のための戦いの書であるといった解釈（ヨーゼフ・マグヌス・ヴェーナー）があったことを実例として彼は紹介している。[六] さらにまた、たとえば、ナチ前夜の小市民の姿を「忠実に記録する者として」(als treuer Chronist) 写し取ろうとしたホルヴァートの戯曲『カジミーアとカロリーネ』（一九三三年初演）では、時代に対する失望や絶望の気配が濃厚に描かれ、強力な指導者を求める市民たちの動きが生々しく表現されている。[七] おそらく、フィエートアの論も、そうしたペシミスティックな時代の動向と無縁ではなかったのだろう。

しかし、今から見れば、ルカーチの論にはいくつかの問題がある。彼が批判するプファイファーはいいとしても、フィエートアをこの人物と同列に並べてナチの御用学者としての烙印を押してしまっていいのか。果たして、ロベスピエールとサン・ジュストは、群集と一体になっているのか。さらにまた、この二人の革命家にビューヒナーは自らの思いを託したと断定してもいいのか。そこには、テクストや資料にもとづく実証的な裏付けがあるのか。これらの問題は、後の研究者たちによって批判されることになる。

しかし、アルベルト・マイアーが指摘するように、このルカーチの論はビューヒナー研究史上ではまさに「転換点」となった (AMW 120)。もともとビューヒナーは、第一次世界大戦以前では、「社会革命家」 (der Sozialrevolutionär) としてとらえられていた。しかし、一九二三年にマルクーゼがニヒリズムを強調する論を発表した。この流れがグンドルフ、フィエートアへと継承されていく。つまり、ルカーチの論は、一九三七年以前のビューヒナー研究史を意識し、それをふまえた上で、「社会革命家」としてのビューヒナーの位置をしっかりと再確認した。しかも、ビューヒナーの研究が研究者自身の時代の動きと密接に関連すると意識した点、および、そこでは現実に対する研究者の姿勢が問われるという立場を鮮明に打ち出した点、この二つの点で確かに画期的なものであった。

【フィエートア】

それでは、ルカーチが手厳しく批判したフィエートアの論とはいかなるものであったのか。戦後、ナチ擁護の臭気を放った文学が軒並みタブー視される雰囲気の中で、「ファッショ的に歪められた」ビューヒナー論の代表という烙印をルカーチに押された彼の論は、しばらくは顧みられなかった。しかし、六〇年代になると、たとえばイギリスのベンによって、七〇年代に入ると、コーベルやヴィトコフスキーらによって掘り起こされる。さらに、八〇年代後半になると、ビューヒナーの文学から階級闘争の図式を読み取ろうとするグリュックのような研究者でも、フィエートアの論に部分的に注目し始めた。

そのフィエートアの方法の基本はこうである。

『ダントンの死』、『ヴォイツェック』、『レンツ』のいずれの論でも、素材と作品との関係を徹底的に調べこれにもとづいてテクストを解釈しようとする。この点で、マルクス主義の歴史観に照らし合わせてテクストを読もうとするルカーチの方法とは大きく異なる。

まず、『ダントンの死』を論じた『英雄的ペシミスムスの悲劇』である。

劇中のダントンの台詞のいくつかが、ティールのフランス革命史八からまさに「言葉どおり」(wörtlich) 取り入れられていることを指摘し、素材との関係が緊密であることを彼は強調する (VT 10)。そしてここから、ロベスピエールとダントンの対立が最も熾烈になったこの時期をビューヒナーはなぜ選んだのか、そこに注目する。その時期はまさに、二人の偉大な革命家が対立し革命それ自体が崩壊していく過程 (Selbstmord der Revolution, VT 100) であり、もし革命を美化し賛美するのであれば、それにふさわしいエピソードは他にもいくらでもあったのではないか、と彼は言う。だから、「対象からしてすでに、ビューヒナーの作品を政治的な傾向劇として解釈するのは不可能だ」(VT 100) と彼は断定した。

この後、ショーペンハウアーとダントンの台詞の共通性に彼は目を向ける。ダントンは人生にうんざりしている。生への意志を否定する（nicht handeln wollen）。この点で、意志を否定したショーペンハウアーの哲学と劇中のダントンの台詞が結び付く。しかし、ダントンはそのような状態の中で安住できない。なぜなら、「ダントンは、自分（das Ich）が、この貴重な何か（dieses kostbare Etwas）が、無にはなれないという論理的な困難にぶつかっている」（VT 116）からである。生への意志を捨てたとしても、それでもなお、自分自身の存在は消すことができず、依然として自分は何ものかであり続ける（Und ich bin etwas.）。そこに、ダントンの苦悩がある。フィエートアは言う。

「人生はそれゆえに、疑わしいもので意味がない。なぜなら、どう動こうが、不可解な必然性（unbegreifliche Notwendigkeit）によって人生は苦悩へと至り、そのすべては死に呑み込まれるからだ。人間には自由などない。あるのは、強制と苦しみだけだ。それで人間たちは、苦しみと死が人生の主であることを痛いほど認識する。」（VT 134f.）

そして、こう認識したダントンはこの苦しみに満ちた人生を自ら引き受けようとする。そこに、フィエートアはこの劇の主題を見い出だし、これを、「英雄的ペシミスムス」（der heldische Pessimismus）、もしくは、「ビューヒナーのラディカルなペシミスムス」（Büchners radikaler Pessimismus, VT 134）と言う。

だが、この論で問題となるのはロベスピエールの解釈であろう。劇中のロベスピエールに対して彼は容赦しない。「用心深い臆病な小市民」（der vorsichtige, feige Kleinbürger）、「倫理的に純粋培養されたサディズム」（ethisch sublimierter Sadismus）、「よくしつけられた、保守的とも言っていい地方のブルジョワ」（der zuchtvoller, ja konservativer Provinzbourgeois）など、あらゆる罵声を浴びせかけ、あわせて、ティールとミニュエもロベスピエールを「ひどくいやな奴」（ein abscheuliches Wesen）とみなしていたことも指摘する（VT120ff.）。

しかし、この劇でのロベスピエールもまた「不可解な必然性」に駆り立てられて苦悩へと追い込まれ、そこから抜け出せず死へと至る。その苦悩とその死は、ダントンのそれとまったく変わらない。ダントンを「英雄的」と言い、ロベスピエールを「用心深い臆病な小市民」と決め付け分類してみたところで、その違いはきわめて表層的なことがらでしかない。

次に、『ヴォイツェック』論（一九三六年）[九]である。

ルカーチのフィエートア批判は『ダントンの死』論に対してだけであり、フィエートアの『ヴォイツェック』論、『レンツ』論は無視されている。しかし、この二つの論は、『ダントンの死』の解釈と比べると、はるかにすぐれている。

フィエートアの『ヴォイツェック』論の特徴が鮮明になるのは、大尉とヴォイツェックのやりとりについての解釈（VW 158）である。それによるとこうである。「ビュルガートゥム（das Bürgertum）の社会的および経済的な条件のもとでしか妥当性をもたない」「モラルや道徳」（Moral und Tugend）をビューヒナーは大尉に代表させ、その「言葉のフェティシズム」（der Wortfetischismus）を暴いた。その大尉に対してヴォイツェックが主張したのは、「人間の内にある原始的な自然」（die elementarische Natur im Menschen）である。その自然は、「教養でだめにされていない」（unverbildet）「民衆」（Volk）の中だけにしか生きていない。要するに、この場面でのやりとりの本質は、「ビュルガートゥム」と「原始的な自然」を保持している人間の戦いであるとフィエートアは見た。この対立図式は、『ヴォイツェック』を彼が解釈するときの基本となる。

この「原始的な自然」という言葉については説明が要るだろう。この言葉は、フィエートアの発案ではない。短篇『レンツ』の主人公が口にした「原始的な感覚」（der elementarische Sinn, GL 13）という言葉をもとにしていると

考えられる。この短篇の舞台は、文明社会からは遠く離れた山里である。そこで暮らす人間たちは自然に密着し、自然とともに生きている。その彼らには、霊の存在を感じたり、地下にある水脈や鉱脈がわかったり、夢や予感を通して何かの出来事を察知したりする独特の感覚がある。主人公のレンツは、これを「原始的な感覚」と名付け、この感覚は、文明社会の中で精神的に暮らせば暮らすほど退化すると述べている。

フィエートアが用いた「人間の内にある原始的な自然」というのは、『レンツ』の主人公のこの言葉を基本にしている。そしてヴォイツェックは、都市で暮らしているものの、貧しく教養がないゆえに、この感覚をそのまま保持している。つまり、「教養でだめにされていない」。これが、フィエートアの見解であろう。

そして、ここに的を絞って、素材と作品との関係について彼は論を進める。フリーメイソンにまつわる妄想、「何か」(was) が動く気配を感じ、その「何か」が後をつけて来るという感覚。この劇には、このように合理的には説明できないものが数多く取り入れられている。そしてこれらは、この劇の素材となったクラールスの鑑定書一〇に記載されている実在のヴォイツェックの言葉と緊密に関連している。そこに目を向け、フィエートアはこう述べる。

「これは、精神的な錯乱の兆候として考えられ、それゆえに、犯行に対するヴォイツェックの責任は弱められ、彼は誤った裁判の犠牲者にされたのだと考えられないだろうか。そうなると、これは、鑑定医クラールスがこれらの現象について表明した見解に対して、よりよく医学を学んだビューヒナーの側からの答えとなるだろう。」(VW 172)

ここでフィエートアが問題にしているのは、ヴォイツェックの精神鑑定をしたクラールスへの反論という形でこの劇が書かれたのではないかということである。それも、作家という立場からよりも、むしろ、クラールスよりも「よりよく医学を学んだ」同じ医者という立場からの反論として。そのことを裏付けるためにフィエートアは、このヴォ

イツェック事件の裁判での精神鑑定をめぐって当時のドイツの精神医学界で論争があったことに注目し、クラールスの鑑定に異議を唱えたマルクという医者の説を紹介している（VW 166）。そのマルクは、ボルンショイアーの注釈書によると、ヴォイツェックの犯罪責任能力の問題に対して以下のような見解を示した。

「ヴォイツェックの犯した行為が被告人の心の状態と必然的で直接的な関係があるのかどうかという問いに対して、多くの者は、確信を持って然りと答えてしまうことはないだろう。しかし、非常に高い確率で、はっきりとこう言い切ってしまう者はかなりいるだろう。つまり、ヴォイツェックの心と身体の病的な状態が殺人行為に影響を及ぼし、そのために、犯罪責任能力は疑問視され、いずれにしても軽減されるように思える、と。」（強調はマルク）[十一]

マルクは慎重である。しかし、クラールスの鑑定とはまったく正反対に、精神的にも身体的にもヴォイツェックは病気であると診断し、彼には犯罪責任能力が充分にはないとの判定を最終的に下している。

先に引用したフィエートアの主張は、このマルクの診断を踏まえていると考えられる。つまり、フィエートアがここで言おうとしていることはこうである。ヴォイツェックは精神病であった。しかしクラールスはその判断を誤った。その結果、ヴォイツェックは裁判で死刑の判決を受け処刑された。医者としてのビューヒナーは、『ヴォイツェック』でそのクラールスの鑑定に反論した。

そのフィエートアが最も関心を向けたのが「刺し殺せ！」という声である。この声は、犯行の直前に聞いたと実在のヴォイツェックが供述したもので（CG 515）、クラールスの鑑定でも中心的な問題として扱われ、ビューヒナーの劇にもそのまま取り入れられている。クラールスは、この声はヴォイツェックの独り言であると判断した（CG 529）。その説を紹介した後で、フィエートアはこう述べる。

「詩人はしかし、ここで何が起こっているのかを認識し、理解する。それはつまりこうである。妄想の形成や声という形で、守るものもなく武器も持たない一人の人間が名状しがたいデーモンによって襲われたということ、そして、そのデーモンの冷酷さに人間の存在などひとたまりもなく呑み込まれてしまうこと、そして、このデーモンの侵入のもとで人間の魂は恐れおののいていること、これを認識したのだ。」(VW 173)

それは他でもない。九月虐殺の際にあのダントンを襲ったものでもある。つまり、個々人の意志や良心などを超えて人の人生を支配する「不透明な必然性」(die trübe Notwendigkeit) に縛られた人間として、階級のまったく異なるこの二人の主人公は共通するとフィエートアは考えた。もっと簡単に言えば、劇中のダントンが言うように、この二人はともに、「得体の知れない力によって糸を引かれる」(von unbekannten Gewalten am Drahtgezogen)「人形」(Puppe) である (BDT 339)、そう見たのだ。

しかしながら、「ビュルガートゥム」はそのことを認識しようとはしないし、理解しようともしない。

「他の者たち、つまり、社会の人間たち (die Menschen aus der Gesellschaft) は、原始的な自然および運命として現われる圧倒的なものと自らの存在との間に障壁を建て、面と向かって耐えなくてもすむようにしてしまう。それが彼らの自己欺瞞であり、それが彼らの理念である。そして、根源的で人を脅かすもの (das Ursprüngliche und Drohende) は彼らのモラルによってせき止め、大事に世話してきた庭のような自分の存在が危険にさらされないようにそんなものは脇へとそらす。『衰弱した現代社会』(abgelebte moderne Gesellschaft) の力のない卑小な文化に対して、ビューヒナーはただただ軽蔑し嘲笑するのみであった。」(VW 174)

ここに、ニーチェの市民社会批判や生の哲学の影響を認めることも可能であろう。しかし、フィエートアがここまで手厳しく「ビュルガートゥム」を批判するもととなっているのは、クラールスに対する批判である。クラールスは、ヴォイツェックの精神は全体的には正常であると診断し、犯罪責任能力があると判断した。その判断には、不可解なものと正面から向き合う姿勢が欠けている。それらすべてを合理的な解釈で矮小化してしまう。ビューヒナーが軽蔑し嘲笑したのはここだとフィエートアは見た。だから、右のように述べたのだと思える。

この『ヴォイツェック』論でフィエートアが見ていたものは、一点である。それは、個人の意志を超えた力だろう。それを、「名状しがたいデーモン」、「不透明な必然性」、「根源的で人を脅かすもの」などさまざまな言葉で彼は言い換える。しかし、そのどれにも同じ意味を持たせている。要するに、その不可解なものにヴォイツェックは縛られ殺人を犯した。ダントンもまた然り。しかし、そういう現実を「社会の人間たち」は認識しない。劇中の大尉はその代表である。つまり、ビューヒナーはこの戯曲で生（なま）の現実を示す一方で、その現実を認識できない「ビュルガートゥム」を嘲笑した。これが、フィエートアの『ヴォイツェック』論の要点である。

その論を展開するにあたって、ヴォイツェックの裁判、クラールスの鑑定、当時の精神医学界の動向、そしてビューヒナーのそこでのポジション等、当時の社会状況を彼が視野に入れていたことは注目しておく必要がある。彼は言う。この劇は結局、「裁判官に対する裁判である」（Es ist ein Gericht über die Richter. VW 162）と。この言葉は、『ヴォイツェック』の研究史上で重い意味を持つ。

次に、『レンツ』論十二である。

フィエートアが関心を向けたのは、まず、この短篇の舞台となった土地の人間たちである。

「現代的な社会やその徹底して合理化された文化の中で、これらの農夫たちは、まるで古い素朴な自然の一断片のように存在している。それゆえにこの農夫たちは、原始的なもの、つまり、精神的な人間たちにはとうに消え去ってしまった生きている自然のもろもろの力と親密に関わりつつ暮らしている。」（VL 184）

ここでの論もまた、先に述べた「原始的な感覚」についての『レンツ』の主人公の話をもとにしている。そして彼の『レンツ』論は、ここを基点にここから始まる。

「ビューヒナーにとっては、単純で力強い生命が人間の最も高い価値である。その生命をその形のままに教養によって歪めたりしないで真に表現することが芸術の最高の美である。精神によって抽象化された創作の中にではなく、純粋な自然の存在の中にしか彼は真実を見い出さなかったので、現実が放つ純粋な輝きの美以外にはいかなる芸術の美もありえなかった。」（VL 187f.）

この主張は、短篇『レンツ』の中で展開される芸術論（GL 14）を下敷きにしていると考えられる。主人公レンツがこの芸術論の中で最も強く主張したことは、人間が頭の中で勝手に美醜を判断して自然を作り変えたりせず、自然をその生命のままに写し取るのが芸術であるということであろう。この姿勢は、必然的に、「単純で力強い生命」に向かう。なぜなら、教養によって歪められていない純粋な自然がそこにはあるからである。フィエートアの右の論述は、『レンツ』の芸術論のこの要点を正確にとらえている。

そしてこの後で、『レンツ』の文体に彼は注目する。「生命と心の錯乱のあのような解剖学に驚嘆せざるをえない」

というこの短篇についてのグツコーの論評十三を引用した後で、彼はこう述べる。

「実際、その通りであった。そのことによって、ビューヒナーの短篇は文学的表現の新たな領域へと突進していった。つまり、それまでは外的な経過を説明するときとか学問的な分析を述べるときにしか使われなかったその同じ手法で、もつれ発展する心理状態を現実のままに精密にそしてまさに揺るぎない客観性をもって再現する試みであった。」（VL 192）

この指摘は、『レンツ』の文体を考える上で限りなく重要である。フィエートアは、グツコーの「解剖学」（die Anatomie）という言葉を受けて、ビューヒナーのこの短篇が出事を記録する文書や自然科学の叙述と同じ手法で書かれていることを強調する。つまり、『レンツ』は、記録や自然科学の文体と同じように、「現実のままに精密にそしてまさに揺るぎない客観性をもって」描かれており、この文体によって、「文学的表現の新たな領域」（筆者強調）を切り開いたという指摘である。

フィエートアはこうして、写実に向かうビューヒナーの姿勢を鮮明に論じ、『レンツ』の文体の最も本質的な特徴を正確に把握する。しかし、その姿勢やその文体でビューヒナーが描こうとしたものは何だったのかという主題を述べる段になると、彼の論は現実的で具体的なものから離れる。彼は言う。

「自らの病んでいる状態に対してなすすべもなく、恐ろしいまでにその病が悪化していく中で、レンツが体験したことは、根本的には、ビューヒナーの形而上学的苦痛の源であるこの世の苦しみを苦しむことである。」（VL 193）

「この世の苦しみを苦しむこと」(das Leiden am Leid der Welt)、それが『レンツ』の主題である。そこはいい。しかし、この苦しみを「形而上学的」(metaphysisch) というときのその根拠はどこにあるのか。ビューヒナーの文体の特徴についてあれほど重要な指摘をした彼の論は、この「形而上学的苦痛」という一言で輪郭が途端にぼけてしまう。

この苦悩は、「形而上学的」なものではない。抽象的なものでもなければ、思弁的なものでもない。それは、主人公レンツにとっては、きわめて現実的かつ具体的なものだ。作品論でこれについては徹底的に論じた。

【論争の要点および批判】

さて、以上がフィエートアの『ダントンの死』、『ヴォイツェック』、『レンツ』の各論の要点である。いずれも、テクストに即した議論である。また、素材とテクストとの文献学的な関連にも関心を払っている。さらに、その論の進め方は基本的には客観的であり正確であると言える。

しかし、難点も多々ある。まず、言葉の用法である。『ダントンの死』論でのタイトルとして使われる「英雄的」(heldisch)、『ヴォイツェック』論で使われる「神話的」(mytisch, VW172)、「聖なるもの」(das Numinose, VW172) といった言葉。これらの言葉は、一九三〇年代のドイツという時代背景を考えるならば特別の意味を持つことは明らかだろう。それらの言葉とナチズムが容易に結び付くという危機意識をルカーチが持ったのも当然のことで、こうした言葉でイメージされるビューヒナー像を破壊しなければフィエートアの論は政治的にきわめて危険な代物になるとルカーチが察知したのも根拠のないことではなかった。

言葉だけではない。「Volk」を賛美し、「Volk」の中にある「原始的な自然」を強調するフィエートアの論は、啓蒙主義期以来築いてきたヨーロッパの合理的社会秩序の理念を蔑視し嘲笑し、一歩間違えれば、それに代わる「別の

理念」を呼び込む誘い水になりかねない。それは単なる危惧ではない。たとえば、バイロンの世界苦やヴェルターの世代の病とは異なり、「彼（ビューヒナー）の苦痛は男性的である。感情過多のかけらもない。」（VW 106）とか、「啓蒙主義以来ヨーロッパの凡俗な市民の群れの自負心が縋った薄っぺらな道徳主義」（VW 129f.）といった表現である。なぜこんな表現を用いなければならなかったのか。ナチズムとフィエートアの論を近付けようと思えば、そのための言葉は他にもいくつか見当るだろう。その結果、彼の賛美する「Volk」が「民族」の意になりこれが「ドイツ民族」と解釈されれば、一っ飛びでナチスと一体になってしまう。それは明らかに、フィエートアの意味するものから大きく外れてしまうだろうに。

それだけに、ルカーチの警告には意味があった。しかし、ルカーチのフィエートア批判にも問題がある。彼の批判は、フィエートアの論そのものとじっくり向き合い、これを具体的に実証的に批判するという形にはなっていない。ナチズムの危険な兆候に対する警告が主で、テクストや資料に即した文献学的な側面からの批判が弱い。

さらにルカーチの論でもう一つ問題になるのは、すべてを合理的に解釈しようとする方向に傾き、ビューヒナーの文学でしばしば扱われる非合理なものを一切無視したことである。ビューヒナーの作品が宗教を問題にしていることについての解釈にその典型的な姿勢が現われる。救済のテーマは、ダントンにとってもロベスピエールにとっても、レンツやヴォイツェックやレオンスにとっても、大きな問題になる。ところが、ルカーチはこうした傾向を、「彼（ビューヒナー）の時代の矛盾の大きさと救いのなさ」（LF 204）の現われだと解し、結局は、ビューヒナーは「古い唯物論」（der alte Materialismus, LF 215）に固執しており、後のハイネやマルクスやエンゲルスのように「弁証法的唯物論」（der dialektische Materialismus, LF 216）には達していなかったと見る。そして、これが理由でビューヒナーはダントンに肩入れしたのだと彼は考える。この解釈は、明らかに、マルクス・エンゲルスの歴史観を指標にし、これに照らし合わせてビューヒナーの文学作品を解釈しようとする姿勢の明確な表明ともなる。このような姿勢は、文学作

品を政治的なイデオロギーのためのプロパガンダの道具にしてしまう危険性を常に秘めている。

ルカーチとフィエートア。ビューヒナーの没後百年を節目に交わされたこの二人の論争は、その後のビューヒナー研究に大きな影響を与えることになる。その年はおりしも、ドイツでナチズムが最も巨大になった年でもあった。そして、第二次世界大戦でそのナチズムが敗退する。こうした歴史的事実も、この二人の研究者の論およびその評価に多大な影響を及ぼしている。

要約するとこうだろう。ルカーチは、マルクス主義の立場に立ち、弁証法的唯物論の立場からビューヒナーの研究をするという方法を大胆に持ち込んだ。この立場は、戦後になると大きな流れを作る。そしてフィエートアは、素材と作品との関係に注目し、ここからビューヒナーの文学を解釈し、その基本的なテーマは「苦悩」(Leiden) であると考えた。このフィエートアの論もまた細々ながら受け継がれる。

そして、本研究の位置もここで簡単に述べておく必要があるだろう。本論文では、フィエートアの論を先行研究として重要視する立場に立つ。なぜなら、「原始的な感覚」について正面から扱い、彼以上に深く考察した論は、調べた限りでは見当らなかったからである。さらに、ヴォイツェックの裁判、精神鑑定、その鑑定をしたクラールス、その彼の鑑定についての当時の精神医学界での議論、ビューヒナーの文体の問題等、本研究で扱う主要な問題と彼の論は数多くの点で重なるからである。

二、社会史的立場からの研究

ファシズムの敗退、そしてドイツの東西分断。この二つの出来事はビューヒナー研究に少なからず影響を及ぼす。東ドイツではもちろんのこと、西ドイツでもファシズムの臭気を放つものはことごとく排除され、この時期、フィエートアの研究は脇へ追い払われた。逆に、ファシズムと果敢に戦ったルカーチの論は高く評価され、ビューヒナー研究の基本となり主流となる。いわゆる、「社会史的」(sozio-historisch) 側面を重要視する研究である。これは、現在に至るまで脈々と続いている。

【ハンス・マイアー】

ハンス・マイアー（以下、H・マイアー）はその代表的な後継者であろう。戦争直後の一九四六年、ヴィースバーデンで、翌年ベルリンで出版された『ビューヒナーとその時代』(Georg Büchner und seine Zeit)十四はその後版を何度も重ねスタンダードとなり、戦後のビューヒナー研究をリードした。その方法の基本は、社会的・歴史的状況を重視することにある。作品は時代の中から生まれる。従って、時代背景やその時代と作者の関わりを幅広く視野に入れながら作品を読み解く必要がある。この立場は、マルクス主義の歴史観を大幅に取り入れたルカーチの方法を継承していると言える。以下、彼の論の要点を紹介したい。

まず、『ヴォイツェック』論である。

H・マイアーはここで、一八三四年にビューヒナーが家族宛てに書いた手紙十五の一部を引用し、ここを基点に論を展開する。その一節とは、「なぜなら、状況は我々の外にあるから」([...] weil die Umstände außer uns liegen.) という部分である。この「状況」とは何を意味するのか。これは、「社会的な生活状態と存在状態」(soziale

Lebenslage und Seinslage）のことであると彼は考えた。そして、これはつまるところ、「貧しさ」（die Armut）のことであり、「物質的な生活の〈状況〉」（die „Umstände" seines materiellen Lebens）のことだと規定した。そしてこれこそ、ヴォイツェックを犯罪に駆り立てた「何か」（was）の正体そのものであると解釈した（HMG 341）。つまり、主人公が殺人を犯す原因を、「貧しさ」、「社会的条件」（soziale Lebensbedingungen, HMG 343）に求める論である。

それでは、『レンツ』はどうか。

ここでも、社会的・歴史的視点から作品を解読する姿勢をH・マイアーは貫く。その姿勢が最も鮮明に出てくるのは以下の部分である。

「レンツの状態や運命をことによると思い起させるような可能性をゲオルク・ビューヒナーは自らの内部に感じる。ギーセンの重大な危機はそのことをすでに明確にしていた。時代やまわりの世界と接触がなくなり関係が喪失する理由は、彼にも十分にあった。その理由とは、才能や感じ方の途方もない隔たり、生活のリズムの相違、そしてとりわけ、社会の構造や政治的・社会的状態の未来に向けての深い洞察である。」（HMG 280）

H・マイアーがここで問題にしているのは、作者ビューヒナーの孤立である。彼には人並み外れた才能があった。時代を鋭く見通す眼識もあった。しかしそれゆえに、時代やまわりの世界から一人きりで孤立し、その孤立感が作者ビューヒナーを実在のレンツに近付けた。つまり、外界との関係の喪失という一点でこの二人の作家は共通し、彼らの孤立は時代と社会状況の所産だという論である。

なんと見事な物語だろう。戦後のビューヒナー研究で一つのスタンダードとなった彼の論は、しかし、その物語り

的な簡潔さゆえにいくつかの問題がある。

まず、『ヴォイツェック』論でたびたび彼が引用したビューヒナーの手紙である。そこにはこう書かれている。

「ぼくは誰も軽蔑しません。理解力がないからとか教養がないからとかということではまず絶対に。なぜなら、愚か者になるにしても犯罪者になるにしても、それはその人間の力の及ばぬことだし、もし我々が同じ状況にいたら多分みんな同じようになるからだし、その状況というのは我々の外にあるからです。」

原文では、右の引用文はワン・センテンスである。このワン・センテンスから「状況というのは我々の外にある」という部分のみをH・マイアーは取り出し、この「状況」を「物質的な生活の〈状況〉」、つまりは「貧しさ」の意味だと限定する。そこに問題はないか。同じ状況にいれば、人は愚か者にもなるし犯罪者にもなる。人間とは元来そうしたものだからぼくはその人たちを軽蔑したりはしない。これが、右の文全体の趣旨ではないのか。そしてこの趣旨は、以下の手紙の一節と呼応している。

「ぼくたちの中で嘘をつき人を殺し盗むものは何だろう？」[十六]
(Was ist das, was in uns lügt, mordet, stiehlt?)

人間を「愚か者」や「犯罪者」に駆り立てるもの、それを「何か」(was) という言葉でビューヒナーは表現し、これを問い続けた。ダントンやロベスピエールはその「何か」によって大量の人間を殺し、レンツはその「何か」によって「愚か者」となり、ヴォイツェックはその「何か」に駆られて「犯罪者」になった。そして、その「何か」と

は、いずれも、彼ら一人ひとりの意思を超えた外側の「状況」である。その状況を、たとえヴォイツェックだけに限ったとしても、「物質的な生活の〈状況〉」という言葉のみで限定できるのか。むしろ、言葉では規定できないものだからこそ、「was」という語で表現するしかなかったのではないか。

H・マイアーの解釈は合理的だしわかりやすい。しかしそれゆえに、ビューヒナーの文学を狭く限定し矮小化してしまう危険性がある。なぜなら、まさに、合理的な言葉では説明できない不可解なものと彼の文学は常に向き合っているからである。

また、『レンツ』論ではその上さらに方法論での問題もある。実在のレンツをビューヒナーは身近に感じていた(der sich verwandt fühlende Büchner, HMG 275)、H・マイアーはこう言い切って憚らない。しかし、その根拠は。実証性がない。そう言い切れる確証がない。さらに仰天するのは、作者の自伝と作品とを実に簡単につなげてしまうその論法である。

「ここでは(『レンツ』では)、体験と詩作の合体が問題であり、きわめて個人的な苦悩の芸術的な〈昇華〉が問題となる。それでビューヒナーの『レンツ』もまた真の告白となる。」(HMG 275)

ここも裏付けに乏しい。作家の自伝と作品との関連を述べるときには慎重にならなければならない。作家の人生から一つの事実を拾い、だから作品ではこう書かれたのだというときのその「だから」。ここには、いくらでも恣意の介入する余地がある。後に言及するが、トーマス・ミヒァエル・マイアーが強く批判するのは、従来のビューヒナー研究のこうした方法論の初歩的な問題だろう。

H・マイアーのビューヒナー論で、しかしながら興味深いのは『ダントンの死』の解釈である。ここでも彼は、作

中の登場人物と作者を重ねるという方法をとる。しかし面白いのは、ルカーチとは異なり、ロベスピエールではなくダントンとビューヒナーを重ねた点である。その説によれば、ダントンは「ビューヒナーと同義」（ein Synonym Georg Büchners）であり、「ビューヒナーの〈自らの人生〉の過程」（der „eigene Lebensprozeß" Büchners）がこの作品の中で形成されているという（HMG 204）。そしてダントンの退屈のモチーフには、「社会変革や社会改造の数多くの真の意志が隠されている」（HMG 207）のであり、彼の虚無や孤立は、革命の成果がブルジョワジーの利益になってしまうという客観的事実に由来するものだと見る（HMG 213）。要するに、ブルジョワ革命でしかなかったということに対する絶望という点で、劇中のダントンと作者のビューヒナーが重なるという主張である。

それではロベスピエールはどうか。ビューヒナーにとって、劇中のロベスピエールは「抽象的なイデオロギーを振りまわすルソーの亜流」（der abstrakt ideologische Rousseau-Epigone, HMG 216）でしかないと彼は断定する。もっとも、実在のロベスピエールとビューヒナーは一致しており、現実の歴史的位置関係は作者によって逆転されているとの留保を付けるのだが（HMG 218f.）。

ここにも、作者の人生と作品を安易に結び着けるH・マイアーの論法の特徴が認められる。しかしながら、社会史的立場に立つ研究者が、劇中のロベスピエールを切り捨てたという点では画期的である。この点では、ルカーチから離れたのだ。

【ポッシュマン】

ルカーチの流れを汲むH・マイアーの研究は、六〇年代、七〇年代、八〇年代の研究に多大な影響を与え続けた。彼の論を継承し発展させた研究者はドイツの内外を問わずあまたいる。その系譜に属する研究者の代表は、ヘンリー・ポッシュマンであろう。

一九八三年に彼が発表した『ゲオルク・ビューヒナー。革命の文学、そして文学の革命』(Georg Büchner. Dichtung der Revolution und Revolution der Dichtung)十七は、方法論的には、ビューヒナーの経歴や彼の時代の動きに目を配り作品との関連を考察するという点で、H・マイアーを継承している。しかし、ポッシュマンの代になると、自伝や時代に対する論考にきめの細かさと実証性が加わる。

たとえば、ビューヒナーの歴史観に対する議論である。ポッシュマンは基本的にはルカーチと同様、ビューヒナーは「平民の革命」をめざした作家だと見る。それを論証するにあたり、ビューヒナーのシュトラースブルク留学時代(一八三一年－三三年)に目を向け、この時期にビューヒナーはサンシモンやブランキらのフランスの思想家たちから決定的な影響を受けたと彼は考える。そして、富める者と貧しい者との間の階級闘争を一八三二年一月に宣言したブランキの思想と、一八三四年三月にビューヒナーが草案を書いた政治的パンフレットの『ヘッセンの急使』を結び付ける(PG 20)。さらに、その政治運動の仲間であったアウグスト・ベッカーの証言をもとに、ビューヒナーはブルジョワ革命ではなく貧しい者たちの解放をめざしていたと論じる(PG 65)。つまり、シュトラースブルク留学時代のフランスの政治思想の動向との関連の上で、ビューヒナーの革命観を実証的に裏付けようと試みたのである。

しかし作品解釈となると、H・マイアーの主張とそう大きく変わるわけではない。

『ダントンの死』に登場するロベスピエールをポッシュマンはこう見る。群集はパンを求めて苦しんでいる。しかし、劇中のロベスピエールは「抽象的にイデオロギー的に」(abstrakt-ideologisch, PG 107) 群集を導くだけで、内心ではそのことを途方もない重荷と感じ、結局は、群集にパンを与えられない。この点で彼は、ロベスピエールをダントンと同列に置く(PG 108)。また、サン・ジュストもここではまったく同様であり、この革命家は自らの権力維持のために戦っているに過ぎないと突き放す(PG 109)。

それでは、この劇を彼はどう見たのか。

「そこでビューヒナーは一十年後にマルクスが学問的に明らかにしたようにーロベスピエールのヒロイズムが〈途方もない欺瞞〉であることを文学的に明らかにした。〈大衆のどうにもならない欲求〉を満たさなければならないような社会的な革命（eine soziale Revolution）は、ブルジョワ革命をたとえどれほどラディカルに推し進めてみたところで、その政治的な方策だけでは達成できないものだった。」（PG 112）

ビューヒナーはつまり、「ブルジョワ革命」（die bürgerliche Revolution）の政治的・イデオロギー的限界をこの劇で明確に示し、そのことで、「ブルジョワ革命以後の社会的な民衆の革命の必然性」（die Notwendigkeit einer nachbürgerlichen sozialen Volksrevolution）を訴えた（PG 112）、これが、ポッシュマンの『ダントンの死』の解釈の中心である。

この解釈は一見、オリジナルなように見える。しかし、作者ビューヒナーと劇中のダントンを重ね、ダントンの倦怠や虚無感はブルジョワ革命への絶望が原因だと見る点では、H・マイアーの見解と変わりがない。違うところがあるとすれば、ダントンもロベスピエールもサン・ジュストも結局のところ「ブルジョワ革命家」で、ビューヒナーはこの劇でブルジョワ革命の限界を示すとともに、それ以後の「民衆の革命の必然性」を示そうとしたという点であろう。それはしかし、マルクス主義の歴史観に沿ったプログラムを劇の解釈に当てはめたに過ぎない。

それでは、『ヴォイツェック』はどうか。

ポッシュマンはこう論じる。ヴォイツェックの犯罪の責任は本来社会の側にあるのに、裁判では、その責任をヴォイツェック個人に背負わせた。これに対して、ビューヒナーは「唯物論者の視点から」（aus materialistischer Sicht）、ヴォイツェックが、「自ら放り出されている社会的状況の重圧のもとで、強制的な行為の出来事として殺人に駆り立

てられていく姿を示すとともに、そのことで同時に、自分が所有するたった一つのものであるマリーを殺してしまい自滅へと追い込まれていく姿を示した。」(PG 251)

この論もまた、「我々の外にある状況」(die Umstände außer uns) を重視し、これが殺人の原因であると見て、その状況を「社会的」(sozial) なものだと規定したH・マイアーの論とさほど変わらない。ポッシュマンが右の引用の中で言うその「社会的状況」(die sozialen Umstände) というのは、「唯物論の視点」から見た状況で、具体的には主人公が属している階級の「貧しさ」しか意味していない。

『レンツ』論でも、この「唯物論の視点」をポッシュマンは貫く。

彼はこう述べる。

「苦悩の原因をビューヒナーは形而上学的なものの中にではなく、社会的な現実 (die gesellschaftliche Wirklichkeit) の中に求めた。レンツの精神的な錯乱を個人とまわりの世界の救いようのない分裂として自ら診断すると、この問題の社会的な本質を臨床的な現象という形で明るみに出した。」(PG 176)

レンツは自己と外界との間での分裂に苦悩する。その苦悩は、神によっても高邁な「世界精神」(ein Weltgeist) によっても救えない。それゆえに、その苦痛と苦しみは「無神論の岩」(Fels des Atheismus) だとポッシュマンは言う (PG 177)。この限りでは彼の論に無理はない。しかし、それだから即、この問題の本質は「社会的」なものだと言い切れるのか。それだけではない。この苦痛と苦しみが、「唯物論に向かう彼 (ビューヒナー) 自身の倫理的な根本モチーフ」(das ethische Grundmotiv seiner eigenen Hinwendung zum Materialismus) であると方向付け、こ

の苦悩を、「抑圧された者たちや身分の低い者たちのすべてと文字通りビューヒナーが分かち合った苦痛であり人間的な苦悩」であると規定するとき（PG 177）、果たしてどれほどの妥当性があるだろうか。

短篇の主人公は、自我と外界との分裂に苦悩し、その苦悩には救いがない。これは確かだ。しかし、その苦悩ゆえに彼は孤立し、他の誰ともこの苦悩を分かち合えない。そこにこそ、この主人公の最も深い絶望がある。この点で、レンツの苦悩を階級の苦悩と結び付けるポッシュマンの解釈は本質から大きく外れてしまう。

その一つの原因は、主人公レンツと作者ビューヒナーを安易に重ねてしまったことにある。ポッシュマンは、「レンツは作者の原型だ」（Lenz ist Prototyp des Dichters, PG 168）と言い切る。そしてこれが下地となって、短篇『レンツ』の主人公の苦悩を社会的に抑圧された階級の苦悩と強引に結び付ける。その論の運びには、客観的に納得できる論証がない。

いずれにしても、ポッシュマンのこの『レンツ』論はH・マイアーの論のヴァリエーションであろう。自己と外界との間の分裂に焦点を合わせ、その分裂は社会的な問題であると規定し、主人公レンツの苦悩と作者の苦悩を重ねる。これらの点で、両者は本質的に同じである。

ポッシュマンは旧東ドイツの研究者である。そして彼のこの研究書が出たのは一九八三年である。H・マイアーの論がいかに強い影響を与え続けたか、その証左となるだろう。しかし、このポッシュマンも東西ドイツの統合以降の九〇年代になると論調を変える。その論は後ほど紹介する。

【アルベルト・マイアー】

旧東ドイツ出身のポッシュマンの研究には、ルカーチの論以降脈々と流れてきたマルクス主義のイデオロギーが濃厚に漂う。そのイデオロギー色をそれほど全面に出さず、「社会史的現実」（die soziohistorische Wirklichkeit）と

作品との関係を重く見たのがアルベルト・マイアー（以下、A・マイアー）である。

彼の研究の特徴は、一九八二年に出た『ゲオルク・ビューヒナーの美学』十八という論文に、はっきりと出ている。その論文で彼はこう述べる。ビューヒナーは、実在の人物について記した文書を素材にし、その素材の本質を見極め、これを作品の中で「先鋭化」（Verschärfung）し「発展」（Entwicklung）させた。これがつまり、「素材」（die stofflichen Elemente）と「作品」（Werke）との差異である（AMA 202）。

それではビューヒナーは何を本質と見たのか。A・マイアーはこう続ける。

「ビューヒナーのすべての作品の基底にある問題点は、社会的な関係から結果として生じてくる役割の強制にもとづく〈疎外〉（eine Entfremdung）にある」（AMA 203）。したがって、主人公たちには主体的な自立性がない（die fehlende subjektive Autonomie, AMA 203）。そこで問題になるのが、「社会的歴史的現実」（AMA 204）である。ビューヒナーは自らの観点に従い、この現実を切り取りこれを強調した。だから素材そのものではなく、作品の内容が現実性を与えることになる。要するに、ビューヒナーが素材をどう理解したのか、そこが問題であり、そこに彼の「美学」（Asthetik）がある。つまり、素材と作品との関係を「客体」（Objekt）と「主体」（Subjekt）との問題としてとらえた。

素材をどう解釈したのか、そこに作者の主体があり、それが形になったものが作品である。その関係はそのまま作品とその読み手との関係にも当てはまる、A・マイアーはそう考えた。言葉を換えれば、ビューヒナーは彼なりの解釈で素材に忠実に「現実」を作品の中で示したのだから、読み手もまたその「現実」に直面せざるをえない。そこでは、読み手の側の「現実」に対する姿勢もまた常に問われる。彼はここで、読み手の「主体性」を強調した。

A・マイアーのこの論の進め方は明解である。そしてこうした観点から研究したのが、この論文の二年前に書かれ

た『ゲオルク・ビューヒナー〈ヴォイツェック〉』（一九八〇年）十九である。

その解釈の基本はこうである。

「ヴォイツェックの運命は、誤った社会状況の中での一個人の生活条件の例として把握されるべきもので、人間の原則的な状況に関する社会批判的観点からのみ一般化されるべきものである。受容者は自らの社会的条件を考慮しながら、この誤った状況－つまり疎外－の評価にとりかかることが可能になる。」（AMW 74）

ここでA・マイアーは、「社会批判的観点」（die sozial-kritische Hinsicht）を強調する。ヴォイツェック事件は「誤った社会状況」（falsche gesellschaftliche Verhältnisse）の中で起きた一つの例にすぎない。肝要なのはその社会状況である。そしてその社会状況は特殊で個別のものではなく、普遍的なものとして批判的にとらえなければならない。なぜなら、その社会状況というのは、読み手が今いる社会状況と無縁ではないのだから。ここには、読み手の主体性を強調する先の論文の主張がそのまま認められる。

それでは、『ヴォイツェック』を彼は具体的にどう解釈したのか。

その要点はこうである。この劇は、「歴史的全体の再現」（die Wiedergabe der historischen Totalität, AMW16）である。その全体を示すために個々の場面はすべて関連している。こうしたビューヒナーの姿勢には、鑑定医クラールスへの批判がある。なぜなら、本来、「社会的状況」（die sozialen Verhältnisse, AMW 69）と個人との関係を考慮すべきなのに、この鑑定医はそこを見落とし、犯罪の責任を個人一人になすりつけたからである（AMW 69）。つまり、「誤った社会状況」の中でヴォイツェック事件は起きたのだとビューヒナーは判断し、その「誤った社会状況」の全体をこの劇で示し、あわせて、ヴォイツェックの犯罪を彼個人の責任にしたクラールスをこの劇で批判した。こ

れがA・マイアーの見解の骨子である。

この解釈は、社会的な状況を強調する読みという点で、H・マイアーの流れにある。しかし、これを基本とするもののこれを大きく発展させている。ことに注目すべき点は、ヴォイツェックの精神鑑定書に関心を向け、クラールスという医者の存在を重く見たことである。クラールスと劇中のドクターとの類似を彼は指摘し（AMW 49f.）、ヴォイツェックの裁判が当時社会的に大きな出来事であったことにも言及し、さらには、ビューヒナーの父が鑑定医として裁判で実際に働いていたという事実も挙げる（AMW 9）。

しかしそれ以上に重要なことは、「これまでのビューヒナー研究ではまったく考慮されていなかった」（AMW 19, 筆者強調）、一八三五年にフランスで起きたピエール・リヴィエールの殺人事件とヴォイツェック事件との関連をほのめかしたことである。A・マイアーはほのめかすだけで、具体的にはその関連について論じていない。しかし、社会的・歴史的状況を強調する研究者が、階級闘争というイデオロギーの枠組みから離れ、まさに社会的な出来事を具体的に追い始めた。これは皮肉ではなく、画期的なことだと言える。

こうした「社会批判的観点」に立つA・マイアーは、いわゆる「存在論的なビューヒナー研究」（die existentialistische Büchner-Forschung, AMW 72）を批判する。『ヴォイツェック』の登場人物たちが自らの状況や自らの行動を思い通りにできないのは、「彼らがそういう性質だから」という理由ではなく、「社会的な役割の強制」（der gesellschaftliche Rollenzwang）の結果である。それゆえ問題は、「アナーキーな社会システム」（das anarchische Sozialsystem）にある。ところが、「存在論的な」研究はそこを見ようとはしない。これが、その批判の要点である。

確かに、ダントンもロベスピエールも革命の指導者という「社会的な役割の強制」ゆえに苦悩する。レオンスとレーナも王子と王女という役割を背負う。「役割の強制」という概念は、ビューヒナーが用いた言葉で言い換えれば「人

形」(Puppe) であり、これは、彼の文学を把握する上で重要なキーワードとなることは間違いない。しかし、それを「社会的」とのみ限定できるのか。「我々は人形である」という言葉でダントンが表現しようとしたことは、人間の理念・道徳・意志などとは無関係に人間が「何か」(was) に振りまわされてしまうということではなかったか。そこでは自分など「ナッシィング」(Nichts) なのだ。「何か」によって糸を引かれる操り人形にすぎない。それでは何によって動かされるのか。それをダントンは「得体の知れぬ力」(unbekannte Gewalten) と言い、特定の言葉で限定せず広がりを持たせている。ビューヒナー自身もこの点に関して同様のことを手紙で書いている。二十

強いて言えば、その「何か」とは、さまざまな状況の中で突発的に出てくる本能的な衝動の類だろう。それを人は、状況次第では押さえられないときがある。その状況はしかしながら、A・マイアーの言う「社会的」なものばかりではない。たとえばそれは、『ヴォイツェック』でいえば、自分の目の前で自分の女が他の男と踊りながら体を熱くして「もっと！もっと！」と吐息まじりに言っているのを目にし耳にした瞬間の状況である。『レンツ』で言えば、死んだ子供が祈りもむなしく生き返らなかった瞬間の状況である。これらの状況を、「社会的な」状況だと断定できるのか。そこでは、「社会的な役割の強制」も「アナーキな社会システム」もそれほど関係ないように思える。ビューヒナーがそれらのさまざまな状況を通して描こうとしたものは、むしろ、状況次第で人間は瞬間的に頭が空白になり、その空白状態のままで自分の理念や道徳や意志などとは無関係に恐ろしいことをしてしまうことがあるということではないのか。それが人間であり、人間とはそういう闇の部分を内に抱え込んだ存在である。ビューヒナーは人間をそう見ている。その証左となるのが、「人間は誰でも一つの深淵だ。のぞき込めばめまいがする」(Jeder Mensch ist ein Abgrund, es schwindelt einem, wenn man hiabsieht.) という『ヴォイツェック』の初期草稿の中にある主人公の言葉だろう。二十一これは、ひとりの人間の中には何がつまっているのかわからないという意味での言葉である。そしてビューヒナーの文学は、つまるところ、その深淵の闇の中から何かが表に出てくる瞬間をそのまま写し取ろうとし

たのではないか。そうなると、A・マイアーが批判した「存在論的な」観点は、ビューヒナーの文学を考える上でどうしても不可欠のように思える。

実際、A・マイアーの『レンツ』の解釈では、社会的な状況がすべての原因だとする見解の弱点が露呈する。理由は簡単である。この短篇の主人公が社会的に疎外されていると解釈しようとしても、その裏付けがテクストからなかなか見つけられないからである。A・マイアーはそこで、カウフマンが持参したレンツの父親の手紙を問題にする。その手紙の内容は、そんなところでぶらぶらしていないで、きちんとした目標をもって生きろ、という類のものである。A・マイアーは、これが、社会的抑圧をレンツが受けている証と見て（AMW 16）、この外部からの「要求」（die Aufforderung）がレンツの病の原因であると判断する。ここには明らかに無理がある。テクスト全体の中で何が起こっているのか、それをこの解釈は少しも明らかにしない。

社会的状況を強調する研究は、『ダントンの死』や『ヴォイツェック』の解釈では勢い付く。しかし、『レンツ』となるとつまずく。その傾向がA・マイアーの論にも表れている。

三、存在論的立場からの研究

【コーベル】

この分野の代表はコーベルとヴィトコフスキーであろう。

まず、コーベルの『ゲオルク・ビューヒナー。文学作品』（一九七四年）[二二]である。

この論の特徴は、ビューヒナーの文学作品を通して人間の「自由」（die Freiheit）について考察することにある。社会的条件を重要な要素と見なすレーマンの論[二三]を意識して、彼はこう述べる。

「彼ら（レオンスとヴォイツェック、筆者注）の間には、出身、身分、教養、知性できわめて大きな違いがある。しかし、本質的なことでは一緒である。もし、区分けするものをことさら強調すればビューヒナーの意に背くことになるだろう。そんなものは、『馬鹿げた外見』（lächerliche Äußerlichkeit）と彼は見なしていた」（KG 287）。

この『馬鹿げた外見』というのはビューヒナーの手紙からの引用である。[二四]これと類似した主張は、『ダントンの死』のカミーユの台詞[二五]にも、『レンツ』[二六]にも認められる。要するに、金持ちであろうが貧乏人であろうが、インテリであろうが間抜けであろうが、中に詰まっているものはみな同じという人間観である。コーベルはここを基点として、貧富の差をとりわけ問題とする見解を批判した。

その彼の論によるとこうである。「金持ちは自由で貧乏人は自由ではない。とすると、自由とは、全財産を意のままに使える自由な力であり能力であるということになる」（KG 286）。しかし、ビューヒナーの作品に出てくる金持ちたちは決して幸福ではない。となると、金の有る無しの問題と自由とは切り離して考えなければならない。これが

彼の主張である。

しかし、その「自由」についての解釈には疑問もある。たとえば、ヴォイツェックが広野で聞く「刺し殺せ！」という声についての解釈である。この声に対してヴォイツェックはここで、「Soll ich? Muß ich?」と問う。この問いについてコーベルはこう述べる。

「この問いは、最終稿（die vorläufige Reinschrift）になって初めてビューヒナーがこの場面に付け加えたものである。このことは、ヴォイツェックには責任がない出来事としてこの殺人をビューヒナーが考えていたという主張に反することになる。ヴォイツェックの問いかけは、それ自体としてすでに、出口が開いている自由な行為である。」（KG 279）

この論の進め方は、客観的でもなければ正確でもない。声は、「すべきだ」（sollen）、「しなければならない」（müssen）と命じる。それに対してヴォイツェックは絶望的に問い返している。なぜなら、その声は彼にとっては絶対的なものだからである。それゆえ、むしろ、「必然」（das Muß）に縛られてしまう彼の姿がここでリアルに示されていると見るべきであろう。それを逆に、ヴォイツェックには選択の自由があるとこの場面の分析で断定し、「彼は計画通りに行動している」（Er handelt mit Vorbedacht. KG 279）と続ける。つまり、ヴォイツェックは自らの自由意思にもとづき殺人を犯したのであり、作者ビューヒナーはそのことをまさにこの場面で明示したと彼は論じた。

このコーベルの論は、並みの頭では理解できない。この議論は、そもそも、ヴィーゼの『ヴォイツェック』論[二七]への反論という形をとっている。そのヴィーゼは、ヴォイツェックには「自由な決定」（die freie Entscheidung）の余地などなく、「必然ならびに駆り立てられること」（ein Müssen und Getriebenwerden）こそ彼の殺人の根本だと

見ている。そこを批判し、ヴォイツェックの「自由」を立証しようとするこのコーベルの論は、あまりに裏付けに乏しい。

『レンツ』の解釈でもコーベルは「自由」を問題にする。

この短篇は「苦悩」が中心テーマである。彼はまずこうとらえた。この点では、フィエートアの論の流れを汲む。しかしその論証の段になると、フィエートアの論とはかなり異なる。コーベルは、婚約者のミンナに対するビューヒナーの関係と、フリーデリーケに対するレンツの恋愛をパラレルなものとして対置した。両作家が、ともに、愛する女を置き去りにして虚無的になったというのがその根拠である（KG 149f.）。そしてここから、短篇『レンツ』の主人公の苦悩の根源は「罪の意識」（der Schuldgefühl, KG 142）であると断定する。彼によれば、この「罪の意識」というのは、他者の苦しみを意識して苦しむことである。それゆえ、「そうした苦悩を自らに引き受けるのには決心がいる。このことは、完全な自由（in völliger Freiheit）のもとに起こる」（KG 158）となる。そしてここまで論じた後で、主人公レンツの苦悩はキリストの苦悩に近付くとの論を展開する。

この論には多くの無理がある。まず、実在のレンツの恋愛とビューヒナーの恋愛をパラレルに考えてもよいのか。実証的な説明がない。作者の自伝と作品とを安易につなげこれを解釈の土台にしてしまうという方法論の拙さがここでもまた認められる。さらに、「罪の意識」だけが主人公の苦しみの根源かどうか。テクストに即して考えてみると、そればかりとは言えない。簡単に言えば、コーベルもまた、この短篇の中で短篇の進行とともに起きている出来事が見えていない。主人公の苦悩は、この出来事と密接に関連しているきわめて具体的なものだ。そこをまったく等閑視しているので、「罪の意識」から来る主人公の苦悩とキリストの苦悩を重ねようとする彼の論は土台からぐらつく。

また、「完全な自由」の問題もこれと関連するだろう。短篇の中で起きている出来事の詳細を知れば、主人公レンツが「完全に自由」な立場で自らの苦悩を引き受けたとは到底考えられない。それに、至る所で登場人物たちの「自

由」を立証しようとするコーベルの解釈は、「必然」をあらゆる作品で問題にするビューヒナーの人間観とは対極に位置してしまう。

それよりも、コーベルの功績は、哲学史の中でビューヒナーを位置付けたことにある。「ヘーゲルはイデアリスムスを完成させ、シェリングは逆にこれを疑問視した」と彼は考える。なぜなら、「理性的な私として自らを理解していた人間が不可解なもの（das Unbegreifliche）の限界に突き当たることで、そのイデアリスムスが揺らいだ」からである。シェリングの哲学はこの体験にもとづくもので、スピノザの哲学の『限りないやすらぎ』（die unendliche Ruhe）から彼の哲学が遠ざかる理由はここにあり、デカルトの哲学に対するビューヒナーの異議もこのシェリングの哲学と同じだとコーベルはとらえる。その後でコーベルはこう続ける。

「『私がいるということ』（Das 》ich bin《）は別の形を求める。魂と肉体、精神と自然、自由と依存としてこれまで考えてきたことが変わる。ビューヒナーはデカルト的思惟の基本姿勢を攻撃した。そしてこれが、イデアリスムスに対する彼の攻撃が唯物論の立場（die materialistische Position）から生じたものではないということの証となる。なぜなら、唯物論の立場はデカルトの発端には触れずにそれをそのまま残しているからである。」（KG 323）。

要点は、「不可解なもの」に向き合ったという点で、シェリングの哲学とビューヒナーの文学は結び付くということだろう。「ここにいる私」を理由付け保障するものなどなにもない。「ここにいる私」は不安の中に放置されたままである。シェリングとビューヒナーが、デカルトやスピノザから離れる理由もここにある。パスカルとビューヒナーの共通性をコーベルが指摘するのもこのためである。そして、「唯物論の立場」は、合理性を重んじるという点で基本的にはデカルトの哲学の系譜にあり、これの焼直しにすぎない。したがって、「唯物論の立場」とビューヒナーの

文学は根本的に異なる。これがコーベルの主張だろう。

デカルトやスピノザやヘーゲルからビューヒナーが離れる理由を述べ、シェリングとビューヒナーを近付ける。哲学史でのこの見取り図は興味深い。なぜなら、ビューヒナーの作品の主人公のすべてが、この「不可解なもの」に突き当たっているからである。そして、老婆の語る童話二八で象徴的に表現されているように、彼の文学が「ここにいる私」の不安を常に問題にしていることも確かだからである。

【ヴィトコフスキー】

存在論の立場からの研究のもう一人の代表が、ヴォルフガング・ヴィトコフスキーである。コーベルと同様、彼もまた、ビューヒナーの文学作品の中で繰り返し表現される「不可解なもの」を問題とする。彼はこれを「通常の感覚ではとらえられないもの」(Transzendenz) と言い、一九七八年に発表した『ゲオルク・ビューヒナー。人物・世界像・作品』二九ではここを中心に論を展開する。

彼の『ヴォイツェック』論は、主人公の意志の自由をある程度認めるという点で、コーベルの論に似ている。しかし、そのニュアンスは微妙に異なる。

その論の展開はこうである。殺人者を含めて人間は己れの内部に「自然」(die Natur) を抱えている。その深さを測ることはできない。こうした観点では、フィヒテ、シェリング、ショーペンハウアー、パスカルの哲学とビューヒナーの人間観は共通している。にもかかわらず、現実の社会では、その不可解なものを内に宿す人間を裁かなければならないケースが出てくる。殺人はその典型である。そして、その裁く立場に実際に立たされた人物として、E・T・A・ホフマンの例を挙げる。周知のように、この作家は宮廷顧問官の職につき裁判官としての任務もこなしていた。そのホフマンの次の言葉をヴィトコフスキーは引用する。「地上の生に縛り付けられている我々人間には、自らの自

然の奥深さを測り知る力は与えられていない」(WG 276)。にもかかわらず、人は、法律的にも道徳的にも善悪を定め、人には自由があることを前提にし、やむをえず人を裁かなければならないときがある。ホフマンは、現実の局面でこうした立場に立たされ人を裁いた。そのホフマンの立場とビューヒナーの立場をヴィトコフスキーは重ね合わせ、「デミウルゴスとして、同情的な人間として、かつまた厳しい裁判官として」(als Demiurg, als mitleidiger Mensch und strenger Richter, WG 280) ビューヒナーは『ヴォイツェック』を創作したのだと考える。

興味深いのは、「刺し殺せ！」という声についての彼の解釈である。

彼はまずこう述べる。

「彼（ヴォイツェック）は、必ずしもすべて決定されているわけではない。むしろ、復讐衝動（der Rachetrieb）に駆られて、自分をここで決定してくれる宇宙的な道徳律（der kosmische Moralgesetz）を求めている。」(WG 310)

つまり、劇中のヴォイツェックには、自分の行動を自分の意思のままにできる自由が一部あったのだと彼は解釈した。このことをさらに明らかにするのが、クラールスとビューヒナーの位置関係を述べた部分である。

「この声は、すでに固められた殺意からのものだとクラールスが解釈した点では、ビューヒナーは彼に従う。しかしながらその一方で、クラールスのように、この声を幻覚もしくは迷信の所産にすぎないと片付けることはしない。この声は、大地の下から、風の中から聞こえてくる。それは、人間の内部に作用する自然の声だ。この自然は神と同一ではなく、神とは対極に位置する。ヴォイツェックはそういうことに対して勘がいい。彼は復讐したい。でも、それをこわがってもいる。自分の『内の』(in) 衝動が彼を不安にする。そして実際、そこから逃げている。」(WG 311)

作品論で詳述したが、クラールスはこの声を犯人の独り言であると断定し、この声を聞いた時点ですでに犯意が形成されていたと見た。簡単に言えば、もともと殺意があったから独り言を呟き、それを外部からの声だと錯覚したにすぎないという判断である。この点に関して、ビューヒナーはクラールスに従った（！）とヴィトコフスキーはあっさりと言う。つまり、殺意を認めるという点では、クラールスもビューヒナーも同じであったとの解釈である。その根拠はしかし、どこにあるのか。

この声に関するヴィトコフスキーの論を要約すればこうであろう。「彼（ヴォイツェック）は復讐したい、でもそれをこわがってもいる」(Er will die Rache, doch er scheut sie auch.)。そんなとき、自分を決定してくれる何かを求めていた。それが、「宇宙的な道徳律」であり、具体的には「刺し殺せ！」という声である。その声をヴィトコフスキーは、「自然の声」(die Stimme der Natur) と言い、「この自然は神と同一ではなく、神とは対極に位置する」(Diese Natur ist nicht mit Gott identisch, sondern der Gegenpol zu ihm.) と断言する。何という論理の展開であろう。「宇宙的な道徳律」、もしくは、「この自然は神と同一ではなく、神とは対極に位置する」というときのその「自然」がどういうものか、それを彼はここで明らかにしない。

問題はしかし、そういった思弁的な言葉よりも、ヴォイツェックにはもともと殺意があったと彼が解釈した点であろう。これは、ヴォイツェックの裁判と直結する。殺意があるとなれば、犯人の意志の自由を認めることになり、犯罪責任能力が有るとの結論に達する。現実の裁判では、常に、殺意は犯罪責任能力の問題と結び付いている。だから、ヴィトコフスキーの解釈を現実の裁判に適応すれば、ヴォイツェックの犯罪責任能力を認めることになり、この点では、ビューヒナーはクラールスに同意していたということになる。これは、ヴォイツェックの裁判に対するビューヒナーのポジションを考慮すれば、明らかに矛盾する。そのビューヒナーの位置については、第四部「『ヴォイツェッ

ク』と『レンツ』の社会的背景」で詳述する。

コーベルにしろヴィトコフスキーにしろ、声の解釈にはいくつかの疑問がある。彼らの論はこれを説明しきれてはいない。しかし、彼らはともかくこの声に正面から向き合おうとした。この点では評価すべきだろう。なぜなら、社会史的立場に立つ研究者たちはこの問題を見事に素通りしてきたからだ。ヴォイツェックがこの声を聞く原因は「社会的状況」のせいであるというのでは説明にならない。

それではなぜこの声を問題にしなければならないのか。それは、この「刺し殺せ！」という声をどう解釈するのかということが、クラールスの鑑定書でも、一八二四年のヴォイツェックの裁判でも、最も主要な問題となったからである。そして、ビューヒナーは戯曲『ヴォイツェック』の中にこの声をそのまま取り入れている。どのような立場に立とうが、この声と向き合わざるをえない理由はここにある。

さて、それでは『レンツ』をヴィトコフスキーはどう解釈したのか。

苦悩を通して神に至る。これが中心的なテーマだと彼は見て、主人公レンツとキリストをパラレルにとらえる。この点では、「宗教的な」(religiös) 観点から『レンツ』を読み解く論の代表と言える。しかし、本研究との関連では、「通常の感覚では知覚できないもの」に彼が注目したことが興味深い。

芸術論の中でエマオのキリストの絵について説明するときに使われた「何か不可解なもの」(etwas Unbegreiflicches)、墓地の壁から白い服をきて母が出てきたという夢、自分の父が死ぬ直前に野原で声を聞いたというオーベルリンの話、さらには「謎の文字」(Hieroglyphen)。こうした「通常の感覚では知覚できないもの」が『レンツ』の至るところに出てくる。ヴィトコフスキーはこれらに目を留めた。そして、こう論を進める。「作品の至るところ、さまざまなニュアンスで、不気味に、そして親しげに、何か (etwas) が人に近寄り、人に触れ、人に語りかけると

いうことが起こる」（WG 348）。これらは、実在のヴォイツェックが感じたことでもある。そして、実在のレンツもまた感じていた。「謎の文字」でフリーデリーケの死を確信したという話がその典型である。要するに、ヴィトコフスキーの言葉に従えば、「事物の背後にある領域が壁を通り抜けて日常の中へと侵入して来る」（WG 348）のを、この二人の実在の人物は体験している。つまり、「通常の感覚で知覚できるものと通常の感覚では知覚できないもの」（Immanenz und Transzendenz）の双方の領域にまたがってこの二人の人物は生きていた。そのことについて述べた彼ら二人の言葉が、オーベルリンの手記にもヴォイツェックの鑑定書にも記載されている。そこを念頭に置いてのことだろう、ヴィトコフスキーはこう述べる。

「オーベルリンのレンツの報告書は、『ヴォイツェック』に影響を与えた。そしてそれ以上に、逆に、クラールスの鑑定書が『レンツ』の狂気と通常の感覚を超えた感じ方との関係（der Zusammenhang zwischen Wahnsinn und transzendentaler Sensibilität）に影響を与えた」（WG 348）。

この指摘は非常に重要である。なぜなら、「狂気と通常の感覚を超えた感じ方との関係」という接点で、『ヴォイツェック』の素材となったクラールスの鑑定書と、『レンツ』の素材になったオーベルリンの手記とが共通していると指摘しているからである。したがって、クラールスの鑑定書が『レンツ』に、逆に、オーベルリンの手記が『ヴォイツェック』に影響を与えることが可能になるとの説である。こうした指摘は、それまでにも、これ以降にも、調べたかぎりでは見当らない。

実在のヴォイツェックと実在のレンツは、階級があまりに異なり、教養の程度も違う。従来の論はあまりにも強くそこにこだわり、この二人の人物の共通性などにはまったく気付かなかった。しかし、ヴィトコフスキーは両者に共

通するものを嗅ぎ付けている。しかもその接点を、「通常の感覚では知覚できないもの」に絞り込んでいる。ただ残念なことに、右に引用した以上のことは具体的に彼は何も述べていない。指摘だけにとどまっている。

ヴィトコフスキーの論は刺激的である。しかしながら、ヴォイツェックが広野で聞いた声を解釈する際に「宇宙的な道徳律」という言葉を持ち出したように、思弁的な方向に向かう傾向が強い。この声は、しかし文学的な作りものではない。実在のヴォイツェックが現実に聞いた声だ。それをビューヒナーはそのまま作品の中に取り入れた。そこには、作者の思弁的な解釈など一切ない。現実を写す、ビューヒナーがしたことはこれだけだ。しかも、この声こそまさに、ヴィトコフスキーが言う「通常の感覚では知覚できないもの」そのものであり、これは、「謎の文字」によって恋人の死を確信してしまった実在のレンツの感じ方と共通する。問題は、その感じ方である。ここに徹底的に注目すれば、『ヴォイツェック』と『レンツ』を結ぶ紐帯が鮮明に見えてくる。つまり、彼のビューヒナー論は、従来にはないまったく新しい解釈を切り開く出口まできていた。

【再びポッシュマン】

この章の最後に、再びポッシュマンに触れておく必要があろう。先に紹介した『ヴォイツェック』論では、「唯物論的視点」から見た「社会的な状況」を彼は強調した。その彼が、第二回国際ビューヒナー・シンポジウム（一九八七年）で、新しい『ヴォイツェック』論、『「あれが誰か読めないものか」《ヴォイツェック》における自然の記号の言語について』（一九九〇年）[三〇]を発表する。この論は、劇中の「記号」(Zeichen) に注目した点で非常に興味深い。

「『ヴォイツェック』の各場面の記号構造を分析すると、その固有の言語形態を超えて、原始的でノン・ヴァーバルな意志疎通の手段や定位付けの手段からなる、まだあまりにも注目されていない一つの層に達する。」(PS 441)

あのポッシュマンがいきなりこう始めた。その分析は具体的である。

「第一場から、自分が巻き込まれてしまいそうな不可解なもの（das Unfaßbare）についての説明を緊張しながら彼（ヴォイツェック）が求めている姿が目に付く。彼は、神秘的な記号に気付き、それらの推定的な確定できない意味についてあれこれ考え、自らのさまざまな不安を投影する物音に聞き耳を立て、最後には致命的な決定となるさまざまな声を聞く。」（PS 442）

簡単に言えば、さまざまな自然現象を記号として見ているヴォイツェックの姿に目を留めると、「まだあまりにも注目されていない一つの層」が見え始める、ということだろう。その層は、「原始的でノン・ヴァーバルな」（elementar und nichtverber）領域で、「ヴォイツェックだけがこれらの記号のすべてに対してそれを見る目を持ち聞く耳を持っているように思える」（PS 443）とポッシュマンは述べる。唯物論的視点をあれほどに強調したあのポッシュマンが、である。

この着眼は、「通常の感覚では知覚できないもの」（Transzendenz）について考察したヴィトコフスキーの論とつながる。ヴィトコフスキーが切り開いた出口の奥を、ポッシュマンは一歩進んだ。

ヴィトコフスキーやポッシュマンがここで問題にしていることは、ビューヒナーの言葉で言えば、「原始的な感覚」（der elementarische Sinn）のみで感じられる領域のことだと言えるだろう。いわゆる、通常の五感を超えた感覚で感じるものである。まったく別の立場にいた二人の研究者が、ここでクロスする。

さらに、ポッシュマンはこの論で、『ヴォイツェック』の筋の構成についても関心を示す。この劇の冒頭の場面に

注意すると、この場面が劇全体を支配する役割を果たしているのではないかと彼は考える。

「冒頭の場面は、何かに聞き耳をたて何かに目を凝らすように促すというその濃密な衝撃的な結果とともに、このテクストの受け入れに適合した受けとめ方を前もって配置しておくというねらいもかなりあって設置されている。」(PS 445)

つまり、この劇は通常の劇とは進行の具合が違うということが冒頭の場面であらかじめ読者に提示されているという解釈である。これは、「開かれた」(offen) 劇でのいわゆる「星位」(eine Konstellation) の冒頭の提示とも異なるものだと彼は言う。そしてこの後の論の展開で、「もっと！ もっと！」とか「刺せ、刺し殺せ」という言葉のリズムやさまざまな記号を手がかりにして、『ヴォイツェック』全体の各場面のつながりを彼は探し求める (444-451)。その主張は、これまで「開かれた」劇の典型であると誰もが認めていた定説に揺さぶりをかけるものとなり得る。

しかしながら、その論証は十分に整理されているとは言えない。各場面が関連し直線的に発展しているということをおぼろげに示そうとするものの、あくまで部分的なつながりのみで、冒頭の場面から最後の場面まで一本の太い筋が通っているということはとても証明し切れてはいない。

その理由の一つは、通常の感覚でとらえられるものと、それとは別の感覚で察知するものとを鮮明に区別しなかったことにあると思える。たとえば、マリーの姦通を主人公が察知する場面である。「そのうえ、一番信頼している女であるマリーが疑わしくなったとき、自分の疑いの確証をはっきりと読み取れるであろうわかりやすい記号を彼は捜している」(PS 442)。この限りにおいてはポッシュマンの論に問題はない。この場面では、本能的に強く感じているのに、その確証が目で得られないことに対する主人公の苛立ちが確かに強く出ている (Ich seh nichts, ich seh

nichts.)。しかしこれはまさに、五感で感じるものと「原始的な感覚」で感じるものとの隔たりを表すものだろう。そしてここでは、後者の方でより多く主人公がものを感じものを判断しているということが示されている。つまり、表に出てくる記号だけではつながりは見えてこない。むしろ、目には見えないものを直感してしまうヴォイツェック固有の「原始的な」(elementarisch) 感じ方に目を向けないかぎり、前後のつながりは見えてこない。

主人公のその「原始的な感覚」を『ヴォイツェック』のこの場面でビューヒナーは強調した。そして、主人公のこうした感じ方のみに関心を向けこれをテクストから拾い上げていくと、ポッシュマンの言う「まだあまりにも注目されていない一つの層」が鮮明に見え始め、同時に、場面と場面の緊密な関連が見えてくる。この点に関しては、作品論で逐一明らかにした。

いずれにしても、ビューヒナーが『レンツ』で問題にした「原始的な感覚」を重要視する研究が出始めている。これは、確かに、注目すべき新しい傾向だと思える。しかし、フィエートアはここをすでに十分に強調していた。

四、その他の流派

ルカーチとフィエートアの論争、社会史的立場からの研究、存在論的立場からの研究という分類でビューヒナーの研究史をこれまで概観してきた。しかし、これらの流れとは別の研究も当然あり、その分野は多岐にわたる。その中から、ここでは、本研究と関係のあるものをいくつか拾い上げてみたい。

【グンドルフ】

筆頭に挙げるとすれば、グンドルフの『ゲオルク・ビューヒナー』（一九三〇年）[三一]だろう。この論が発表されたのは、ルカーチとフィエートアの論争以前である。彼は、ゲーテの『ヴェルテル』や『ゲッツ』とビューヒナーの作品との関連に注目し、後者の文学の基本は、主人公の瞬間瞬間の「気持ち」(die Stimmung) を生きたまま作品の中に取り入れたことだと解釈した。この解釈が後に、ヴィーゼ、バウマン、クロッツ[三二]らに受け継がれ発展する。この系譜については、作品論で詳しく扱った。

【ヒンドラー】

ビューヒナーの作品の注釈書[三三]の著者として名高いヒンドラーの研究についても触れなければなるまい。『〈被創造物のこのしっぽの部分〉ビューヒナーの《ダントンの死》とボナベントゥラの《夜警》』（一九八二年）[三四] と題された論文に、彼の研究の特徴がよくでている。

この論文は題名が示す通り、『ダントンの死』とボナベントゥラの『夜警』（一八〇四年）[三五] とを比較した論である。すべての「理念」(Idee) を「茶化し」(parodieren)、この世は虚無だということを暴く。ヒンドラーによれば、

これが『夜警』の基本的なテーマだという（HS 323ff.）。そして、このテクストとビューヒナーのテクストとの関連を具体的に明示して、主題の面でも文体の面でも、ビューヒナーが『夜警』から多大な影響を受けたことを実証しようとするのがこの論文の意図である。

この論を読み進めていくと、確かに、『夜警』という作者不詳の作品のおもしろさがわかり、この作品とビューヒナーの文学との関連が見えてくる。「人生とは虚無にかぶせた殻の衣裳（das Schellenkleid）にすぎない」（BN 75）、「何もかもが役柄（die Rolle）である。役柄それ自体とその役におさまっている役者。そしてその役者の中にはまたぞろ、それなりの考えや計画や感激や茶番がおさまっている」（BN 119）。『夜警』の中のこれらの言葉が意味するものは、つまるところ、人生とはすべて役柄であり、人間は「衣裳をまとった自我」（das gekleidete Ich）にすぎず、その「仮面」（die Larve）を剝脱してしまえば「何もない」（Nichts）ということであろう。こうした人間観や世界観がビューヒナーの文学との接点になるとヒンドラーは考え、ビューヒナーの作品に登場する人物たちを念頭に置きながらこう述べる。

「人間たちは実際のところ外的な条件と内的な条件の犠牲者である。社会的に下層にいる登場人物たちを除けば、フィクション化された人物たちは（短篇『レンツ』は除く）職業上の役割（たとえば、大尉、ドクター、王、王子、家庭教師、郡長、校長などのように）もしくは歴史上の役割（ロベスピエール、ダントン、カミーユ、エローなど）の中で生きているだけである。」（HS 340f.）

そして、「苦痛」（der Schmerz）のみがそうした人間たちを役柄から個に（persona からPerson へ）帰す。ビューヒナーの文学は、結局、この苦痛と苦悩を主要なテーマとして扱っている。よって、ボナベントゥラの『夜警』と主

題の面で重なる。さらに、そのテーマを描く際に、パロディ化や職名だけの人物を登場させるという手法の点で、ビューヒナーは『夜警』から様々なヒントを得たのではないか。これが、ヒンドラーの論の基本である。

この論は非常に興味深い。これまであまり論じられていなかった作者不詳の作品とビューヒナーの文学を、主題や文体の面で関連付ける。「人生とは虚無にかぶせた殻の衣裳にすぎない」という『夜警』に出てくる言葉は、オーベルリンに退屈を嘆くときのレンツの言葉と重なるし、「何もかもが役柄である」との考えは、即、レオンスやヴァレーリオの主張と通じる。さらに、ペーター王や大尉やドクターを描くときの手法は、いずれも、自分が何かであると滑稽なまでに信じ切っている人間の軽薄さを浮き立たせるためのパロディー化の手法と言える。

ヒンドラーのこの研究は、ビューヒナーの研究史上では無視できないものだろう。しかし残念なことに、この研究を受け継ぎこれを発展させた論は調べたかぎりでは見当らなかった。

【ティーベルガー】

それともう一つ特に注目したいのが、リヒアルト・ティーベルガーの『レンツ』論（『《レンツ》を読みながら』、一九八三年）[三六] である。

「so」、「es」、「und」、「wenn」といった単語の頻繁な繰り返し、名詞形の連続、メルヒェンの語りとの共通性など、作品の中に出てくる言葉の特徴に目を向け、言葉だけから『レンツ』を読み解こうとする。その方法は、副文と主文の対比、感嘆符や疑問符、語りの視点の変化など様々に広がる。

たとえば、こうである。主人公レンツの心が穏やかなときには文体はノーマルなスタイルで書き進められ、逆に、不安や危機感が募るときは「構文上の混乱」（Syntaktische Zerrüttung）が見られることを指摘し、文体と内容との関連に常に注意を払う（TL 64）。

「es」の解釈もそうだろう。「es」の出てくる箇所を充分に拾いあげた後で、こう述べる。

「至るところでこの『es』は主人公の内面にその場を占め、その内面から主人公をせき立て駆り立てる衝動的で破壊的な力を表している。」(TL 52)

これらは、言語学的な側面から論を進め内容的な解釈へと向かう典型的な例だろう。

実証的というとき、とかく、資料の裏付けということが問題になる。これは、次の章で扱うトーマス・ミヒアエル・マイアーが最も強調する側面である。しかし、ティーベルガーのようにテクストの言葉に即し、言葉から裏付けを取ることもすぐれて実証的であると言える。そうした点で、彼のこの研究は非常に貴重である。

【シャオプ】

ビューヒナーの研究史をふりかえると、ティーベルガーのように言語学的な側面から研究するという分野がかなり貧弱なことに気づく。もちろん、これまで紹介してきたように文体について部分的に論じたものはいくつかある。しかし、それが論の基調となる研究は少ない。

たとえば、ゲルハルト・シャオプの『ゲオルク・ビューヒナー、レトリックの詩人。一つの研究観点』[三七]である。この研究は、ビューヒナーの学生時代の文章と『ヘッセンの急使』と『ダントンの死』との間に、文体面での共通性があることを明らかにしようとしている。しかしこの論文の中で、「群集(die Masse)のどうにもならない欲求」しか社会を変えないとビューヒナーは手紙で書いているのに、[三八]なぜ『ヘッセンの急使』を書いたのかという問題を扱い、結局それは、「レトリックの手段と持ち前の雄弁を駆使して」、「語りかけられる受手の意識」に働きかけるた

めであり、実際に変革を目ざしていたわけではないと続ける（176f.）。その論の展開にはいくつもの飛躍がある。一つひとつの言葉から裏付けをとって論を進め、その結果、大きな結論に達するという過程がない。いずれにしても、言葉および文体の研究は今後多いに必要とされる分野であろう。

【アーレント】

その他、比較的新しい『レンツ』の研究で目に付く一つの傾向があるので、これについても若干触れておく必要があるだろう。それは、「理想主義の時代（die idealistische Periode）が当時始まっていた」（GL 14）というテクストの一文を切り口に、ここから短篇を解釈しようとする試みである。

ディーター・アーレントは、『ゲオルク・ビューヒナー。ヤーコプ・ミヒァエル・ラインホルト・レンツについて。もしくは、〈理想主義の時代が当時始まっていた〉』（一九九〇年）[三九] と題した論文で、当時支配的であったイデアリスムスに対する批判がこの短篇の眼目だとの論を展開する。

彼はまず、「イデアリスムスで病むレンツの病を、イデアリスムスの病として、全時代の病としてビューヒナーは診断した」（AG 329）と見る。その根拠はこうである。

「彼の狂気は、現実を超え現実を去り無の中に消滅する半ば宗教的なイデアリスムスの潜在的な病である。〈精神分裂病〉の概念にこの現象を当てはめるにしても、以下のことを付け加えなければならない。即ち、ここでは、アイデンティティーとリアリティー、および、精神と現実との間の分裂が病理学的に急性のものとなり、両極端がそれぞれ独立してしまい、人間の統一が、つまり、人間のアイデンティティーが崩壊したのだ、と。」（AG 328）

要するに、イデアリスムスが諸悪の根源で、これが現実との分裂を生み、レンツを病に追い込んだという解釈である。

さらに、このイデアリスムスをアーレントはこう規定する。

「〈イデアリスムスの時代〉での支配的な精神は、同時に、時代を支配する精神でもある。それは、生活に苦しんでいる貧しい民や市民の心を、より高い心へ、知覚できる範囲を超えた一つの理念へ、知覚できる範囲を超えた一つの理想へ、慰めに満ちユートピア的でもあるが現実にはなり得ない一つの理想の国へ、崇高な一つの宗教と理想的な一つの神へと導く。」(AG 328)

なんのことはない。このイデアリスムスというのは、現実の社会問題の矛盾から人の目をそらせようとする支配者たちのまやかしの思想であり、レンツもその被害者であるという主張である。こうなると、ルカーチの系列に属する研究と本質的に変わらない。

『ピルガー』

アーレントと同じように、アンドレアス・ピルガーもまた「理想主義の時代が当時始まっていた」という一文に注目し、ここから論を進める。

『諸々の帰結としての〈理想主義の時代〉。短篇《レンツ》における理想主義についてのビューヒナーの批判的叙述』(一九九五年)四〇という論文で、当時のドイツ観念論と『レンツ』との関係を調べ、ビューヒナーがイデアリスムスを批判的に受容したとピルガーは論じる。

その際に彼が言及したのは、ギーセン大学で当時神学を教えていたクーン、ゼンパー、ヴァヒラーなどの論である。

要約すれば、一八三〇年代は、カントとヤコビに始まりフィヒテで頂点に達するドイツ観念論の輝かしい時代であり、その影響は文学にも色濃く認められ、短篇の主人公もその影響を強く受けている、という見解である。

その概略を示した後で、彼はこう述べる。

「想像され理想的にアレンジされた世界は現実のものではないという体験が、現実全般に、自我から独立している外界の存在に、疑念を抱かせるようにレンツを仕向けた。」(PI 124)

彼はつまり、レンツの狂気は「唯我的な想像」(die solipsistischen Vorstellungen, PI 122) と強く結び付いていると分析した。そしてこれと同じ傾向が、ティークの『有名な王アブラハム・トネリー』や『金髪のエックベルト』や『ウィリアム・ロベル』にも認められることを具体的に例証する (PI 120)。さらに、実現不可能な欲望や衝動にレンツがとらわれているという点で、フィヒテの『知識学』とも関連すると指摘する (PG 119)。

その結果得た結論はこうである。

「レンツを精神錯乱のように示すことで、ビューヒナーは主観的観念論 (der subjektive Idealismus) への批判を先鋭化させた。」(PI 122)

ピルガーのこの論は、ティークの文学との関連に目を向けたという点では評価できる。これまで、ビューヒナーとロマン派との関係はさほど論じられてこなかった。リアリストのビューヒナーとロマン派との接点などありようがないというのが大方の見方であろう。また、ロマン派とビューヒナーを結び付けることはフィエートアの論以来、避け

ようとする傾向があったように思われる。これもまた、非合理なものは排除するという戦後のナチズム批判と暗黙のうちにつながっていたのかもしれない。しかし、ピルガーが指摘する以上に、ビューヒナーはティークから影響を受けている。テーマばかりではない。文体の面で、とりわけ『レンツ』の文学的手法の点で影響がはっきりと認められる。

しかしながらピルガーは、「唯我的な想像」という一点からのみティークの作品と『レンツ』との関連を明らかにし、ビューヒナーはこれを批判的に受容したのだと判断した。しかし、必ずしも否定的な側面ばかりではない。むしろ、ティークの文学を積極的に継承しこれを発展させたと思える部分がかなりある。これらの点については、作品論で具体的に明示した。

『レンツ』の芸術論の導入部に出てくる「理想主義の時代が当時始まっていた」という作者による説明。この一文から、アーレントとピルガーは『レンツ』全体を時代との関連で解釈しようとした。しかし、ここを切り口として短篇全体を把握しようとしても、所詮無理であろう。なぜなら、時代背景との関連でテクストを読み込もうとするこの方法は、この短篇の中で発生しクライマックスに至り結末を迎えるという一連のつながり、つまりは、この短篇の中で起きている出来事をまったく眼中に置かないからである。主人公レンツの精神錯乱や狂気は、この出来事の各段階に応じて発生しており、そのときどきのレンツの精神状態を、作者は、禁欲的とも思えるほどに出来事に即して実に具体的に実に精密に（sehr konkret und sehr exakt）描いている。その出来事は、「理想主義の時代」との関連だけでは説明しきれるものではない。

五、マールブルク学派

マールブルク大学に拠点を置く研究者たちを、ここでは、「マールブルク学派」と一応名付けておく。トーマス・ミヒァエル・マイアー（以下、T・M・マイアー）、デットナー、ゲルッシュらがその中心的な研究者である。彼らは、一九八一年に『ビューヒナー年鑑』を発行したのを皮切りに、ビューヒナー研究の国際的なシンポジウムも企画し、まさに名実ともに、八〇年代・九〇年代のビューヒナー研究をリードしてきた研究者グループと言える。

『トーマス・ミヒァエル・マイアー』

その中でも、T・M・マイアーの存在は大きい。

一九七九年と八一年に刊行された『テクスト＋クリティーク』シリーズの『ゲオルク・ビューヒナー　I／II』および『同III』で、T・M・マイアーは、それ以前の研究を容赦なく批判し、あわせて、ビューヒナーの文学作品のテクストの不備・欠陥を指摘した。その批判の要点は、従来の研究のほとんどが正確で信頼できるテクストや資料にもとづいた上での研究ではなかったこと、研究者の思い込みや恣意や勘違いがビューヒナー研究を大いに歪めてきたこと、これらを具体的に示すことである。ビューヒナーの生きていた当時の政府から出された公文書や裁判の記録や同時代人の手紙などの様々な資料を両脇に置き、まさに、大鉈を振るう勢いでこれまでのビューヒナー研究をなぎ倒した。

彼の研究方法の特徴は、『ゲオルク・ビューヒナー　I／II』の巻頭に置かれた長大な論文『ビューヒナーとヴァイディッヒ。初期共産主義と革命的民主主義』（一九七九年）[四一]によく表れている。

T・M・マイアーはここで、『ヘッセンの急使』がブルジョワ社会を転覆させるために書かれたパンフレットであるとの説に反論する。その論法はこうである。

「両オーバーヘッセンでは、一八四〇年代の中頃では、鉄工所や綿紡績工場をのぞけば大きなマニファクチャーなどまだなかった。いわんや、五〇人以上の労働者をもつ工場などありようがなかった。」（TMMB 24）

つまり、『ヘッセンの急使』が起草された頃のヘッセン地方では、マルクスやエンゲルスが唱える資本主義の階級闘争が激化する時期よりもはるか以前の段階にあった。したがって、マニファクチャーすらなかった時期であり、プロレタリアートなど出現していなかった。その事実を資料にもとづき明らかにしようとする。その論はこう続く。

「大公国全体の平均で、一八三四年の低賃金労働者の比率は一三・四パーセントで、この数字は、自営業者や高級官吏の割合（一四・五八パーセント）と比べてみても少なすぎる。これらの日雇い労働者、使用人、手工業者、出版業者、職人などは、疑いもなく、（大公国ではまだまったく存在しなかった）工業化された資本主義の現代的で生産的な墓掘り人たちではなく、それゆえに、マルクスの共産主義の受け手の中心的な一団でもない。しかしながら、次第に浸透してくる古くて新しい惨めさの中で、最下層にいる者として彼らは新しい時代のプロレタリアートであり、その限りにおいては、マルクス以前の科学以前の共産主義の潜在的な受け手でもあった。」（TMMB 25）

要するに、T・M・マイアーがここで言いたいことは、一八三四年のヘッセンでは、資本主義もプロレタリアートも実質的には成長していなかったということであろう。そうなると、プロレタリアートの解放を目指すマルクス主義と『ヘッセンの急使』を結び付ける論が根拠を失う。それを、具体的に資料を挙げてT・M・マイアーは示そうとする。これが、いわゆる、彼の目指す実証的な方法である。

そしてこの論文で槍玉に挙げたのが、ヤーンケの著書『ゲオルク・ビューヒナー。作品の成立とアクチュアリティー。全作品への案内』（一九七五年）である。

ヤーンケはこう考える。

「ロベスピエールとジャコバン・クラブは、目標を見失った市民の怒りを政治的に組織化するために物質的および宗教的梃子を用いるグループとカリスマ的姿を示している。」（JG 216f.）

つまり、一つは、ロベスピエールとジャコバン・クラブは群集（die Masse）を充分に掌握し導いているということ、もう一つは、その彼の率いる党派の主張はビューヒナーの革命理論（「大衆」（die große Klasse）を動かすには「物質的および宗教的梃子」（materielles Elend und religiöser Fanatismus）しかないとビューヒナーは手紙に書いている四三）の表れであること、この二点をヤーンケは強調した。

これはほかでもない、ルカーチの言葉で言い直せば、ロベスピエールと群集は一体であり、ロベスピエールは「平民の革命家」（der plebejische Revolutionär）だということであろう。七〇年代半ばにルカーチの論を復活させたこの論は、社会史的立場に立つ研究者の流れとはいささか異なる。なぜなら、戦争直後のH・マイアーの論に始まり、ポッシュマン、A・マイアー、トゥロン・プリッカー四四らこの立場に立つ研究者たちは、劇中のロベスピエールをいずれも切り捨てているからだ。その理由は、ダントンと同様にロベスピエールもまた群集にパンを与えられないからである。だから当然、パンを求める群集とロベスピエールは一体ではない。これがその要点である。しかしヤーンケは、七〇年代半ばにそのロベスピエール像を否定し、ルカーチの論を復活させた。

そしてT・M・マイアーは、そのヤーンケの「ロベスピエールイスムス」（der Robespierrismus）に噛み付いた。

彼が問題にしたのは、『ダントンの死』の第一幕二場の群集場面である。「服に穴の空いてねえ野郎はぶっ殺せ！」、「読み書きのできる野郎はぶっ殺せ！」（DBT 57）。第三の市民、第一の市民はこの場面でこう叫ぶ。T・M・マイアーによれば、これらの言葉は、「習慣どおりにきわめて注意深く着込んだマクシミリアン（ロベスピエール、筆者注）の目の前でまさにこれ見よがしに」繰り返されたもので、「サン・スキュロットではないすべての者に対して」向けられており、ロベスピエールもその党派も例外ではない（TMMB 111）。そして右に引用した台詞の後で市民たちがロベスピエールに付いて行くが、これもまたT・M・マイアーによれば、ビューヒナーがこの場面で示したものは、「ヤーンケが見たように、ロベスピエールとサン・スキュロットの固い絆」などではなく、社会革命のエネルギーを「己れのジャコバン党の利益のためにデマゴーギッシュに役立てようとする」ロベスピエールの姿だと言い切る（TMMB 115）。

劇中のロベスピエールに対する批判はさらに続く。この場面では、ひとりの女がロベスピエールのことを「救世主」（der Messias, BDT 81）と言う。こうした預言者や占い師は、たとえば同時代人であったマルキ・ド・サドの手紙が示すように、[四五]フランス革命当時には実際に出現しかなりの影響力を持っていた模様で、『ダントンの死』の素材となったティールの歴史書にもその種の預言者の一人としてカトリーネ・テオの記述がある。[四六] T・M・マイアーはその点を明らかにした後で、ロベスピエールのこの登場は、ビューヒナーが意図的に描いた「華々しく誇張された戯画」（ein spektakulär übertreibenes Zerrbild, TMMB 115）であると断定する。つまり、「救世主」ヅラしていい気になっているロベスピエールをビューヒナーはここで意図的にパロディー化して描いたという解釈である。

デマゴーギッシュな言説を弄し群集の暴動を党利党略のために用いる。人から「救世主」と言われていい気になってそのつもりになる。こうしたロベスピエール観は、「用心深い臆病な小市民」と彼を決め付けたあのフィエートアの見方に通じるものがある。事実、『テクスト＋クリティーク』シリーズの『ゲオルク・ビューヒナーI／II』に掲

載した『ビューヒナー研究の最近の諸傾向。第一部』[四七]という論文の中で、このフィエートアのロベスピエール観を継承したと思われるモーリス・ベンの『革命の演劇』（一九七六年）[四八]に対して、T・M・マイアーは手放しの賛辞を贈る。（TMMT－I 339f.）

そのベンのロベスピエール観とはこうである。

「ビューヒナーの見るところ、ロベスピエールはフランス革命のスターリンである。」（BD 127）

この言葉がすべてを示している。さらに、テロにより物質的な窮乏から人の目をそらすそのやり方がヒットラーとも似ていると続ける（BD 130）。その論の進め方は多分に主観的で乱暴だ。たとえば、ロベスピエールとスターリンをダブらせるときの論述である。ダントンとの論争の後、ロベスピエールは一人きりで部屋にいる。そのとき誰かが来てぎょっとする彼の姿と、同じような状況でやはり怯えていたスターリンについて報告したソルジェニツィーンの文書[四九]の記述を並べ、両者が似ているからロベスピエールはフランス革命のスターリンだと導く。そこには、実証性などまるでない。客観性も著しく欠ける。それらを重んじるT・M・マイアーがなぜそこを見逃しさらに賞賛までするのか皆目わからない。

ベンのこの論のおもしろさは、むしろ、ハムレットやマクベスとダントンを重ねたり（BD 114f.）、オフェーリアとルシールとの類似を指摘したりする（BD 138）ところにある。その延長で考えれば、ロベスピエールが先の場面で一人怯える姿は、マクベスの怯えと充分に共通すると思えるのだが。ともかく、ベンの論に対する彼の評価は不可解であるとしか言いようがない。両者に共通するものがあるとすれば、劇中のロベスピエールに対する嫌悪だけだ。

ヤーンケの論ばかりではない。ベンの論をのぞけば、『ビューヒナー研究の最近の諸傾向、第一部』と題した論文の中で、従来のほとんどすべてのビューヒナー研究をT・M・マイアーは片っ端から手厳しく批判する。その具体例を若干紹介しておこう。

まず、先に紹介したヒンドラーの研究への批判である。この研究者は、『ビューヒナー・コメンタール』の著者として名高い。その彼の仕事をT・M・マイアーは、「一般的な仕事と個人的な仕事の中間貸借対照表」(die Zwischenbilanz der allgemeinen und persönlichen Beschäftigung, TMMT-I 329) と名付ける。ヒンドラー自身の個人的で趣味的な哲学問題を注釈書の中にふんだんに盛り込んだとの批判だろう。その哲学にしても、コーベルらの論を鵜呑みにしており、根拠を欠くことがしばしばで、その注釈は「人を誤りに導くばかりではなく、ディレッタンティズムへも向かわせる」(TMMT-I 330) と述べる。T・M・マイアーがここで言いたいことは、個人的な関心からではなく、それを越えた客観的な立場に立ち、正確な資料や幅広い研究にもとづいた注釈書が必要だということであろう。

また、メッツラー叢書のゲルハルト・P・クナップ著『ゲオルク・ビューヒナー』(一九七七年)五〇に対しては、「最もたちの悪いのは、誤った情報や誤った判断を決まり文句とほとんど識別しがたくごたまぜにしてしまうことである」(TMMT-I 335) とまで言い、その具体例を実に細かく指摘する。その他、アドルノやベンヤミンやラカン等とビューヒナーとの関係について論じたライマール・シュテファン・ツォンスの『ゲオルク・ビューヒナー、限界の弁証法』(一九七六年)五一については議論の段階で実証性に欠けることを指摘し (TMMT-I 341)、パスカルとビューヒナーを結び付ける先に言及したコーベルの試みは、「身の毛もよだつほどに思弁的である」(haarsträubend spekulativ, TMMT-I 341) とまで言う。ヘルマン・ブロイニング・オクターヴィオの『ゲオルク・ビューヒナー、人生、作品、死についての思考』(一九七六年)五二については、「ビューヒナーは市民的な名声とキャリアを得る途上

で、革命とただ一時的に戯れ合っただけで、それだけに臆病でもあり恥知らずでもあった」（OG 34f.）という論述の部分を取り上げ、いくつかの資料を示した後で、ブルジョワ共和主義者としてビューヒナーを位置付けようとする彼の論を真っ向から否定する（TMMT-I 350f.）。さらに、ロベスピエールをあがめるＤＤＲの論調に対しては、そうせざるを得ない何等かの理由があるのだろうとまで皮肉る（TMMT-I 355）。

Ｔ・Ｍ・マイアーのこれらの批判はかなりの部分で妥当性がある。しかし、そのすべてに客観性があり実証性があり納得がいくというわけではない。ベンの論の評価はその一例だろう。しかしながら、恣意を極力排して、きちんとした資料を整えて正確に論じる必要があるというその主張は強く伝わってくる。

そのＴ・Ｍ・マイアーの方法に問題があるとすれば、おびただしい資料をどう扱うかというその観点だろう。資料にもとづき一つの結論を導き出したとしても、資料の選択および資料の解釈には必然的に論者の主観が入る。資料を並べ、だからこうだと言うとき、そこには恣意が入り込む余地がある。彼が目指した方向は、一言で言えば、その恣意をできるだけ制限し解釈の精度を高めるということだと言える。

しかし、その彼もまた最後には自らの主観に頼らざるをえない。『《ぼくのことではすっかり安心できます》ゲオルク・ビューヒナーの家族宛ての手紙での論証の策略』（一九八三年）[五三]という論文で、家族宛てのビューヒナーの手紙をＴ・Ｍ・マイアーは問題にする。一八三三年六月に、フランクフルト事件について彼は両親に手紙を書き、そこで、この蜂起を「子供たちの革命ごっこ」（revolutionäre Kinderstreiche）と言っている。[五四]それなのに『ヘッセンの急使』をなぜ書いたのか、これがこの論文のテーマである。

Ｔ・Ｍ・マイアーはこの手紙を「みせかけの嘘」（die vermeintliche Lüge, TMMA 255）だと見る。そして、「正当化し安心させることがビューヒナーの家族宛の手紙の全般的な目的である」（TMMA 266）と断定する。その論拠

の一つに挙げたのが、息子の逮捕を心配している家族の様子をビューヒナーに伝えた伯父のロイスの一八三四年三月二四日付けの手紙（TMMA 265）、弟のルートヴィッヒの当時の回想（TMMA 265）、ビューヒナーの学友の急送を報道した一八三六年十一月十四日のヘッセンの新聞記事（TMMA 272）などである。これらの資料は、いずれも、政治運動に息子がかかわり逮捕されるのでないかとその身を案じている家族の不安を実証的に裏付けている。それゆえ、その家族を安心させるためにビューヒナーは嘘の手紙を書いた。彼はこう判断した。

しかし、そう簡単に結論付けてもいいのか。

「子供たちの革命ごっこ」と書いた先の手紙の全文はこうである。

「たしかにぼくは、自分の原理原則に従って行動するでしょう。しかし、変革を招き寄せることができるのは巨大な群集のどうにもならない欲求であること、一部の個人がどれほど動きどれほど叫ぼうがそれは無駄で愚かなこと、これを、新しい時代から学びました。ギーセンの田舎政治や子供たちの革命ごっこにぼくが首を突っ込んだりするようなことはないと思っていただいて結構です。」

この手紙の日付（一八三三年六月）と内容から見れば、およそ三ヵ月前の一八三三年四月三日に起きたフランクフルト事件のことを念頭に置いてこう書いたのだと考えていいだろう。このフランクフルト事件というのは、武装蜂起した五十名ほどの集団が歩哨の詰め所と税関を襲撃した事件である。ヤン・クリストフ・ハウシルトによれば、二千人あまりの職工と四万人ほどの農民がこれに呼応する形で外部で待機していたという。しかし、実際には彼らの支援がまったく得られず、蜂起は孤立し、一時間もすると鎮圧されたという。五五

この事件の経過を見ると、右に引用したビューヒナーの手紙は家族のことを配慮しての「嘘」であるとすぐさま断

定することはできなくなる。ビューヒナーはここで、社会を変革する主役は「巨大な群集」(die große Masse)であり「一部の個人」(die Einzelnen)ではないこと、そして、その「群集」は理念などではなく「どうにもならない欲求」(das nothwendige Bedürfniß)だけで動くこと、これを「新しい時代から」(in neuerer Zeit)学んだと書いている。フランクフルト事件はまさにその典型的な一つの事例として考えられる。なぜなら、「一部の個人」は動き叫んだのに「巨大な群集」は動かず、結局、「それは無駄で愚かなこと」(vergebliches Thorenwerk)だったからである。そうなると、フランクフルト事件を「一部の個人」の動きや叫びと見て、彼らの革命運動を「子供たちの革命ごっこ」と酷評したとしても不思議はない。むしろ、自ら思うところをそのまま家族に書き送ったという解釈も成り立つ。

アウグスト・ベッカーの証言はこれを裏付けるだろう。彼は後の『ヘッセンの急使』の運動の仲間の一人で、ビューヒナーはその彼にこう述べたという。「ドイツの状況をひっくり返すためにこれまで人がやってきた試みはまったくの子供じみた計算にもとづいている。」五六フランクフルト事件もその「試み」(die Versuche)の一つだろう。そして、ここでの「まったくの子供じみた計算」(eine durchaus knabenhafte Berechnung)という言葉は、先の「子供たちの革命ごっこ」(revolutionäre Kinderstreiche)という言葉と同義語だと見なせる。そしてこのベッカーに対してもビューヒナーは、「大衆の巨大な群れ」(die große Masse des Volkes)によってしか革命は起こらないことを強調している。

「巨大な群集のどうにもならない欲求」だけが社会を変える。「一部の個人」がどれほど動き叫ぼうがそれは無駄な愚行である。これと似た主張は、ビューヒナーの手紙でいくつか確認できる。周知のように、グツコーやハイネらの青年ドイツ派と彼は距離を保っていた。一八三六年の家族宛の手紙ではそのことに触れこう述べている。

「我々の宗教的および社会的理念を現代文学によって完全に変革することが可能であると人々が信じられるのは、

我々の社会的状況に対する完全な誤解からです。」[五七]

これは、「一部の個人」が理念を振りかざしていくら動きいくら叫ぼうが「無駄で愚かなこと」だという先の手紙の主張と通じている。さらにそのグツコーに対しては、一八三六年に直接こう書き送っている。

「社会を理念によって知識階級の側から変革する？　不可能です。我々の時代は純粋に物質的です。」[五八]

ここでもまた、「一部の個人」の理念の効力を否定し、「巨大な群集のどうにもならない欲求」だけを強調していると思われる。

手紙というのは複雑である。相手を安心させるためのカムフラージュとして書いたという解釈も充分に成り立つ。しかし、「新しい時代」を動かす主役は「巨大な群集」である、そしてその「巨大な群集」は理念などでは動かず、「どうにもならない欲求」だけで動く。この一点に関しては、ビューヒナーの主張は一貫している。

そして宿命書簡と呼ばれている婚約者ミンナに宛てた一八三四年の手紙である。この中でビューヒナーはこう書いている。

「個人など波間に浮かぶあぶくで、大物は単なる偶然で、天才の支配など人形劇で、固い掟に対する馬鹿馬鹿しい戦いであり、その掟を認識するのがせいぜいで、それを支配することなど不可能です。」[五九]

ここでの「固い掟」(ein ehernes Gesetz) とは、「巨大な群集のどうにもならない欲求」しか社会を変革できない

ということであろう。だからその動きの頂点に立ち人を導いているかのように見える大物や偉人など「巨大な群集」が操る人形にしかすぎず、彼らなど「あぶく」(Schaum) であり「単なる偶然」(ein bloßer Zufall) の産物でしかない。彼はここでそう言っていると考えられる。

そして、書簡から拾い上げたこれらの言葉は、ヤーンケを批判する際にT・M・マイアーが問題にした『ダントンの死』の群集場面（第一幕二場）にそのまま生かされていると思える。

一人の市民がここでこう始める。

「みんなすきっ腹を抱えて頭がおかしくなりそうなのに、あいつらときたら、たらふく食いやがって胃がパンパンよ。みんなの上着は穴ぼこだらけなのに、あいつらときたら、あったけえ服にくるまりやがってぬくぬくしてらあ。みんなの手ときたら豆だらけなのに、あいつらの手はつるつるよ。」(BDT 57)

すると、そこにいたもう一人がこれに呼応し、あいつらはやれ貴族をぶちのめせ、ヴェトーをぶっ殺せ、ジロンド派をやっつけろとあれこれ指図しやがって、こっちはその通り動いたのに、「俺たちゃ昔のまんま、脛をむきだしにして走り回ってんだ」(BDT 58) と叫ぶ。これで火が付く。裏通り全体が、何でもいいからともかく「ぶっ殺せ！ぶっ殺せ！」(Todtgeschlagen! Todtgeschlagen!) と口々にわめき散らす。

そこに気の毒なことに一人の若い男が通りかかる。この男はハンカチを出して鼻をかむ。すると、それは貴族のやり方だ気に入らねえと興奮した群集はこの男に襲いかかり、街灯で首吊りにしようと気勢を上げる。ところが、この若い男なかなか軽妙で、「どうでもいいけど、ぼくを吊したって明るくなりゃしないよ」(BDT 69) とやり返す。す

ると途端に緊張が解けて「ブラボー」(BDT 70) という歓声がわき起こる。

ビューヒナーはこの群集場面で、「群集」が「どうにもならない欲求」だけで動くことを強調している。口先だけの革命家たちに対する苛立ちや、金持ちに対する憎しみは、すべてこの「どうにもならない欲求」から出てくる。そこには、理念もなければ道徳もない。通りすがりの若者に対する反応がいい例だろう。ハンカチ一枚で首吊りの反逆罪だし、軽妙なウィット一つで即無罪放免である。なんという狂暴さ、なんという気紛れ。これこそが、ビューヒナーの映し出した「群集」そのものの動きである。

その狂暴さや気紛れは、しかし、けっして軽視できない。なぜなら、この劇の最も重要な局面で「群集」のこの動きが歴史を決定するからである。そこは、第三幕の九場から十場にかけての展開である。

九場の「革命裁判所」でダントンは最後の演説をする。「みんなパンが欲しいのに、奴らときたら生首を投げ出す」(BDT 528)。粛正が続く中で貧困感を募らせていた聴衆は、彼のこの演説に「激しく動かされ、喝采の叫び声」(ト書) をあげ、多くの者が「ダントン万歳！　十人組を倒せ！」(BDT 529) と叫ぶ。ところが続く十場での「裁判所前の広場」では、前場の熱狂の余波を受けるものの、途中からまるで言葉遊びのように、誰が裏切り者かという市民たちのやりとりが始まり、このかけ合いから勢いを得た一人の市民がダントンの生活をやおら糾弾する。

「ダントンはいい服を着ていい家に住みいい女と暮らし、酒をあおり、銀皿で鹿肉を食い、酔えばみんなの女房や娘と寝る。／ダントンはみんなと同じように貧乏だった。どこからあいつはごっそり手に入れたんだ。／ヴェトーが王位を守ってもらおうとあいつを買収したからよ。／オルレアン公が王位を横取りしたくってあいつに贈ったからよ。／みんなを裏切れって外国人がそそのかしたからよ。／いいか、ロベスピエールは何を持ってる？　正直者のロベスピエールは。みんなよく承知のはずだ。」(BDT 541)

ダントンを吊し上げるこの激しい調子は、広場にいる「群集」たちにたちまち伝わり、今度は、全員が「ロベスピエール万歳！　裏切り者を倒せ！」（BDT 542）と合唱する。

この場面でもまた、「巨大な群集のどうにもならない欲求」をビューヒナーは前面に出す。右の市民の台詞はダントンの物質的な豊かさのみを集中的に攻撃している。その一つひとつが、「巨大な群集のどうにもならない欲求」をことごとく刺激し、怒りと憎悪をあおり、これがダントン処刑になびく決定的で唯一の要因となる。そこには、第一幕二場の群集場面と同様、理念もなければ道徳もない。はたして、国王やオルレアン公や外国人たちとダントンは実際に結託していたのか。それらを事実として確認できる証拠があるのか。むしろ、それらは噂やデマの段階だろう。しかしそんなことは「巨大な群集」にとってはどうでもいい。自分たちは食うものもなく腹を空かせている、この一点だけは事実なのだから。

この第三幕九場から十場の流れは、劇全体から見てもとても重要である。なぜなら、ここで、この劇の題名である「ダントンの死」が決まるからである。ビューヒナーはここにロベスピエールもサン・ジュストも登場させない。「巨大な群集」だけである。つまり、あの狂暴で気紛れな「巨大な群集」がダントンの死を決定していく様子をビューヒナーはこの場でしっかりと描いたのである。

「群集」の動きを中心にして『ダントンの死』を読み解く。すると、一つの鮮明な歴史観が浮き上がってくる。それは、歴史を動かし歴史を決定し歴史を支配する主体は、この劇では、ダントンやロベスピエールやサン・ジュストという「一部の個人」ではなく「巨大な群集」だという観点である。ダントンとロベスピエールの戦いなど、実質的には何の意味もないし何の力にもならない。言ってみれば、「あぶく」どうしのぶつかり合いである。重要なのは波の動きのほうだろう。そしてその波の動きを作り出すのはこの劇では「巨大な群集」である。つまり、ダントンやロベ

スピエールなどの「一部の個人」がこの劇の主役ではなく、「巨大な群集」こそ主役だと考えられる。六〇

社会変革について言及しているビューヒナーのいくつかの手紙、そして、そこでの主張と密接に関連していると思われる『ダントンの死』の群集場面。これらを考えあわせてみると、「正当化し安心させることがビューヒナーの家族宛の手紙の全般的な目的である」と断定するT・M・マイアーの見解は疑問視せざるをえない。家族宛であろうと、婚約者やグツコー宛てであろうと、ビューヒナーはいつも一貫して、「一部の個人」の社会変革運動を「無駄な愚行」と言い「大衆のどうにもならない欲求」しか社会変革を招かないと主張している。しかもその主張は『ダントンの死』にも鮮明に認められる。

そうなると、「子供たちの革命ごっこ」と書いた一八三三年六月付けの手紙は、「みせかけの嘘」どころか、逆に、ビューヒナーの歴史観を知る上できわめて重要な書簡だと見なせる。両親を安心させるための嘘などではなく、むしろ、「新しい時代」から学んだことを率直に書いたものだと考えられる。

そしてこの手紙に書かれていることは、フランクフルト事件の二日後の一八三三年四月五日付けで両親に書き送った手紙の内容と合致している。この手紙の中で彼はこう書いている。

「ぼくは事件に関与していません。そして、もしかしたら今後起こるかもしれないこの種の事件にも関与しないでしょう。その理由は、認めていないからとか恐いからだとかというのではありません。それはただ、現在の時点ではどんな革命運動も無駄な試みだと思っているからであり、ドイツ人たちは自らの権利のために戦う準備ができていると見ている者たちの思い上りには付き合えないからだけです。フランクフルト事件はそのような愚かな意見の結果であり、その誤りの償いは重いものでした。」六一

ここでも、結局のところ主張は同じだろう。「巨大な群集」が動かぬ限り革命は起きない。「一部の個人」が先頭を切って旗を振ったとしても、機が熟さなければ「無駄な試み」でしかない。そして、この時点でドイツの「巨大な群集」が動き出す準備ができていたと判断したのは「思い上がり」だとビューヒナーは批判し、その読み違えのために蜂起は無残にも失敗したのだと冷静に分析している。要点は、社会の変革が起こるとすれば「巨大な群集のどうにもならない欲求」からだけでしかないということだろう。三ヵ月後の両親宛の手紙は、自らのこの認識を再確認したものだと見なせる。

それでは、ビューヒナーはヴァイディッヒ等とともにこの後なぜ人権協会を組織し『ヘッセンの急使』のパンフレットを配布する運動に加わったのか。T・M・マイアーの見解を批判するとすればこの問題が残る。これは、この場ではとても論じきれない。しかし、右に引用した手紙との関連で一つだけ考えてみたい。

『伝記的そして政治的疑問、《ダントンの死》。ヘッセンの民主主義者ヴィルヘルム・シュルツ、および、ゲオルク・ビューヒナーとフリートリッヒ・ルートヴィッヒ・ヴァイディッヒについての彼の文書』（一九八三年）[六二]という論文で、ヴァルター・グラープはこの点について興味深いことを述べている。政治学者および社会学者で後にマルクスにも影響を与えたというヴィルヘルム・シュルツとビューヒナーの交流に彼は注目し、『ヘッセンの急使』の結果をビューヒナーがどう受けとめたのかということについてのシュルツの言葉を引用しながらこう述べる。

「ビューヒナーはしかしこの失敗に気を落とさなかった。他の多くの者たちだったら失望のあまり民衆に背を向けていただろうに、この革命的な詩人はそうではなかった。『若い農夫たちが政治的なパンフレットを読むよりも恋人のところへ行きたがる』のを彼は理解し、『貧窮がまだ充分にひどくはない』とそこから結論付けた。というのも、

革命の権利は民衆の側にあると彼は思っていたので、『革命をしないのもまた彼らの権利だと思っていた』からである。」(GH 236)

ビューヒナーは落胆しなかった。そして、「貧窮がまだ充分にひどくはない」(daß die Not noch nicht groß genug sei) との結論を下したとシュルツは伝えている。このことは、『ヘッセンの急使』の起草および配布を考える上で一つの参考になるだろう。つまり、『ヘッセンの急使』で「巨大な群集」の一斉蜂起をビューヒナーは思い描いていたのではない。先の手紙の言葉を用いれば、「現時点で」「ドイツ人たちは自らの権利のために戦う準備ができている」かどうかを知るためにパンフレットを配布する活動に参加した。そしてドイツの「巨大な群集」の反応の結果を冷静に受けとめた。こう考えることが可能になる。

「巨大な群集」だけが社会変革を可能にする。これは、書簡でも『ダントンの死』でも鮮明に認められるビューヒナーの一貫した認識であると思える。こうした歴史認識は、しかし、ビューヒナーにのみ固有のものではない。その一つの例としてカザノヴァを挙げたい。彼はあの有名な『回想録』の中で、一七八九年のフランス革命を横目に見ながらこう述べている。

「現在、フランスはフランス人の祖国だろうか？　なるほど、今までもしばしば逮捕を旨とした封印状政治によって成り立っている憎むべき専制政治の不愉快さを見ることもあったが、それはひとりの国王の専制だった。しかし今後のフランスは民衆の専制がどんなものであるかを見せてくれるだろう。」[六三]

怪しげなカバラの魔術を操り、貴族の手厚い保護を受け、貴族と交わり、自らも貴族に近いと感じていたカザノヴァにとって、一七八九年の民衆の一斉蜂起は苦々しい思いしか感じさせなかったに違いない。しかし、たとえそうした立場からの観察であったとしても、『回想録』のこの言葉は一人の同時代人の貴重な証言となる。

カザノヴァはここで、革命以前は「ひとりの国王の専制だった」と言い、革命以後は、「民衆の専制がどんなものであるかを見せてくれるだろう」と冷ややかに述べる。そしてこのすぐ後に、その「民衆の専制」について手厳しく彼はこう批判する。

「それは、つねにはめを外し、残忍で、感情を抑え得ない民衆の政治で、彼らは群れ集まり、絞首刑を行ない、首を切り、民衆にふさわしからぬ意見をあえて言うものを暗殺するのである。」六四

一七八九年を境に時代は変わった。「ひとりの国王の専制」から「民衆の専制」へと移り、その「民衆の政治」というのは、群れ集まり、つねにはめを外し、反対意見を言う者がいればその首を切る。カザノヴァはこう言い切る。所詮、女惚しの戯言。甘く見たところで、せいぜいが、プチ・ブルの民衆に対する恐怖と嫌悪。そう見ることも可能だろう。いや、これが一般的かもしれない。

しかし、ビューヒナーが『ダントンの死』で描く「群集」とこのカザノヴァの言葉を照らし合わせてみると、にわかに共通点が浮き上がる。通りすがりの若者に対するリンチの場面がそうだろう。先にも述べたように、この場では反対意見はおろか、ハンカチ一枚でもう絞首刑の反逆罪だし、気の利いた一言で無罪放免である。その「群集」の姿は、まさに、「つねにはめを外し、残忍で、感情を抑え得」ず、「彼らは群れ集まり、絞首刑を行ない、首を切り、民衆にふさわしからぬ意見をあえて言うものを暗殺する」というカザノヴァの言葉と驚くほど符合する。そして、狂暴

で気紛れなこの「群集」がビューヒナーの劇ではダントンの死を決定する。これをカザノヴァの言葉で言い直せば、「ひとりの国王の専制」ではなく「民衆の専制」であるということになるだろう。

「新しい時代」では「ひとりの国王」が歴史を動かすのではなく「群集」が歴史を支配する。それを嫌悪感をもって見るか否かの違いはある。しかし、カザノヴァもビューヒナーも、フランス革命で歴史の舞台の主役に躍り出た「群集」に目を向けざるをえなかった。この点では共通の認識を持っていたと言えるだろう。

いわゆる実証的な研究を重んじるT・M・マイアーは、ビューヒナーの家族の不安を伝える資料を並べ、「正当化し安心させることがビューヒナーの家族宛の手紙の全般的な目的である」と見て、そこには「みせかけの嘘」があると断定した。しかし、資料の選択およびその最終的な判断には彼の主観が入っているように思える。実証的という言葉は現在のところビューヒナー研究のキーワードになっている。その姿勢は研究の正確さと質を高める上で不可欠であることは間違いないしどうしても必要なことだ。しかし、それでもなお、資料の扱いや最終的な結論の段では依然として論者の判断が求められる。ビューヒナーの家族宛への手紙を問題にしたT・M・マイアーの論文はそのことを明瞭にしたと言えるだろう。

☆

T・M・マイアーのもうひとつの重要な仕事は、ビューヒナーの文学作品としてこれまで出版されたテクストへの文献学的な批判である。ビューヒナー研究史の上から見れば、こちらの方がはるかに意義があるかもしれない。

『テクスト＋クリティク』シリーズの『ゲオルク・ビューヒナー　Ⅲ』（一九八一年）におさめられた論文『ビュー

ヒナー研究の最近の諸傾向について。第二部』[六五]の冒頭で、従来のテクストの問題点を彼は厳しく批判する。それを要約すると以下のようになる。

(一)、内容の分析にしろ形式の分析にしろ、ビューヒナー研究の方向を決めた従来の研究は、無批判に編集されたテクストにもとづくもので、信頼のおけるテクストにもとづいていない。

(二)、原典にもとづき注釈の付いた完全な全集がまだ出版されていない。

(三)、伝記、作品、受容に関する十分な資料の裏付けが欠如している。

(四)、歴史的、文学史的、伝記的前提や関係に関する納得のいく概説や役に立つ手引書がない。

(TMMT- II 265)

ビューヒナー研究にとって、この四つの指摘は画期的なものだと言える。T・M・マイアーはここで、信頼できるビューヒナー全集を編纂することの必要性を強く訴えている。資料で客観的に裏付けられる事実、その事実にもとづいた注釈。こうしたことを一つひとつきちんと整理することによって、初めて全集ができる。それを、これまでのビューヒナー研究はまだ行なっていないという指摘である。まさに、当然出るべくして出た主張である。そして、これ以降のビューヒナー研究は、多かれ少なかれ、彼の提唱したこの四つのことがらに縛られる。冒頭でこう提唱した後で、T・M・マイアーは、従来のテクストの編纂の歴史を概観し、その一つひとつの問題点を具体的に明らかにする。レーマンの編纂したテクストに対する批判はことのほか厳しい。いくつもの資料にもとづいた事実を提示し、レーマン版の注釈が事実といかに相違しているかをつまびらかに示し、あわせて、個々の単語の読みやプンクトの付け方に至るまで誤りの例を挙げる。その中でもとくに問題にしたのは『ダントンの死』のテクストである。T・M・マイアーに

よれば、当時出版された『ダントンの死』のテクストをビューヒナーは友人のシュテーバーとブラウンに献本したという。その際に、ビューヒナーはいくつか手書きで書き込みを入れた。レーマンはその書き込みをオリジナルのテクストに取り入れ、これを『ダントンの死』のテクストとして提示しているという（TMMT- II 277）。T・M・マイアーが容赦しないのは、文献学的に曖昧なこのようなレーマンの姿勢である。

結論から言えば、『ヴォイツェック』に関しては、一九八一年に出たファクシミリ版（ゲルハルト・シュミット編纂）六六が原典に最も忠実だとT・M・マイアーは考え、これをヴァイマール・アウスガーベ（略号WA）と名付け、この版になって初めて『ヴォイツェック』のきちんとしたテクストができたと言い切る（TMMT- II 291）。しかし、このファクシミリをどう読むのか、そこにもやはり問題はある。いずれにしても、近々、このT・M・マイアーが中心になってビューヒナー全集が出るとのことである。その全集の完結を目下のところ、世界中のビューヒナー研究者が待ち望んでいる。

その前の段階なので、『ヴォイツェック』の論を進めるにあたり本論では、一応、レーマンの編纂したテクストを用い、あわせてボルンショイアー版、六七ヴァイマール・アウスガーベも参照した。T・M・マイアーの全集が出た段階で、この問題は充分に考えなければならないだろう。

『テクスト＋クリティーク』シリーズでT・M・マイアーが果たした功績は、ビューヒナー研究史上では測り知れないものがある。ことに、一九七九年に出版された『ゲオルク・ビューヒナー　I／II』は、彼の単著と言ってもいいほどに彼の論文で占められている。さらに、この彼が編集者のメンバーの一人となって『ゲオルク・ビューヒナー年鑑』第一号が一九八一年に出る。そしてこれ以降、この雑誌が世界のビューヒナー研究の中心となる。そう見れば、まさに、現代のビューヒナー研究の基盤を整えた研究者と見なせるであろう。

『デットナー』

T・M・マイアーと並ぶもう一人の重要な研究者がブルクハルト・デットナーである。彼もまたマールブルク大学に拠点を置く。

『ビューヒナー年鑑』第八巻（一九九五年）に発表された『ビューヒナーの《レンツ》テクスト発生の再現』[六八]には彼の研究方法の特徴がよく出ている。素材との密着度・時間経過・語りの構造の三つの観点から『レンツ』を分析し、創作過程に応じてこの短篇を三段階に分解する。目新しい点は、彼自らが「Berichtpassage」（DL 9）と名付けた部分の解釈だろう。その部分とは、「彼の状態はそのうちますます絶望的なものになっていった」（GL 27）という文から始まり、「彼はしばしば壁に頭をぶつけた、さもなければ、自分の体に激しい肉体的苦痛を加えた」（GL 29）という文で終わる一つの段落である。この箇所には、「彼には憎しみもなければ、愛もなく、希望もなかった、恐ろしい空虚だけだった、そしてその空虚を満たそうとする拷問のような苛立ちがあった」（GL 27）、「自分のしていることには意識はあった、しかしその自分を動かすものは内面的な本能だった」（GL 27）、「自分が一人きりで存在しているかのような気がした、世界はただ自分の空想の中にしかなく、自分の他にはなにもなく、自分は永遠に呪われたもの、サタンであるような気がした、自らの身と心を苛む想像を抱え込んだまま一人きりで」（GL 28）等の文がある。

デットナーは、この箇所は「報告し説明する語りの形式で」（mit einer referierend-erklärenden Erzahlform, DL 9）書かれたもので、他の部分から浮き出ており、これを「補遺」（die Paralipomena, DL 68）として考えてみてはどうかと提案する。要するに、『ヴォイツェック』のテクストのH3（「教授の中庭」、「白痴、子供、ヴォイツェック」の二つの場面。この二つの場面は他の場面とはつながらないと考えられており、通常、補遺のような形で扱われる）

に相当するものだと考えた。

この提案にはいくつか問題がある。素材への依存度、時間の経過、語りの形式の変化などを物差しにして、素材と作品とを比較することはある程度可能だ。しかし、ビューヒナーがどういうプロセスでテクストを創作したのかということを再現しようとするこの種の議論は、常に推測の域にとどまる。そのため、創作段階に応じて三つの段階に分けるというその根拠が必ずしも鮮明にはならない。

それよりももっと決定的な問題がある。彼が言うこの「Berichtpassage」は、フリーデリーケの死を「ヒエログリフ」(Hieroglyphen)を通して確信したとレンツがオーベルリンに話す直後に置かれている。その会話とはこうである。

「牧師さま、ぼくがあなたにお話ししたあの女性は死にました、はい、死んだんです、あの天使のような人は。・・・どうしてそれがわかったんですか？　・・・ヒエログリフです、ヒエログリフ・・・、そしてそれから天を仰ぎ、そして繰り返した、はい、死んだんです・・・ヒエログリフです。」(GL 27)

この会話が意味するものをデットナーは軽視している。これは、この短篇を解釈する上では決定的に重要であり、ここは、この短篇の転換点(Wendepunkt)となる。なぜなら、「ヒエログリフ」を通して、遠いところにいるフリーデリーケの死を主人公が確信してしまったことを作者はこの会話で明示しているからだ。この「ヒエログリフ」というのは、謎の文字とか神秘的な記号といった類のもので合理的には説明できない。そうしたものを通して愛する者の死を確信するということは、この短篇の言葉に即して言えば、「原始的な感覚」を通して人の死を直感するということである。つまり、フリーデリーケが死んだことをレンツはここで初めて本能的に直感し確信したのだ。

愛する者が死んでこの世から消えた。その後には何も残らない。デットナーが名付けた「Berichtpassage」の段落

で作者が強調していることは、先に引用したように、主人公が「空虚」(das Leere) の中に一人きりでいると感じていること、そして、心と体が狂ったようにひとりでに動き出すことである。何のことはない。筋はきわめて単純である。愛する者が死んだから、この世に一人きりでいると感じ、その苦しみの中で心と体がひとりでに狂い出した。「Berichtpassage」はその主人公の精神状態や心の状態を精密に表現している。つまり、この段落は直前の段落とつながっている。切り離して「補遺」として考えることなど到底できない。そんなことをすれば作者の意図を著しく損なう。

そのほか、デットナーの『レンツ』論は作品解釈の段でもいくつか問題があるように思える。

まず、退屈のモチーフについての見解である。これを彼は、「時間感覚の錯乱」(eine Störung des Zeitsinns, DL 38) と言い直し、このモチーフは、「王政復古時代の世紀の病として周知のように同時代の文学の中で最も広汎に広まったモチーフであり、ビューヒナーの作品で定番になったものである。」(DL 38) と見る。こう彼が述べるとき、どんな「同時代の文学」を念頭に置いているのか、また、それらの文学の中で「時間感覚の錯乱」が定番のモチーフであったとしても、そのことと『レンツ』の主人公の退屈とが実際に関連するのか、あるとすればどのような点か、そこの論証はない。

さらに、レンツの狂気のきっかけについての解釈である。デットナーはここで、旅から帰って来たオーベルリンの非難が「狂気の直接のきっかけ」であると解釈したジィークリット・ダムの論六九を援用する (DL 48, 51)。その非難とは、「その際に彼 (オーベルリン、筆者注) は、父親の意に沿い、仕事に就き、家に帰るようにと彼 (レンツ、筆者注) を諭した」(GL 23) という部分を指すのであろう。この彼女の論を彼は全面的に肯定するのではない。しかし、オーベルリンのこの言葉がレンツの破局を早め病状を悪化させたと考える (DL 51)。

そして、レンツの狂気全般に対する解釈である。デットナーはここでは、「搾取するシステムの道徳観念と法律観

念」(der Moral- und Rechtsvorstellung des Ausbeutungssystems) がヴォイツェックを縛り付けていたと見るアルフォンソ・グリュックの説七〇を引用する (DL 58)。そして、この説との関連で、「個人に不当に干渉する宗教的な権力システム」(das personenübergreifende religiöse Machtsystem, DL 58f.) のもとに苦しむ主人公の姿をビューヒナーはこの短篇で強調したのだと論じ、同時に、「宗教的および社会的規範の内面的拘束」(seine innere Bindung an die religiösen und sozialen Regeln) から逃れようとする「解放の意志」(ein Emanzipationswille) が主人公にあったのだと述べる (DL 60)。つまり、基本的には、『レンツ』のテーマは当時の宗教的・社会的なイデオロギーに対する批判にあるとデットナーは解釈した。この主張は、「理想主義の時代が当時始まっていた」という一文から時代との関連でこの短篇を解釈しようとしたアーレントやピルガーの先に紹介した論七一と同列に位置すると思える。

デットナーのこうした論の基底には、この短篇は未完の断片であるという前提がある。この前提は、T・M・マイアーにしても、後に言及するフーベルト・ゲルッシュにしても変わりがない。T・M・マイアーは、これまで考えられていた以上に「草案の段階であり、省略的であり、断片的である」(konzeptartiger, elliptischer und bruchstückhafter, TMMT-II 280) と言い、ゲルッシュもまた「草案の段階」(konzeptartig) であり「未完のテクスト」(ein unfertiger Text) であると断定する。七二その他の研究者でもここは共通している。たとえば、インゲ・ディールゼンの『レンツ』論 (一九九一年)七三がそうだろう。この短篇から一元的な意味を読み取ろうとする従来の解釈のすべてを彼女は批判し、こう述べる。「これらすべての解釈のアプローチは、テクストの一部を拠り所にすることはできても、全体としてのテクスト (der Text als Ganzes) は抑えきれない」。そしてこの後彼女は、「瞬間の専横」(das Selbstherrliche des Augenblicks) を強調したゲルハルト・バウマンの論七四を引用し、『レンツ』はさまざまな観点から見て「断片のテクスト」(Fragmenttext) であると断定する (DG 108ff.)。要するに、『レンツ』は断片のテクストであるから「一元的な」(eindeutig) 解釈など成り立たないというのが彼女の見解の基本である。

確かに、従来の解釈では「全体としてのテクスト」を抑えきれていない。『レンツ』の冒頭の一行から結末の最後の一行までを貫く一つの意味の固まりをテクストに即して浮き上がらせるという試みは、ビューヒナーの研究史上ではまずないだろう。だからといって、この短篇を即「断片」と見なし、そのことを前提にして解釈にとりかかってもよいのか。デットナーの『レンツ』論はこの流れにある。しかし本研究は、この流れを充分にふまえつつ、これを批判する形で、ディールゼンの言う「全体としてのテクスト」を相手に『レンツ』の意味の固まりを探り出そうとする試みとなる。

その他、デットナーの論で注目すべき点はいくつかある。『オーベルリンの手記』にはもともと「おかしさ」(Skurrilität) がありこの本質をビューヒナーは短篇で強調したという主張 (DL 38)、あるいは、『ヴェルテル』の中にある「自殺した娘のエピソード」と『レンツ』の文体および内容の類似点の指摘 (DL 62) など興味深い。ことに後者は本研究と直接関連する。しかし、デットナーは類似点を挙げるのみで、そこから論を発展させるという方向へは向かわない。さらに言えば、「全体としてのテクスト」を視野に入れた『レンツ』論を目指すのであれば、夢や予感について議論するレンツとオーベルリンの会話の分析、山小屋の場面が短篇全体の中で占める位置、女中の歌等についての考察も不可欠だと思える。もしこれらの間での関連が明らかになれば、もはや、未完の断片とは簡単には言えなくなるだろう。むしろ、それ以前の短篇とはまったく異なるコンセプトに従って場面と場面の関連が驚くほど緻密に組み立てられた作品であるとの結論に至るかもしれない。問題は、そのコンセプトがまだ明らかにされていないということではないのか。

それでは、『ヴォイツェック』をデットナーはどう見たのか。

『《ヴォイツェック》の筋、移り変わる場所 — 《閉じた形式》』(一九九一年)[七五]という題を付した彼の論文は、こ

の劇が「閉じた」劇であることを立証しようとした点で注目に値する。クロッツの論[七六]以来、『ヴォイツェック』は「開かれた」劇の典型だと見なされてきた。デットナーはこのクロッツの論を意識し、これに反論する。彼が関心を向けたのは、『ヴォイツェック』の中に流れている時間の連続性である。

彼はこう言う。

「『閉じた劇では時間が問題である。開かれた劇では問題ではない』という（クロッツの、筆者注）文がもしも正しいとするなら、もしも、開かれた劇では『連続性のある中断しない出来事の発展』を示してはならないのであれば、『ヴォイツェック』はどちらかと言えば、むしろ閉じた劇と名付けるべきではないのか？」（DW 165）

これは、『ヴォイツェック』の研究史上では画期的な主張である。バウマン[七七]、さらに、グンドルフ[七八]にまでさかのぼってみても、従来の論は、「連続性のある中断しない出来事の発展」（eine kontinuierliche, ununterbrochene Geschehnisentwicklung）を否定してきた。より正確に言うなら、テクストの中からそれが探し出せないままだった。それをデットナーは敢えて、「むしろ閉じた劇と名付けるべきではないのか？」と提唱したのである。

しかしその説明の段になると、必ずしも論証し切れているとは言えない。なぜなら、「閉じた」（geschlossen）劇であることを立証しようとするのであれば、まさに、先のディールゼンが『レンツ』論で述べたように、「全体としてのテクスト」を相手にしなければならないからである。具体的に言えば、冒頭の場面から最後の場面までのすべてを検討し、その場面と場面の間にある緊密な関係を一つ残らずすべて解明しなければならない。それが、「閉じた」劇であることを証明する際の基本だろう。一つでもその連鎖が切れてしまえば、もう閉じているとは言えない。従って、閉じているということを立証するには、途方もない厳密さが要求される。

しかしそれだけではない。各場面の「連続性」(die Kontinuität) を明示した後で、今度はこれを基本にしてテクスト全体を貫く一つの明瞭な「発展性」(die Entwicklung) も明らかにしなければならない。その後で、「全体としてのテクスト」がいったい何を表現しようとしているのか、そこも考察しなければならないだろう。そうなれば、当然、こうした劇を組み立てるための基本的なコンセプトや文学的な手法についての関心も不可欠となる。デットナーの『ヴォイツェック』論が「閉じた」劇であることを証明し切れていないというのは、こうした意味である。

たとえば、六場（マリー、鼓手長）から七場（マリー、ヴォイツェック）へのつながりである。ヴォイツェックはここで、マリーと鼓手長が姦通したことをなぜわかったのか？　それは、大尉のところからドクターのところへと移動する途中で、マリーのそばにいる鼓手長を見たからであり、これが理由で、彼はドクターのところへ行くのが遅れたのだとデットナーは推論する (DW 160)。彼はつまり、「移り変わる場所」(wechselnde Orte) に注目したのだ。

それでは、十一場（料理屋）から十二場（広野）への場所の移動はどう説明するのか。鼓手長とマリーが目の前で踊る姿を目撃し嫉妬と絶望に駆られたヴォイツェックが料理屋から広野まで一気に走っていったと推測するのか。作者はしかし、そんなト書は一切書いていない。ここは、通常の演劇の組み立てからすれば明らかに不連続である。だからもし、「移り変わる場所」に注目しながら「閉じた」劇であることを立証しようとするのであれば、この二つの場面の間にあるつながりを明らかにしなければならないはずだ。しかしデットナーは、この点についてはまったく言及していない。

そして結局のところ、デットナーは『ヴォイツェック』をこう解釈する。

「ビューヒナーは（・・・）空間全体としての世界の多様性を提示したのではなく、特徴的な部分を切り取ることで、ひとりの人間が狂気や殺人に駆られていく様を示した。その敵対者は命の最後の一滴まで搾り取る社会であり、

個々の場面は労働の日々、精神的な発展、殺人行為の各部として互いに結び付いている。」(DW 167f.)

この見解はクロッツへの批判という形になっている。クロッツは、「全体としての切り取った断片」(Ausschnitten als Ganzes) が「閉じた劇」(das geschlossene Drama) であり、「切り取った断片での全体」(das Ganze in Ausschnitten) が「開いた劇」(das offene Drama) であると述べる (KGO 216, 218)。そして「開いた劇」では、「空間全体としての世界の多様性が、切り取った断片で、開かれて、飽くことなく呼び出されており」、「個々の場面は全体に対して豊かで直接的な関係にある」と続ける (KGO 219-221)。要は、「閉じた劇」はそれ自体で一つの世界を作ってしまうが、「開いた劇」では、一つひとつの場面が世界の「多様性」(die Mannigfaltigkeit) もしくは「全体」(das Ganze) と対応しているということであろう。「閉じた」あるいは「開いた」と彼が名付ける所以はここにある。

これに対してデットナーが右の引用で主張していることは、世界の漠然とした「多様性」や「全体」をビューヒナーは『ヴォイツェック』で提示したのではなく、「命の最後の一滴まで搾り取る社会」の中で「ひとりの人間が狂気や殺人に駆られていく様を示した」のだと具体的に限定した。つまり、現実の社会的状況が主人公を狂気や殺人へと追い込んだという解釈である。これは他でもない、H・マイアーや八〇年代のポッシュマンが主張したことでもある。事実、「我々の外にある」(außer uns liegen)「状況」(Umstände) を強調するポッシュマンの八〇年代の論[七九]をデットナーは右の文のすぐ後に引用しこれを支持している (DW 168)。

そうなると、デットナーの論は、時間の流れの連続性・場所の移動の連続性・搾取する現実社会との対応という三つの観点から閉じていることを証明しようとした試みだと言える。その『ヴォイツェック』の解釈の基本は、いわゆる社会史的立場に立つ従来の論とさほど変わらない。

デットナーのこの方法の一番の問題点は、「夢や予感」などの合理的には説明しきれない主人公ヴォイツェックの

感覚についてまったく関心を払わなかったことだろう。この点でも、社会史的立場に立つ研究者たちと共通している。デットナーの作品解釈が最終的には彼らの解釈と同一の地点に落ち着いたのも必然で、その原因もおそらくここにある。そして、主人公の本能的な感覚に注目し続けないかぎり「開いた劇」であると見る定説を批判する核が見つからない。ここに目を向けないかぎり『ヴォイツェック』のテクスト全体が閉じていることを立証できない。

しかしながら、九〇年代に入ってから、このデットナーの『ヴォイツェック』論にしろ先に紹介したポッシュマンの「記号」に注目した論[三〇]にしろ、もしかしたら『ヴォイツェック』は閉じているのではないかという議論が第一線に立つ研究者の間から出てきた。これは新しい傾向と言えるだろう。

【ゲルッシュ】

マールブルク学派の研究者として、もう一人紹介したい。フーベルト・ゲルッシュである。彼はマールブルク大学には所属していない。しかし、T・M・マイアーやデットナーと歩調を合わせて研究に取り組んでいるので、この章で扱う。

一九八四年に「Studienausgabe」として出版された『レンツ』のテクスト[八一]の編纂、その素材となった『オーベルリンの手記』に対する文献学的な考証、[八二]この二つの仕事は、『レンツ』の研究に測り知れない大きな役割を果たした。その彼の編纂したテクストについては作品論で詳しく紹介した。

素材に関しては、シュテファン・シュマールハウスとの共同研究でゲルッシュは一つの興味深い論を発表している。ポール・メーリンというフランスの作家が一八三三年に書いた『牧師オーベルリン』という作品と『レンツ』を比較した論[八三]である。主人公の顔や衣装の素描、オーベルリンに彼が迎えられるときの様子、説教の場面の設定、石の上で髪を梳く少女たちのイメージなど、メーリンの小説とビューヒナーの短篇が対応していることを具体的に指摘し、

『レンツ』は『オーベルリンの手記』を素材にした第二番目の作品であるという説を展開する。

そのメーリンの小説とは、ゲルッシュとシュマールハウスによれば、スイスのとある貴族が恋の苦悩の中でオーベルリンを訪ね、彼の助言と助力によって見事に再生するという筋立てで、オーベルリンをカリスマに仕立て神聖化する内容だという（GSQ 74）。その小説をビューヒナーが参考にしたのではないかというのが彼らの推測である。しかしそのことによって『レンツ』の新しい解釈の地平が開かれるというところにまでは至っていない。いずれにしても、研究の方向がこれまでになく細分化され実証化されてきたという最近のビューヒナー研究の傾向を強く感じさせる論の一つである。

☆

さて、これで一応、研究史の概観は終了する。扱わなければならない論は他にも山ほどある。ビューヒナーに関する研究書は今や膨大な数になっている。そこで、選択の基準としてとりあえず、本研究との関連という観点からのみ重要と思われる論のいくつかをピックアップしそれらを批判的に紹介し、そのことで、ビューヒナー研究史上での本論の位置を明瞭にしようと試みた。

そして、次は、「ビューヒナー研究（五）　第四部　『ヴォイツェック』と『レンツ』の時代背景」と題して、一八二〇年代、三〇年代のドイツとフランスの精神医学界の動向を追う予定である。この時期の精神医学は裁判に深くかかわっていた。いわゆる、精神障害があると思われる殺人者の精神鑑定の問題を通してである。本業が医者であったビューヒナーはこの問題とどう向き合っていたのか。そして、当時のフランスの精神医学の権威でもあり鑑定医でもあったエスキロールとビューヒナーはどのような位置関係にあったのか。そこらあたりのことを考えてみたい。

註

一　Vgl. Kobel, Erwin: Georg Büchner. Das dichterische Werk. Berlin/ New York (de Gruyter), 1974, S. 1. 以下、この版からの引用は「KG」の略号を用い、その後にページ数を付し本文中に記す。

二　本論のために使用するテクストは以下のとおりである。
Büchner, Georg: Woyzeck. Vorläufige Reinschrift. In: Georg Büchner: Sämtliche Werke und Briefe. Historisch-kritische Ausgabe mit Kommentar, Bd. 1. Hrsg. von Werner. R. Lehmann. München (Hanser) 3. Aufl. 1979, S.168-181. 本文中の場面番号はこの版に従う。なお、この草稿以外の初期草稿 (Erste Fassung. Szenengruppe 1, Erste Fassung Szenengruppe 2) からの引用はその都度本文に明記する。ders.: Lenz. Studienausgabe. Hrsg. von Hubert Gersch. Stuttgart (Reclams Universal-Bibliothek Nr. 8210) 1984. この版からの引用は、「GL」の略号を用いて本文中にページ数を記す。ders.: Dantons Tod. Kritische Studienausgabe des Originals mit Quellen, Aufsätzen und Materialien. Hrsg. von Peter von Becker. Frankfurt am Main(Syndikat)1980. この版からの引用は「BDT」の略号を用いてこの版の台詞番号を本文中に記す。

三　Meier, Albert: Georg Büchners Ästhetik. In: Georg Büchner Jahrbuch 2/1982. Frankfurt am Main(Europäische Verlagsanstalt) 1983, S. 205. 以下、この版からの引用は「AMÄ」の略号を用い、その後にページ数を付し本文中に記す。

四　Lukács, George: Der faschistisch verfälschte und der wirkliche Georg Büchner. In: Wege der Forschung Band LIII. Georg Büchner. Herausgegeben von Wolfgang Martens. Darmstadt (Wissenschaftliche Buchgesellschaft) 1965, 3. Aufl. 1973, S. 197-224. (Aus: Lucács, Deutsche Literatur in zwei Jahrhunderten. Neuwied 1964. Zuerst 1937) 以下、この版からの引用は「LF」の略号を用い、その後にページ数を付し本文中に記す。

五　Viëtor, Karl: Die Tragödie des heldischen Pessimismus. Über Büchners Drama ›Dantons Tod‹. In: Wege der Forschung Band LIII. Georg Büchner. Herausgegeben von Wolfgang Martens. Darmstadt(Wissenschaftliche Buchgesellschaft) 1965, 3. Aufl. 1973, S.98-137. (Aus: DVjs 12. 1934) 以下、この版からの引用は「VT」の略号を用い、その後にページ数を付し本文中に記す。

六　Meier, Albert: Georg Büchner 》Woyzeck《. München(Fink)1980.　以下、この版からの引用は「AMW」の略号を用い、その後にページ数を付し本文中に記す。

七　拙論：ベルリンの演劇（一）ーホルヴァートの『カジミーアとカロリーネ』Schloßpark Theater 1992。「広島大学文学部紀要」第五十三巻二二二ー二四二頁。広島大学文学部。　一九九三年。

八　Thiers, M. A.: Histoire de la Révolution Française. 4. édition, 10 Bde. Paris 1834.

九　Viëtor, Karl: Woyzeck. In: Wege der Forschung Band LIII. Georg Büchner. S. 178-196. (Aus: Das Innere Reich 3. 1936)
以下、この版からの引用は「VW」の略号を用い、その後にページ数を付し本文中に記す。

一〇　Clarus, Johann Christian August: Die Gutachten des Hofrats Clarus zum Fall Woyzeck. In: Georg Büchner: Sämtliche Werke und Briefe. Historisch-kritische Ausgabe mit Kommentar, Bd. 1. Hrsg. von Werner. R. Lehmann. München(Hanser) 3. Aufl. 1979, S. 485-537, S. 538-549.　以下、この版からの引用は「CG」の略号を用い、その後にページ数を付し本文中に記す。

一一　Marc, C. M.:　Die Zurechnungsfähigkeit des Mörders Johann Christian Woyzeck. Bamberg 1825. In: Erläuterungen und Dokumente. Georg Büchner. Woyzeck. Hrsg. von Lothar Bornscheuer. Stuttgart 1976 (=Reclams Universal-Bibliothek Nr. 8117), S. 64.

一二　Viëtor, Karl: 〉Lenz〈, Erzählung von Georg Büchner. In: Wege der Forschung Band LIII. Georg Büchner. S. 178-196. (Aus: Germann. -Roman. Monatsschrift 25. 1937)

一三　Georg Büchner: Lenz. Eine Reliquie von Georg Büchner. Hrsg. und komm. von Karl Gutzkow. In: Telegraph für Deutschland 2 (1839); Nr. 5; S. 7-11; 13f.

一四　Mayer, Hans: Georg Büchner und seine Zeit. Wiesbaden 1946; Berlin 1947; Wiesbaden und Berlin 1960. Frankfurt am Main (=surkamp taschenbücher 58)1972.

一五　Büchner, Georg: Brief an die Familie. Gießen, im Februar 1834. Nr.18. In: Georg Büchner. Werke und Briefe. Münchner Ausgabe. Hrsg. von Karl Pörnbacher, Gerhard Schaub, Hans-Joachim Simm und Edda Ziegler. München(Hansa)1997, 6. Aufl. S. 285f.　以下、ビューヒナーの書いた手紙は、この版の通し番号を用いて表示する。

一六 Büchner, Georg: Brief an die Braut. Gießen, um den 9.-12. März 1834. Nr. 21.

一七 Poschmann, Henri: Georg Büchner. Dichtung der Revolution und Revolution der Dichtung. Berlin und Weimar (Aufbau)1983.

一八 Vgl. Anm. 3.

一九 Meier, Albert: Georg Büchner 》Woyzeck《. München(Fink)1980.

二〇 Vgl. Anm. 16.

二一 Büchner, Georg: Woyzeck. Erste Fassung. Szenengruppe 2. In: Georg Büchner: Sämtliche Werke und Briefe. Historisch-kritische Ausgabe mit Kommentar, Bd. 1. 3. Auflage. Hrsg. von Werner R. Lehmann. München (Hanser) 1979, S.165.

二二 Vgl. Anm. 1.

二三 Lehmann, Werner R.: Textkritische Noten, Prolegomena zur Hamburger Büchner-Ausgabe.

二四 Vgl. Anm. 15.

二五 『ダントンの死』でカミーユはこう言っている（第四幕五場）。

「ふくれっ面をするのも、口紅を塗るのも、上品なアクセントで話すのも、それはそれなりで何かの足しにはなるだろう、だけどな、いつかはその仮面を剝がしたほうがいい、そうすりゃ、まるで鏡の部屋にいるみたいでどこを向いたって大昔からごまんといた元のまんまのお人好しの面が一つあるきりだろうよ、それ以上でもなければそれ以下でもない。一人ひとりの違いなんてそんなに大きいもんじゃない。おれたちはみんな、悪党でもあり天使でもあり、馬鹿でもあり天才でもあり、しかもこれが全部一人の人間の中に同居してんだ、一人の人間の体にはこの四つが同居できる十分なスペースがあるんだ、この四つのどれ一つとっても人が思っているほど場所を取ったりはしないもんだ。」(BDT 622)

二六 『レンツ』では次のような箇所がある。

「この世にはきわめて散文的な人間がいる、しかし感情の生地というのはどの人間でもほとんど同じであり、違うのはただそれが突き破らなければならぬ殻が厚いか薄いかだけだ。人はただそれを見極める目と耳を持ちさえすればいい。」(GL 14)

二七 Wiese, Benno von: Georg Büchner. Die Tragödie des Nihilismus. In: Die deutsche Tragödie von Lessing bis Hebbel, Bd. II. Hamburg 1948.

二八 『ヴォイツェック』の初稿 (Szenengruppe 1, 14) で、祖母が童話を語る。この童話に関しては、「ビューヒナー研究(二)、第二部『レンツ』(1〜2)」(広島大学文学部紀要第五六巻特輯号二、七一—七三頁) で詳細に分析した。

二九 Wittkowski, Wolfgang: Georg Büchner. Persönlichkeit. Weltbild. Werk. Heidelberg (Winter)1978. (=Reihe Siegen. Beiträge zur Sprach- und Literaturwissenschaft, Bd. 10). 以下、この版からの引用は「WG」の略号を用い、その後にページ数を付し本文中に記す。

三〇 Poschmann, Henri: 》Wer das lesen könnt《. Zur Sprache natürlicher Zeichen im Woyzeck. In: Zweites Internationales Georg Büchner Symposium 1987. Referate. Frankfurt am Main (Anton Hain Meisenheim) 1990, S. 441–452.

三一 Gundolf, Friedrich; Georg Büchner. In: Wege der Forschung Band LIII. Georg Büchner. Herausgegeben von Wolfgang Martens. Darmstadt (Wissenschaftliche Buchgesellschaft) 1965, 3. Aufl. 1973, S.82–97. (Aus: Gundolf, Romantiker. Berlin-Wilmersdorf 1930. Zuerst 1929)

三二 Wiese, Benno von: Georg Büchner. Lenz. In: Die deutsche Novelle von Goethe bis Kafka. Düsseldorf (Bagel)1962. Baumann, Gerhart: Georg Büchner. Die dramatische Ausdruckswelt. Göttingen (Vandenhoeck & Ruprecht)1976. Volker Klotz: Geschlossene und offene Form im Drama. München 1960, 5. Aufl. 1970.

三三 Hinderer, Walter: Büchner Kommentar zum dichterischen Werk. München(Winkler)1977.

三四 Hinderer, Walter: 》Dieses Schwanzstück der Schöpfung《: Büchners Dantons Tod und die Nachtwachen des Bonaventura. In: Georg Büchner Jahrbuch 2/1982, S. 316–342. 以下、この版からの引用は「HS」の略号を用い、その後にページ数を付し本文中に記す。

三五 Bonaventura (E. A. F. Klingemann): Nachtwachen. Im Anhang: Des Teufels Taschenbuch. Herausgegebenen von Wolfgang Paulsen. Stuttgart(= Reclams Universal-Bibliothek Nr. 8926) 1990. 以下、この版からの引用は「BN」の略号を用い、その後にページ数を付し本文中に記す。

三六 Thieberger, Richard : Lenz lesend. In: Georg Büchner Jahrbuch 3(1983), S. 43- 75. 以下、この版からの引用は「HS」の略号を用い、その後にページ数を付し本文中に記す。

三七 Schaub, Gerhard: Georg Büchner: Poeta rhetor. Eine Forschungsperspektive. In: Georg Büchner Jahrbuch 2/1982, S. 170-195.

三八 Büchner, Georg: Brief an die Familie. Straßburg, im Juni 1833. Nr. 12.

三九 Arendt, Dieter : Georg Büchner über Jakob Michael Reinhold Lenz oder: 》die idealistische Periode fing damals an《. In: Zweites Internationales Georg Büchner Symposium 1987. Referate. Frankfurt am Main (Anton Hain Meisenheim) 1990, S. 309-332. 以下、この版からの引用は「AG」の略号を用い、その後にページ数を付し本文中に記す。

四〇 Pilger, Andreas: Die 》idealistische Periode《 in ihren Konsequenzen. Georg Büchners kritische Darstellung des Idealismus in der Erzählung Lenz. In: Georg Büchner Jahrbuch 8(1990-94), Tübingen (Niemeyer)1995, S. 104-125. 以下、この版からの引用は「PI」の略号を用い、その後にページ数を付し本文中に記す。

四一 Mayer, Thomas Michael: Büchner und Weidig - Frühkommunismus und revolutionäre Demokratie. Zur Textverteilung des 》Hessischen Landboten《. In: Heinz Ludwig Arnord (Hrsg.): Georg Büchner I / II. München (=Sonderband aus der Reihe text + kritik)1979, S.16-298. 以下、この版からの引用は「TMMB」の略号を用い、その後にページ数を付し本文中に記す。

四二 Jancke, Gerhard: Georg Büchner. Genese und Aktualität seines Werkes. Einführung in das Gesamtwerk. Kronberg/Ts (=Scriptor Taschenbücher S 56)1975. 以下、この版からの引用は「JG」の略号を用い、その後にページ数を付し本文中に記す。

四三 Büchner, Georg: Brief an Gutzkow. Straßburg, Anfang Juni(?) 1836. Nr. 59.

四四 Thron-Prikker, Jan: Revolutionnär ohne Revolution. Interpretationen der Werke Georg Büchners. Stuttgart (Klett-Cotta) 1978 (=Literaturwissenschaft-Gesellschaftswissenschaft 33).

四五 フィリップ・ソレルス（鈴木創士訳）、サド侯爵の幻の手紙―至高存在に抗するサド。せりか書房、一九九九年、一一二―一一三頁。

四六 Thiers, auf der Seite nach dem bei Mayer, 1969, S. 310, wiedergegebenen Zitat über C. Théot. (T・M・マイヤーの註より引用)

四七 Mayer, Thomas Michael: Zu einigen neueren Tendenzen der Büchner-Forschung. Eine kritischer Literaturbericht(Teil Ⅰ): In: Heinz Ludwig Arnord (Hrsg.): Georg Büchner Ⅰ / Ⅱ. München (=Sonderband aus der Reihe text + kritik) 1979, S.327-356. 以下、この版からの引用は「TMMT-I」の略号を用い、その後に、一つ数字を付し本文中に記す。

四八 Benn, Maurice B.: The Drama of Revolt. A Critical Study of Georg Büchner. London, New York, Melbourne (Cambridge)1979. 以下、この版からの引用は「BD」の略号を用い、その後に、一つ数字を付し本文中に記す。

四九 Solzhenisyn: The First Circle. Translated by Michael Guybon, 1968, p. 112.

五〇 Knapp, Gerhard P.: Georg Büchner. Stuttgart (Metzler)1977 (=Sammlung Metzler, Realien zur Literatur, Abt. D, Bd. 159)

五一 Zons, Raimar Stefan: Georg Büchner. Dialektik der Grenze. Bonn (Bouvier) 1976 (= Abhandlungen zur Kunst-, Musik- und Literaturwissenschaft, Bd. 208)

五二 Bräuning-Oktavio, Hermann: Gerog Büchner. Gedanken über Leben, Werk und Tod. Bonn(Bouvier)1976. (= Abhandlungen zur Kunst-, Musik-, und Literaturwissenschaft, Bd. 207). 以下、この版からの引用は「BOG」の略号を用い、その後に、一つ数字を付し本文中に記す。

五三 Mayer, Thomas Michael: 》Wegen mir könnt Ihr ganz ruhig sein...《 Der Argumentationslist in Georg Büchners Briefen an die Eltern. In: Georg Büchner Jahrbuch 2/1982, S. 249-280. 以下、この版からの引用は「TMMA」の略号を用い、その後に、一つ数字を付し本文中に記す。

五四 Büchner, Georg: Brief an die Familie. Straßburg, im Juni 1833. Nr. 12.

五五 Hauschild, Jan Christoph: Georg Büchner. Biographie. Stuttgart(Ullstein)1997, S. 267ff.

五六 Becker, August: Die gerichtlichen Angaben. In: Friedrich Noellner, Actenmäßige Darlegung des wegen Hochverraths eingeleiteten Verfahrens gegen den Pfarrer D. Friedrich Ludwig Weidig, mit besonderer Rücksicht auf die rechtlichen

Grundsätze über Staatsverbrechen und deutsches Strafverfahren, sowie auf die öffentlichen Verhandlungen über die politischen Processe im Großherzogthume Hessen überhaupt und die späteren Untersuchungen gegen die Brüder des D. Weidig. Darmstadt 1844, S.420f.

五七 Büchner, Georg: Brief an die Familie. Straßburg, den 1. Januar 1836. Nr. 54.

五八 Büchner, Georg: Brief an Gutzkow. Straßburg, Anfang Juni(?) 1836. Nr. 59.

五九 Büchner, Georg: Brief an die Braut. Gießen, um den 9.-12. März 1834. Nr. 21.

六〇 A・マイアーは、『ダントンの死』の群集を全体で一人の登場人物と見なし、これを「第三の登場人物」(der dritte Protagonist) として位置付けようとする。この見解は注目に値する。しかし、第三の登場人物ではない。第一の登場人物である。これが本論の考え方である。 Meier, Albert: Dantons Tod und die Poetik des Geschichtsdrama. In : Zweites Internationales Georg Büchner Symposium 1987. Referate. Frankfurt am Main(Anton Hain Meisenheim)1990, S. 144.

六一 Büchner, Georg: Brief an die Familie. Straßburg, 〈um den 6.〉 April 1833. Nr. 9.

六二 Grab, Walter: Der hessische Demokrat Wilhelm Schulz und seine Schriften über Georg Büchner und Friedrich Ludwig Weidig. In: Georg Büchner Jahrbuch 2/1982, S. 227-248. 以下、この版からの引用は「GH」の略号を用い、その後にページ数を付し本文中に記す。

六三 ジャック・カザノヴァ（建田般彌訳）：カザノヴァ回想録3―パリの社交界。河出書房、一九九五年、一七三頁。

六四 ジャック・カザノヴァ（建田般彌訳）：前掲書、同頁。

六五 Mayer, Thomas Michael: Zu einigen neueren Tendenzen der Büchner-Forschung. Eine kritischer Literaturbericht(Teil II: Editonen): In: Heinz Ludwig Arnord (Hrsg.): Georg Büchner III. München (=Sonderband aus der Reihe text + kritik) 1981, S. 265-311. 以下、この版からの引用は「TMMT-II」の略号を用い、その後にページ数を付し本文中に記す。

六六 Büchner, Georg: Woyzeck. Faksimileausgabe der Handschriften. Bearbeitet von Gerhard Schmidt. Leipzig(Edition Leipzig) 1981 [desgl. Wiesbaden: Dr. Ludwig Reichert Verlag 1981] (= Manuscripta. Faksimileausgaben literarischer Handschriften. Hrsg. von Karl-Heinz Fahn, Bd. 1)

六七 Büchner, Georg: Woyzeck. Kritische Lese-und Arbeitsausgabe. Hrsg. von Lothar Bornscheuer. Stuttgart (Reclam) 1977.

六八 Dedner, Burghard: Büchners Lenz: Rekonstruktion der Textgenese. In: Georg Büchner Jahrbuch 8 (1990-94), Tübingen (Niemeyer)1995, S. 3-68. 以下この版からの引用は「DL」の略号を用い、その後にページ数を付し本文中に記す。

六九 Damm, Sigrid: Vögel, die verkünden Land. Das Leben des Jakob Michael Reinhold Lenz. Berlin und Weimar 1985.

七〇 Glück, Alfons: 》Herrschende Ideen《 : Die Rolle der Ideologie, Indoktrination und Desorientierung in Georg Büchners Woyzeck. In: Georg Büchner Jahrbuch 5/1985. Frankfurt am Main(Europäische Verlagsanstalt)1986, S. 52-138. ders.: Der Menschenversuch: Die Rolle der Wissenschaft in Georg Büchners Woyzeck. In: a.a.O., S. 139-182.

七一 Vgl. Anm. 39, 40.

七二 Gersch, Hubert: Georg Büchners Lenz-Entwurf: Textkritik. Edition und Erkenntnisperspektiven. Ein Zwischenbericht. In: Georg Büchner Jahrbuch 3(1983), S. 18.

七三 Diersen, Inge: Büchners Lenz im Kontext der Entwicklung von Erzählprosa im 19. Jahrhundert. In: Georg Büchner Jahrbuch 7(1988/89), Tübingen (Niemeyer) 1991, S. 91-125. 以下この版からの引用は「DB」の略号を用い、その後にページ数を付し本文中に記す。

七四 Baumann, Gerhart: Georg Büchner. Lenz. Seine Struktur und der Reflex des Dramatischen. In: Euphorion 52, 1958.

七五 Dedner, Burghard: Die Handlung des Woyzeck: wechselnde Orte - 》geschlossene Form《. In: Georg Büchner Jahrbuch 7(1988/89), Tübingen (Niemeyer)1991, S. 144-170. 以下この版からの引用は「DW」の略号を用い、その後にページ数を付し本文中に記す。

七六 Klotz, Volker: Geschlossene und offene Form im Drama. München 1960, 5. Aufl. 1970. 以下この版からの引用は「KGO」の略号を用い、その後にページ数を付し本文中に記す。

七七 Baumann, Gerhart: Georg Büchner. Die dramatische Ausdruckswelt. Göttingen (Vandenhoeck)1976.

七八 Vgl. Anm. 31.

七九 Vgl. Anm. 17.

八〇 Vgl. Anm. 30.

八一 Georg Büchner: Lenz. Studienausgabe. Herausgegeben von Hubert Gersch. Stuttgart(Reclam)1984, (=Universal-Bibliothek Nr. 8210).

八二 Vgl. Anm. 72.

八三 Gersch, Hubert / Schmalhaus, Stefan: Quellenmaterialien und 》reproduktive Phantasie《. Untersuchungen zur Schreibmethode Georg Büchners: Seine Verwertung von Paul Merlins Trivialisierung des Lenz-Stoffs und von anderen Vorlagen. In: Georg Büchner Jahrbuch 8 (1990-94). Tübingen (Niemeyer) 1995, S. 69-103.

Studien zu Georg Büchner(4)

—Die Literatur, die mit den Worten des Mörders beginnt.—
Dritter Teil: Die Forschungsgeschichte von „Woyzeck“ und „Lenz“

Toshio Kawahara

„Jeder Mensch ist ein Abgrund, es schwindelt einem, wenn man hinabsieht“, so sagt der Protagonist des „Woyzeck“(H2-8). Sicherlich kann man irgend eine innere unbegreifliche dunkle Welt spüren, wenn man „Woyzeck“ und „Lenz“ liest. Aber wie soll man diese zwei Werke interpretieren?

Seit langem haben so viele Forscher versucht, von den verschiedensten Aspekten aus diese Werke gründlich und originell auszulegen. Hier werden nun im folgenden die wichtigen epochemachenden Interpretationen, die auf die Büchner-Forschung entscheidende Einflüsse ausgeübt haben, historisch und kritisch vorgestellt, um die Position meiner früher veröffentlichten „Studien zu Georg Büchner(1)-(3): 1994-97“ in der Forschungsgeschichte klar darzustellen.

1) Die Debatte zwischen Lukács und Viëtor.
2) Die sozio-historischen Forschungen (H. Mayer, Poschmann, A. Meier usw.)
3) Die existentialen Forschungen(Kobel, Wittkowski usw.)
4) Die stilistischen Forschungen(Hinderer, Thierberger usw.)
5) Die gegenwärtigen Forschungen, besonders die an der Universität Marburg (Th. M. Mayer, Dedner, Gersch, Glück usw.)

Bei der kritischen Betrachtung der Forschungsgeschichte handelt es sich immer um folgendes:

1) Ob man die damaligen heftigen medizinischen und gerichtlichen Debatten über die Zurechnungsfähigkeit des geistesgestörten Mörders in Betracht zieht.

Denn das Thema von „Woyzeck“ war damals (in den zweiten und dritten Jahrzehnten des 19. Jahrhunderts) sehr aktuell, weil man in dieser Zeit darüber nachdachte, wie man den geistig kranken Mörder richten soll; nicht nur in Deutschland, sondern auch in Frankreich war das eine große soziale Frage. Büchner, als Arzt, hatte ein fachliches Interesse daran, und er hatte viel über die neue französische Medizin gelernt, besonders die von Esquiror, einer der damaligen größten französischen Ärtzte, der den Mörder vor Gericht mit seiner Geistesstörung entschuldigte. Diese Seite muß man als einen wichtigen sozial-historischen Hintergrund betrachten.

2) Ob man die Sprache, d.h. den Gebrauch von Worten in„Woyzeck“ und in „Lenz“ intensiv beachtet.

Besonders in „Woyzeck“ treffen nämlich gegensätzliche aufeinanderprallende Diskurse zusammen: Einer ist der rationale und strategische Diskurs, mit dem man den Gesprächspartner von seiner eigenen Meinung überzeugen will; den kann man als Ausdruck des Machtwillens oder Machtsystems vestehen. Der andere ist der Diskurs des historischen Mörders Woyzeck. Seine Worte werden als ein gerichtsmedizinischer Bericht im Gutachten sehr korrekt aufgeschrieben; sie sind zwar weder logisch noch objektiv, aber seine Worte — z. B. „es“ oder „was“— drücken eine Geschichte so direkt und so konkret aus, wie sie in der Wirklichkeit passiert ist.

Solche Worte beruhen nicht auf Woyzecks Verstand, sondern stets auf seinem subjektiven *„elementarischen Sinn“*, wie ihn der Held in „Lenz“ mit dem Gesprächspartner Oberlin sehr ausführlich bespricht. Und wenn man diesen Sinn beachtet, kann man sowohl in „Woyzeck“ als auch in „Lenz“ *eine vom Anfang bis zum Ende linear durchgehende Handlung* finden, die *nur* durch diesen *„elementarischen Sinn“* des Helden konstruiert wird. (Diese Handlungen werden in meinen „Studien zu Georg Büchner(1)-(3)“ deutlich gezeigt.)

ビューヒナー研究（五）

―殺人者の言葉から始まった文学―

第四部　『ヴォイツェック』と『レンツ』の時代背景

河原　俊雄

目次

序章……1
精神の部分的錯乱……1
精神鑑定制度の導入……3
一八三六年……5
第一章　リヴィエールの殺人事件……7
A．マイアーの示唆……7
リヴィエール事件とミッシェル・フーコー……8
リヴィエールの精神鑑定……11
ブシャールによる精神鑑定……12
ヴァステルによる精神鑑定……14
エスキロール等による精神鑑定……15
第二章　ヴォイツェックの精神鑑定……17
ドイツで起きた三つの殺人事件の精神鑑定……17
シュモリングの話法……18
クラールスの鑑定への反論……20
ガル……23
精神派と身体派……25
第三章　ビューヒナーとエスキロール……29

医学者としてのビューヒナーのポジション……29
エスキロール派のジョルジュ……31
エスキロール……32
第四章　偏執狂と『レンツ』および『ヴォイツェック』……36
一、偏執狂と『レンツ』……36
シェーネの論……36
ゼーリング＝ディーツの論……38
レンツの不安……39
レンツの話法……40
レンツの苦悩とその症状……49
二、偏執狂と『ヴォイツェック』……52
殺人偏執狂……52
殺人偏執狂と『ヴォイツェック』……55
劇中のドクターとクラールス……59
註……64

序章

【精神の部分的錯乱】

『ヴォイツェック』[一]と『レンツ』[二]は別の作品だと見なす傾向がこれまで強かった。一方の主人公は社会の最下層にいて職もなく身寄りもなく浮浪者然として日々を送っていた男。他方の主人公は若きゲーテとともにシュトルム・ウント・ドラングの文芸運動を担った著名な劇作家。前者は殺人事件を起こし、後者は気が狂う。どう見てもこの二人がクロスする接点など見つかりそうもない。

ところが素材に目を向けてみると、にわかに共通点が浮き上がる。その接点となるのは「精神の部分的錯乱」(psychische Partialstörungen) という症状である。これは、日常生活は人並みにこなす能力があるのに一時的にあるいは突発的に精神の錯乱が起こり、その後でまた元通りの精神状態に戻るという症状である。完全な精神病とは断定できない。しかし、正常だとも言えない。言ってみればその境目。その境目にいた人物の記録を素材にしているという点で二つの作品は共通している。

これをもう少し具体的に言うとこうである。『ヴォイツェック』の素材は殺人者ヴォイツェックの精神鑑定書[三]である。この殺人者には精神の異常を示す言動が多々あり精神病か否かの判断が難しかった。精神病にかかっていれば犯罪責任能力の問題が浮上し簡単には裁けない。そこで裁判では、犯罪責任能力を鑑定するために専門医による精神鑑定が行なわれた。鑑定医は当時のドイツで最も権威ある医者の一人であったクラールス。この医者の書いた鑑定書には、日常生活を普通に送っているヴォイツェックの姿とそれと並行する形で現われる精神の変調の様子がこと細かに記録されている。

『レンツ』の素材は『オーベルリーンの手記』[四]である。この記録文書にもまた異常な精神状態と正常な精神状態が交互に現われる実在のレンツの様子がメモのように正確に書き留められている。この文書を書いたオーベルリーンという人物は牧師である。しかしシェーネという研究者の説[五]によると、この牧師には「現代医学の先駆者」(SI 31) と言えるほどの眼識があり、その記録には「心理学上の信用性と真実性」(SI 32) があるという。つまり、ビューヒナーが素材にした二つの文

書は精神の部分的錯乱の症状を客観的に正確に記録しているという点で共通性がある。

その二つの記録文書にビューヒナーは目を留めた。問題はこの選定である。ビューヒナーは医学を本業としていた。しかもその医学は脳の神経系統の解剖学的研究に絞り込まれている。この研究については本論で詳述するが、ビューヒナーが生きていた頃の医学では比較的新しいもので、脳や神経の器官の身体的な構造から人間の精神の動きを解明しようとするための基礎研究であったと見なせる。つまり、ビューヒナーの解剖学の研究は現代で言えば精神医学の領域に含まれるもので、精神病の研究と関連している。となれば、二つの文学作品のための素材の選定には医学的立場からの強い関心があったと推定できる。別の言い方をすれば、医学を学んでいる者の立場から精神の部分的錯乱の症例を記録した二つのサンプルを選び、これをもとにして文学作品という形でこの病状を提示したとの推測である。もしここがはっきりすれば、『ヴォイツェック』と『レンツ』は精神の部分的錯乱という精神病を扱った作品という一点で結び付く。

この精神の部分的錯乱という病は、一八二〇年代・三〇年代のドイツとフランスの精神医学界および法曹界ではかなり重要なテーマであった。その理由は、この病気の診断次第で犯罪責任能力があるか否かが決まり判決に重大な影響を与えるからである。

この問題は現代でも生じる。犯人は精神病なのか、それとも正常なのか。はっきりとそれが判断できればいい。しかし、その判定が著しく困難なケースもある。現代の最先端の精神医学を以てしてもなかなか診断できない場合もある。たとえば日本の裁判である。宮崎勤による幼女連続殺人事件、神戸の少年Aによる幼児の殺害事件、下関駅構内での無差別殺人事件、大阪での幼稚園児殺害事件。[六]これらの裁判ではいずれも犯人の精神鑑定が行なわれた。異常な部分もあるにはあるが、日常生活をこなす能力も十分にある。これをどう診断したらいいのか。精神病でもない。かといって正常だとも言えない。どちらに判断を下すにしても、医学的に解明できない部分が残る。だからこそむずかしい。しかし裁判ではそんなことは言っていられない。医学的根拠にもとづいて精神病か否かを判断しなければならない。そしてその鑑定次第で判決は大きく動く。

こうした問題に、一八二〇年代・三〇年代のドイツとフランスの精神医学界と法曹界は向き合っていた。「ビューヒナーが生きていた頃、殺人者の犯罪責任能力に関する公表された法医学のもしくは裁判の鑑定書がかなりの程度で世論を興奮させた殺人事件が折々起こった」[七]とクラウゼは述べている。精神病を解明する医学が社会的関心を集めた理由もここにある。

ようするに、精神の部分的錯乱という症候についての解釈はこの頃でも裁判の問題に直結していたのだ。

【精神鑑定制度の導入】

この精神鑑定の問題はフランスやドイツばかりではなかった。ヨーロッパ全体で見れば近代ヨーロッパ社会が抱え込んだ不可避の問題であった。精神科医である中谷陽二は、『精神鑑定の事件史』（一九九七年）八でこう解説している。

精神病の人が法に触れる行為をおかした場合、罰しないか、あるいは罰を軽くするという制度は古くからさまざまな文化圏で存在した。その近代的な制度はマックノートン・ルールに始まるとされている。(NS 40)

そのルール制定のきっかけとなったのは、一八四三年にイギリスで起きた首相暗殺未遂事件である。当時の首相から迫害を受けているとの被害妄想を抱いたダニエル・マックノートンという男が、首相を暗殺しようとして誤ってその秘書を銃撃した。その裁判で当時の首席裁判官はこう述べた。

精神異常の理由による抗弁を成立させるためには、その行為を行なったときに、被告人が、精神の疾患のために、自分のしている行為の性質を知らなかったほど、またはそれを知っていたとしても、自分は邪悪なことをしているということを知らなかったほど、理性の欠けた状態にあったことが明確に証明されなければならない。(NS 41)

これはつまり、犯行時に犯人が自分の行為を認識できない、もしくは、認識していてもその正邪を判断できない程の精神疾患が実証されれば抗弁が成立するということだろう。そして、このマックノートンの裁判をきっかけとして法律的な整備ができ、中谷によれば、これ以降今日に至るまで精神疾患を持った犯人の裁判ではこの判例が基本になっているという。

社会史的側面から見れば、それゆえ、十九世紀前半から中頃かけてのヨーロッパ社会は精神障害を持った犯罪者をどう裁くのかという問題に直面し、裁判官・医者・検察・弁護士・マスコミ・世論の全体が旧来の道徳や慣習に代わるものとして

新しいルールを模索していた時代だと考えられる。要は、精神障害の疑いのある犯罪者は正常な犯罪者と同列には裁けない、ここである。この認識が出てきて、法律の面から社会制度のなかにこの認識を取り入れ確立しようとする動きが出てきた。

しかし、ここで新たな問題が生じる。犯罪者が精神疾患を持っているのか否か、それではこれをどう立証するのか。これは明らかに精神医学の領分であり、その判断は医者にしかできない。こうした経緯から、十九世紀前半から中頃にかけての医学および医学者たちは社会的に大きな任務を背負うことになる。

精神鑑定を中心にした社会史の動向を右のように大まかに押さえておけば、ドイツのヴォイツェック事件の裁判(一八二一―二四年)の歴史的意味も明らかになるように思える。中谷は、精神鑑定史の上でマックノートン・ルールが重要な歴史的意味を持つと位置付けた。しかしそれ以前に、一八二〇年代・三〇年代のドイツとフランスでは精神鑑定の問題がすでに浮上していた。そのきっかけとなったのが、ドイツではヴォイツェック事件の裁判であり、フランスではリヴィエール事件の裁判（一八三五―三六年）である。いずれの事件の裁判でも犯人の精神鑑定が行なわれ、その鑑定結果が実質的に判決を左右した。ヴォイツェックは正常と診断され死刑になり、リヴィエールは精神病だと認定されて死刑から終身刑に減刑された。どちらも、医者の出した鑑定結果に従った判決である。

ことに、リヴィエールの裁判は精神鑑定史の上で大きな意味を持つ。なぜなら、この裁判がひとつの判例となり一八三八年の法律改正を促すことになったからである。マックノートン・ルールのおよそ十年前である。そして、この裁判でリヴィエールの精神鑑定を担当したのがエスキロールという医者を頭とする医師団だった。幸いにも、ミッシェル・フーコーを中心とした共同研究のメンバーたちがこの事件をさまざまな角度から考察しレポート[九]を出している。詳細は本論で扱うが、その鑑定の要点はこうである。リヴィエールの精神鑑定の際に医者たちの間で論争があった。リヴィエールは日常生活は正常にこなしている。逮捕された後に手記を書き自らが犯した殺人事件の経緯を詳細に書き残している。ということは、人並みのもしくはそれを越える知的能力があるという証になる。しかしその手記のなかで、犯行は「神の命令」に従ったと意味不明のことを述べている。そうなると、正常か異常かの判断がきわめてむずかしくなる。そのときエスキロールは、部分的にでも精神の錯乱が現われればこれを精神病だと見なし、この精神病を「偏執狂」(monmanie)と命名し、これを一つの精神病として新しく認定した。そしてこの学説を武器に、旧来の医学的知識で対応していた医者たちの鑑定を退けリヴィエール

の死刑判決を覆した。

エスキロールの精神医学界での功績は、まさに、この偏執狂という精神病の発見である。この新しい学説を以て彼は当時のフランスの精神医学界での頂点に立った。しかもこの学説はフランスの精神医学界ばかりではなく、ドイツの精神医学界にも強い影響を与えた。エスキロールの新しい精神医学はほぼリアルタイムでドイツ語に翻訳され、一八三〇年頃になるとその学説を吸収した精神医学がドイツでも広まり旧来の精神医学に異義を唱え始める。若きビューヒナーも、そのエスキロールの精神医学から多大な影響を受けた一人の医学者であった。

二〇〇〇年に出たゼーリング＝ディーツの論文一〇がこれらの事実を実証的に明らかにしようと試みている。脳解剖学および神経解剖学というビューヒナーの研究領域はエスキロール派の解剖学の研究と重なり、その方法論でもまた共通性が認められるというのだ。しかもビューヒナーの父親のエルンスト・ビューヒナーもまた医者であり、ドイツの裁判で実際に精神鑑定を担当したことがあり、その鑑定にはフランスの精神医学の影響が認められるという。つまり、息子のゲオルクは父親経由で精神鑑定という仕事の内容をかなり身近なところで具体的に知る機会があり、そのことで、エスキロール派の新しい精神医学に触れたと推測されるのである。

【一八三六年】

そして、ここで注目したいのが『ヴォイツェック』の創作時期と推定される一八三六年という年である。この年にリヴィエールの裁判の最終判決が出ている。それにともない、エスキロールを中心とする医師団が裁判に提出したリヴィエールの精神鑑定書が医学雑誌にやはりこの年に公表されている。

さらにドイツ国内での動向である。ヴォイツェックの精神鑑定の是非をめぐる議論は一八二四年の処刑後もずっと続いていた。そして、「一八三〇年代になるとはじめて、ヴォイツェック処刑で『司法による恐るべき殺人』(ein schauderhafter Justizmord) を見た人々の批判的な声が増し聞こえるようになった」。一一こうした動きがあったからだろう、一八三六年にはクラールスの二つの鑑定書（クラールスはヴォイツェックの精神鑑定を二度行なっている）とその鑑定への批判が弁護士のポップによって法医学関係の雑誌に公表されている。つまり、ヴォイツェックの精神鑑定の問題はドイツの医学界・法曹界

では一八三六年の時点でもなおアクチュアルな問題であった。その理由は、エスキロールを中心としたフランスの新しい学説を受け入れたドイツの医者たちから見れば、ヴォイツェックを正常だと診断したクラールスの鑑定は誤診だったのではないかとの疑念が出てきたからである。しかもこの問題はただ単に過去の問題の蒸返しというだけではなく、精神病の疑いのある犯罪者をどう裁いたらいいのかという将来の裁判のあり方を問う問題とも重なっていた。

そのクラールスの鑑定の是非をめぐっての議論で焦点となったのが部分的な精神錯乱に関する診断である。実在のヴォイツェックにはその兆候があった。幻聴、幻覚、精神の空白状態。エスキロール派から見れば、これらの症状が認められるヴォイツェックは偏執狂の患者である確率が高かった。

そしてこの部分的な精神錯乱という点では実在のレンツもまた典型的な症状を呈している。『オーベルリーンの手記』によれば、彼もまた真冬の井戸に飛び込むとか夜中に叫び声を挙げて中庭を走り回ったとか死んだ子供を生き返らせようとした等の記述があり、明らかに、部分的な精神錯乱の症状が認められ偏執狂と診断できる可能性が高い。つまり、エスキロールの学説を援用すれば、『ヴォイツェック』も『レンツ』も偏執狂の症例を素材にした文学作品と見なせる。実際、『ヴォイツェック』でも『レンツ』でも、日常生活はなんとか人並みに送っているものの突発的に狂気の発作が起こるという主人公の様子がつぶさに描かれている。

実在のヴォイツェックも実在のレンツも偏執狂と診断できる可能性が高い。そして、『ヴォイツェック』と『レンツ』が創作されたと推定される一八三六年以前の時期。さらに、その作者がエスキロールの医学から多くを学んだ若い医学者の一人であったこと。これらを考え合わせてみると、精神鑑定を中心にした一八二〇年代・三〇年代のドイツとフランスの精神医学界の状況およびエスキロールとビューヒナーの関係を探ることは、この二つの作品の時代背景を考える上で有意義であると想像される。そこで本論では、当時の精神鑑定の問題に焦点を絞って二つの作品の時代的背景を考えてみたい。

なお、この論文は、『ビューヒナー研究　―殺人者の言葉から始まった文学―』の（一）―（四）の続編である。十二参照していただければ幸いである。

第一章　リヴィエールの殺人事件

【A．マイアーの示唆】

もしかすると、それゆえに、これまでのビューヒナー研究ではまだ考慮されていないもう一つの別の犯罪事件が『ヴォイツェック』の創作の刺激として考えられる。[十三]

アルベルト・マイアーは一九八〇年の段階でこう述べていた。その「もう一つの別の犯罪事件」とは、一八三五年六月にフランスで起きた尊属殺人事件である。父親を深く愛し父の不幸にひどく胸を痛めていた一人の息子が、父を共謀して苛しめようとしている母と妹、それに不本意ながら弟の三人を鉈で殺害した。犯人の名はピエール・リヴィエール。二十歳の農夫である。この犯人には精神病と思われる兆候があった。そこで、犯罪責任能力があるかどうかを鑑定するために都合三回、異なる医者および医師団によって精神鑑定が行なわれた。その結果、精神病であるとの結論が最終的に出てリヴィエールは死刑から終身禁固刑に減刑された。

その精神鑑定でリヴィエールは精神病であるとの鑑定結果を出したのがエスキロール(Jean-Etienne-Dominique Esquirol)という医者を中心にした医師団である。彼らは、犯罪責任能力があると診断した一度目と二度目の鑑定を当時の最新医学にもとづいて否定した。そのエスキロールらの鑑定結果が、『公衆衛生・法医学年鑑』(Annales d'hygiène publique et de médicine légale)という医学雑誌に一八三六年に公表される。ビューヒナーの専門は医学である。フランス語の医学論文もある。しかも、彼の父エルンスト・ビューヒナーもまた医者であり、鑑定医としてドイツの裁判で精神鑑定を担当した経験もあった。当然、息子のゲオルクもこの医学雑誌を見たとA．マイアーは言う。しかし、これだけの重要な指摘をしておきながらこれで終わりにしてしまい、それ以降の『ヴォイツェック』論ではこの「もう一つの別の事件」について一切触れようとはしない。

それよりも彼がこの論で重視したのは「誤った社会状況」(falsche gesellschaftliche Verhältnisse, AMW 74)である。ヴォイツェック事件は「誤った社会状況」のなかで起きた。しかし、鑑定医のクラールスはそこを見落とし、犯罪責任のすべてをヴォイツェック個人になすり付けた。そのクラールスをビューヒナーは『ヴォイツェック』で批判し、「誤った社会状況」の「歴史的全体を再現」(die Wiedergabe der historischen Totalität,AMW 16)した。これが彼の論の骨子である。

しかし、彼がほのめかすだけにとどめておいたリヴィエール事件はビューヒナーの作品を考える上で注目すべき歴史的・社会的背景となるように思える。なぜなら、リヴィエールの減刑が確定した裁判およびその鑑定書が公表された一八三六年という年は、先にも述べた通り『ヴォイツェック』の創作時期と重なるからだ。その作者は医学者であり作品の素材は鑑定書である。当時の「歴史的全体」を問題とするのであれば、当然、フランスで起きたこの事件とその裁判は無視できまい。

【リヴィエールの話法】

ミッシェル・フーコーを中心とした研究者のグループはこのリヴィエール事件に着目し、『Moi, Pierre Rivière, ayant égorgé ma mère, ma soeure et mon frère…』(邦訳題名『ピエール・リヴィエールの犯罪　―　狂気と理性』)という題名でその研究成果を一九七三年に一冊の本にまとめて報告している。

フーコーたちはなぜこの事件に注目したのか。「まえがき」で彼自身こう述べている。

> ある事件、事例、出来事について、それを中心として、それぞれ系譜、形式、構成、機能を異にするさまざまな話法(ディスクール)が交叉しあっているからだと思う。(FP 7)

彼らのグループの研究方法はこの「まえがき」の文に呼応している。犯人の供述・犯人の手記・裁判官・検察・弁護人・医者・当時の新聞記事などを並べて配置し、一つの事件を語る際に、それぞれの立場でディスクールがいかに異なるか、そこを鮮明に浮き立たせる。そのねらいは、「話法どうしの、独特の闘争、対決、力関係、戦闘」(FP 7)を示すことにある。それはたとえば、検察対弁護士という立場上の違いからも現われる。また、司法関係者の法律専門用語と殺人犯の言葉との間

にも起こる。さらに細かく見ていけば、鑑定医どうしの論争にも認められる。フーコーが関心を持ったのは、それぞれがそれぞれに見合った言語を駆使して相手を制圧し支配しようとする戦略としての話法（ディスクール）である。その話法には言語学的な特徴がはっきりと表われる。具体的に言えば、使う言葉の種類（たとえば、専門用語、学術用語、方言、マスコミの扇情的な見出しとして使われる決まり文句など）や、それらの言葉にもとづきそれらの言葉に規定される文脈などである。これを逆から見れば、言語学的な特徴に目を配れば、それを使う人間の社会的立場・役割、論理の組み立て・思考・感情・心の持ち方などがかなり明瞭になるということだろう。

この報告書に、犯人のリヴィエールの『手記』の全文が掲載されている。殺人を犯した直後の状態を、その手記のなかで彼はこう回想している。

そしてはるか遠く、森までたどりつく頃には、もうすっかり正気にかえっていました。ああ、どうしてあんなことが、と思いました。自分は人でなしだ。不運な犠牲者たち。いったい自分によくもあんなことができたものだ。いやあれは夢なんだ。ああ、何とほんとうのことなんだ。地獄よ、この足もとで口を開け。大地よ、わたしを呑みこめ。そういって私は泣きじゃくり、地面をころげまわりました。(FP 109f.)

ここでリヴィエールは奇妙なことを書いている。「いったい自分によくもあんなことができたものだ」、「いやあれは夢なんだ」。まるで、殺人を犯したのは自分ではないかのような口ぶりである。しかし、自分がやったということはわかっている。だからこそ、この後すぐに、「ああ、何とほんとうのことなんだ」と続ける。ここには、殺人行為と日常との不連続な断層がある。つまり、殺人を犯しているときの自分とその後で自分の犯行をふりかえるときの自分との間にある不連続である。そこに、深淵がある。過去の自分と今の自分を結ぶかけ橋がない。リヴィエールはそのことに戸惑っているのだ。今思えば何もかも夢のように思える。しかし、その自分が・・・。正気に返れば、「ああ、どうしてあんなことが」と思うしかない。

さらに奇妙なことに、こんなことも書いている。

そして自分があんな罪を犯したのは、正気の沙汰ではなかった、と感じられてきました。私は裁判所に出頭して、ヴィールで逮捕されようと、心を決めました。しかし真実をすっかり自白してしまうことには、ためらいがありました。はじめは、自分が悔い改めていることを申し述べるつもりでした。しかし、それよりは次のように申し立てよう、という考えが浮かびました。つまり私は幻を見て、そうするように導かれたのであること、父のあらゆる苦しみを自分の苦しみとしてしまった私は、聖霊や天使を見たこと、聖霊や天使は神の命令によってそうするように告げ、私はそうするように定められており、もしその行為をし終わったら私を天に挙げてくれると告げたこと、そして私はそのことばを念頭に置いてあの行為をしたこと、だが犯行直後に正気にかえり、悔い改めていること、を申し立てることです。事実、そういうことは、私が述べたほかのことについては起ったのです。(FP 112)

犯行後いよいよ意識が戻り、自らが犯した行為の恐ろしさがわかればわかるほど「正気の沙汰ではなかった」と強く感じる。そこで自首することを考え、その際の申し立てをあれこれ思いついたときの様子を書いた件である。

ここの記述は実に興味深い。一つの出来事が自分の身に起こったときそれを言葉でどう表現したらいいのか。そのときの戸惑いがある。こうとも言えるし、ああとも言える。どんな言い方でも言えるし、どんな言い方でも全部は言いきれない。言葉もしくはその言葉による文章、さらにはその文章を続けることで何かを言い表わそうとするときの頼りなさあいまいさ不確実さにリヴィエールは直面しているように思える。

具体的に言うとこうである。「はじめは、自分が悔い改めていることを申し述べるつもりでした」。これは、罪を犯した人間が警察に出頭するときの決まり文句を並べようと思ったということだろう。「しかし、それよりは次のように申し立てよう、という考えが浮かぶ。ここで彼は、自己弁護のために嘘を言おうと考えを翻したと取ることも可能だろう。だが、「事実、そういうことは、私が述べたほかのことについては起こったのです。」と引用の最後で書いている。こんな言い方もできる。しかしあまりにも唐突で人にはとても理解してもらえるはずがない。それでも振り返ってみれば、実際にこうとも言えるのだからともかく書いてみた。つまり、リヴィエールはここで、自分にしか通用しないかもしれない言葉をあえて使い

始め、その独善的な言葉を基本にした文章で殺人前後の経緯を再現しようと試みているのである。

そのリヴィエールのディスクールでは、「幻を見て」その幻に「導かれた」となる。さらに、「聖霊や天使は神の命令によってそうするように告げ」たと続き、「そのことばを念頭に置いてあの行為をした」ことになる。リヴィエールが組み立てたこの物語を要約すれば、自分の意思など関与しない絶対的な神の命令によって殺人が行なわれたということで、自分はまるで一つのロボットのようなものだったということだろう。

こう書いたものの、この物語で出来事のすべてを彼は言い切ったわけではない。不確かな部分、わからない部分は依然多々ある。しかし、こういう言葉でこういう言い方で書き記すことも可能であり、それはまたそれで一つの事実であり、これがこの時たまたま彼の頭に浮かんだ一つの言い方の塊だった。もしかしたらもっといい言い方で言えるかもしれない。そうした含みが感じられる。

リヴィエールの『手記』からの右の引用には、まさにフーコーが言うように、殺人者リヴィエールの独特のディスクールがある。

【リヴィエールの精神鑑定】

「神の命令」によって母・妹・弟を殺した。自らの殺人をそうふり返るリヴィエールには精神病の疑いがもたれた。しかし、いわゆる精神薄弱というような恒常的な知的障害があるというのではない。先に引用した部分からもわかる通り、自らの行為を冷静にふり返りそれを正確に文章に記す能力がある。むしろ、かなり知的な人間だとさえ言える。

たとえば、『手記』にはこういう記述がある。

私は常に、勉強し、向上しようという考えをもっていました。お金が入ることがあれば、本やゴーチエ師講義録全巻を買おうと思っていました。その講義録は、読み、書き、算術、幾何、地理、歴史、音楽、国語、ラテン、イタリア語などにわたり、全巻で六〇フランしました。私は進歩向上したいと考えていました。(FP 102)

若き農夫でありながらここまで知的な向上心がある。その人間の精神が異常であり病気であるということを客観的に証明するとなればかなり高度な医学的水準が求められる。こうした難問を抱えながら併せて二人の医者と一つの医師団がリヴィエールの精神鑑定を行なった。

ミッシェル・フーコーを中心とするこの事件の共同研究のメンバーの一員であるロベール・カステルは、[一四]この三人の医者たちの鑑定を大まかにまずこう分析する。

一、ブシャールの鑑定。すなわち、精神医学的知識は皆無で、リヴィエールを従来の抑圧機関、刑事裁判にゆだねるもの。

二、ヴァステルの鑑定。すなわち、狂気の特殊な徴候学を適用するもの。しかし、その指標はわりあい古くさく、犯罪の一部を精神医学の領域に含めるのに失敗している。

三、パリの大家たちの鑑定。すなわち、最大限の精神医学的権能と知識を結び合わせて、リヴィエールを、一八三八年の法律の改正をもうながす戦術の枠組のなかで新しい医学的組織に組入れるもの。(FP 256f.)

この分析を見ると、一八三〇年代のフランスの精神医学の動向がおおまかに浮き上がる。リヴィエールの精神鑑定に臨むにあたり、旧来の慣習で対応していた医者、当時の新しい学説を少しばかり取り入れた医者、そして、狂気についての最新の学説を武器にしていた医者たち。これらの医者が混在し鑑定についての論争があった。

それでは具体的にどのような論争だったのか、カステルの論を援用しながら順を追って明らかにしたい。

【ブシャールによる鑑定】

ブシャールの鑑定についてカステルはこう解説する。

ブシャールは、まず、古代ギリシャ以来、医学を貫いてきた古い気質学に頼る。また彼は、出血、器官疾患、墜落、頭部の打撲など、脳に作用してその機能を損なわせるような内的または外的な器質的病因を探し出そうとする。(強調はカ

ステル。FP 257)

この診断で注目すべきことは、精神医学からの見地というものがまったく欠けている点である。ブシャールのこの姿勢は当時の医学水準を代表しているという。つまり、精神医学という医学的枠組みがまだできていなかったので、結局、外科的な器官損傷と脳の働きとの関係を探るという旧来の方法にすがるしかなかった。リヴィエールの場合、これは見つからない。そうなると、責任能力はあるとの結論を出すしかない。

カステルは言う。

(…)ブシャールの「欠点」は、観察しなかったことではもちろんなく、理解しなかったことでもない。彼は、自分が観察したことを、専門化された知識のなかで把握し直すための範疇を欠いていただけである。(FP 257f.)

ここでカステルがいう「範疇」とは、精神医学という独立した分野での枠組みのことである。ということは逆に、精神医学という医学分野がブシャールを代表とする当時のフランスの一般的な医者たちの間ではまだしっかりと確立されていなかったことを示している。だからこそブシャールは術がなく、結局、リヴィエールの犯罪を「父の不幸、孤独な生活のためにメランコリーにまで至った彼の陰気な気質、一時的な興奮状態など、たがいに無関係な一連の原因のほぼ偶然的な結合」(FP 257)として理解するしかなかった。古代ギリシャ以来の気質学に頼るしかなかったとカステルが言うのはこの意味である。

このブシャールとほぼ同じ理論的立場にいたのが、ドイツの医者のホフバアウアーであるとカステルは位置付ける。ホフバウアーの著書『法医学概論』の第三部は一八二七年に仏訳され、「精神医学の領域に属し得る精神の一時的諸状態」という題が付いている。この題名からすると、この著書は、精神の一時的錯乱を精神医学の領域に持ち込もうとするためのひとつの試みであったと推定される。

この著書についてカステルはこう解説する。

法医学を確立し、その広大な応用範囲を示そうとするその著作の意図に動かされて、彼は、狂気と名づけることはできないが、ある行為への衝動を抑え切れない状態という範疇を作った。つまり、当人の責任を問うことはできないが、だからと言って狂気を宣告することはできないという場合が存在するわけである。(強調はカステル。FP 258)

カステルはこれを「まったく曖昧なずるい逃げ道である」と断定する。こう言ってみたところで刑法上では何の効力もないからである。しかしこの解説は以下のことを明らかにする。それは、一八二〇年代のドイツとフランスの医者たちが「狂気と名づけることはできないが、ある行為への衝動を抑え切れない状態」という精神現象に関心を向けていたという事実である。それこそまさに、部分的錯乱もしくは一時的錯乱の症状である。この症状は裁判では大きな問題となっていた。なぜなら、「当人の責任を問うことはできないが、だからと言って狂気を宣告することはできない」からである。となれば、犯罪責任能力の問題はどうなるのか。いずれにしても、ホフバウアーはその診断を裁判での犯罪責任能力の問題と関連させている。そして彼が目指したことは、まず、「狂気と名づけることはできないが、ある行為への衝動を抑え切れない状態」を精神医学という新しい分野で扱い、次に、その精神医学を裁判での精神鑑定の際に活用させることだった。「法医学」(médecine légale) を確立するということの意味はこれだろう。しかし、彼はその確固とした範疇を作り出すまでには至らなかった。

【ヴァステルによる鑑定】

次いで、二度目の鑑定に当たったヴァステルである。

カステルは言う。

リヴィエールの行動に関するヴァステルの見方は、知的不統一か精神的欠陥かという両極のあいだをゆれている。いずれの場合にせよ、彼が探し求めていたのは、思考能力の欠陥 ― 生れつきの薄弱または機能不全 ― の実証であった。

この先入観は、被告の身体的描写にはじまり、もろもろのささいな出来事をこの方向でまとめることによって彼の児童期を解釈する基準として使われ、犯行の時点でその極限に達した。ヴァステルによれば、リヴィエールは殺人に至るまで妄想から妄想へと進み、殺人は妄想的思考の黙示録的頂点であった。(FP 261)

リヴィエールは幼少期に思考能力を妨げる何らかの障害を抱え込み、この障害が発展して犯行に至った。カステルの解説に従えば、ヴァステルはこう解釈した。この見解は、フロイトの精神分析学を援用して現代的に解釈すれば、幼児期になんらかのトラウマが形成されこれが原因で殺人へと至ったという流れで把握できる。その点では、精神医学の領域で扱うという意向が色濃く感じられる。ここがブシャールとは異なる。しかしカステルが言うには、ヴァステルは新しい精神医学を意識しつつも基本的には「十八世紀および十九世紀初頭の狂気の概念にとどまって」(FP 262)いた。このためにヴァステルは、「先天性薄弱、準白痴を証明することに没頭」し、「精神医学制度のなかで、相対的に境界線的地位にいた」(FP 262)と位置付ける。つまり、旧来の医学と新しい精神医学の節目にいた医者という解釈である。

【エスキロール等による鑑定】

そして、第三回目の「パリの大家たち」の鑑定である。

第二回目の鑑定を担当したヴァステルと第三回目の鑑定を行なったエスキロールを中心とする医師団との決定的な違いは、「理解力以外の能力の機能と障害に関心を向け」(FP 262) たことにある。つまり、通常の理解力を十分に持っているのに(「先天性薄弱」もしくは「準白痴」ではないのに)、それでも精神病だというケースがあり得るということをエスキロールは見つけた。ここが画期的な点である。そうした病気を発見し、これに「偏執狂」(monomanie) という病名を付けて精神医学の領域で正式に認定する。これこそ、精神医学史上でエスキロールが果たした最も大きな功績だったと考えられる。なぜなら、「狂気と名づけることはできないが、ある行為への衝動を抑え切れない状態」という先のホフバウアーが提起した症状に対して一つの明確な範疇を与えたからだ。

偏執狂という精神病の発見以前には正常か異常かの区別が診断できなかった。しかし、偏執狂の発見によって異常だと認

定される。このことは当然、当時の精神鑑定に決定的な影響を及ぼす。リヴィエールの裁判ではその様子が実にクリアーに現われる。

カステルはこう言う。

ここに、ある行為が、精神医学的知識の進歩の結果、病的なものとなるさまがまざまざと見て取れる。それ以後、精神医学は、偏執狂という新しい範疇を用いて、それまではその網から漏れ、司法に任せざるを得なかった新しい行動の側面を扱うことができるようになった。(強調はカステル。FP 259)

ようするに、当時の精神医学が探し求めていた「新しい範疇」をエスキロールが確立したのだ。それまでは病気だとは認定されず放置されたままの状態であったものが、精神医学の発展によって病気だと初めて認知され、名前を付けられて一人前の病気になる。偏執狂という命名は、まさにその種の重要な意味を帯びていた。「エスキロールを中心として、狂気の概念が革新されつつあった。十九世紀を通じて影響を与えたのはこの革新である」(FP 262)とカステルは断言する。事実、部分的な精神錯乱はこの命名によって独立した病気として精神医学界で認知され、狂気の概念をより正確に把握するための革新的な役割を果たした。この時代の精神医学を概観する際にエスキロールの名が必ず出てくるのも、ひとえにこの命名のためである。

そして、精神医学界での彼のこの功績が裁判を決定的に変えた。それ以前には「司法に任せざるを得なかった」分野を偏執狂という病気の発見によって精神医学の領域に組み込むことが可能になり、裁判での精神医学の役割が飛躍的に増大する。先ほど引用した「パリの大家たち」の鑑定の要約で、「一八三八年の法律の改正をも促す戦術の枠組みのなかで新しい医学的な組織に組み入れるもの」とカステルが述べたのはこの意味である。

結局、第三回目の鑑定をしたエスキロールを中心とする医師団は、犯罪責任能力を認めた第一回目のブシャールの鑑定と第二回目のヴァステルの鑑定を退けた。その結果、一八三六年二月十九日、被告人のリヴィエールは死刑から終身刑に減刑された。

第二章　ヴォイツェックの精神鑑定

【ドイツで起きた三つの殺人事件の精神鑑定】

一八二〇年代・三〇年代のドイツでの精神鑑定とビューヒナーの作品との関係に注目したのはクラウゼである。彼は『ヴォイツェック』のテクストを一九六九年に出版した。そのテクストの解説で、この時期に起こった殺人事件ならびに鑑定書の公開という出来事を年表にして整理している。それを要約すると以下のようになる。

一八一七年　シュモリングによる愛人殺害事件。
一八二〇年　シュモリングの精神鑑定書の公表。
一八二一年　ヴォイツェックによる愛人殺害事件。
一八二四年　ヴォイツェックの公開処刑。第二回目のクラールスの鑑定書の公表。
一八二五年　第二回目のクラールスの鑑定書の再度の公表（世論の大きな関心を引き起こし、また、二十四年に出版されたものがすぐに絶版になったためだとクラウゼは説明している。）
この年に、マルクという医者がクラールスの鑑定に対して反論。さらに、マルクのこの論を批判し、クラールスの論を正当と見るハインロートの論が公表。
同年、シュモリング事件の第二審の弁論記録が公表。同時に、この雑誌の中で、クラールスとマルクの論が紹介される。
一八二六年　第一回目のクラールスの鑑定書の公表。
一八三〇年　ディースによる愛人殺害事件。
一八三六年　弁護士のポップが、殺人者ディースの公判、および、ディースには犯罪責任能力がないことについての論を公表。あわせて、まず、シュモリング事件の第二審の弁論記録と彼に犯罪責任能力がないとの結論を出した

鑑定医ホルンの鑑定書を紹介し、次に、ヴォイツェック事件、および、第二回目のクラールスの鑑定書とマルクの反論を紹介。(KW 160ff.)

この年表を見ると二つの事実に気づく。一八二〇年代・三〇年代のドイツの裁判では精神鑑定制度がすでに導入されていたこと。裁判での弁論記録や精神鑑定書やその鑑定に対する反論が公にされていたこと。この二点である。

こうした事実は精神鑑定という問題が当時の社会にとっていかに難しいものであったかを物語っている。そのなかでもとりわけ、ヴォイツェックの精神鑑定に対しては多くの議論が集中している。しかもその議論はなかなか決着がつかない。一八二四年の処刑直後から始まり十二年もたった一八三六年でもこの間の議論の内容の詳細が公表されている。つまり、ヴォイツェックの鑑定はドイツの司法界と医学界での長期にわたる論争の一つの争点となっており、一八三六年の時点でもなお続いていたのだ。さらにこの間、ヴォイツェックの鑑定書の公開と並行してシュモリングの鑑定書も公表されている。「かなりの程度で世論を興奮させた」(KW 160)とクラウゼが述べたのはこうした事実を踏まえてのことだろう。言ってみれば、ヴォイツェックの精神鑑定には鑑定制度を導入する際の裁判の諸問題が初歩的な形で現われていたのだ。

【シュモリングの話法】

クラウゼの論の特徴は、ビューヒナーが『ヴォイツェック』を創作するにあたり、ヴォイツェックの鑑定書だけではなくシュモリングやディースの鑑定書も参照したのではないかということを具体的に指摘した点である。彼がこだわったのは、鑑定書に記録として記載されている殺人者たちの言葉である。自らの身に起こった出来事を彼らは独特の言葉で語る。

たとえば、殺人の考えが浮かんだときのことをシュモリングはこう述べている。

その考えはまったくとつぜん思いついたもので、自分でもどうしてそんなことを考えることができたのかとびっくりしたし、その考えのあとですぐに、自殺しようという考えもうかんだ。(KW 174)

さらに、シュモリングの鑑定書には次のような件がある。

犯行の動機について聞かれると、彼はいつも頑なにこう言い続けた。その娘を殺害するという考えがやって来た([...], daß ihm der Gedanke, das Mädchen zu ermorden, gekommen sey, [...])。どうしてだか自分にもわからない([...], er wisse selbst nicht wie, [...])。この考えは、犯行を実行するまで自分を落ち着かせなかった。(KW 180)

クラウゼが引用したシュモリングのこの話法は独特である。いわゆる合理的な筋道というものがない。起こったことをただそのまま述べている。まるで自分などまったく関知しないかのように。ここには、前章で引用したリヴィエールの言葉と共通するものがある。リヴィエールは「神の命令」で行なったという。そしてシュモリングは、「どうしてだか自分にもわからない」けれども「その娘を殺害するという考えがやって来た」と言う。つまり、どちらも殺人は自分の自由意志に従って犯したものではないと述べている点で共通している。シュモリングもまた自分はその「考え」に操られるロボットだったとここで振り返っているのだ。

それでは、どうしてそんな「考え」が浮かんだのか。自分の考えではないとするとそれは誰の考えなのか。ここでシュモリングは途方に暮れる。彼自身にもわからない。「その考えはまったくとつぜん思いついたもので、自分でもどうしてそんなことを考えることができたのかとびっくりし」たし、そのことで彼は自殺することまで考えたという。説明がつかないのだ。しかし、その「考え」が浮かんだことは事実で、実際その「考え」は「犯行を実行するまで自分を落ち着かせなかった」と述べている。ここにもやはり、殺人者に特有のディスクールがある。

シュモリングのこうした言葉もまた『ヴォイツェック』のなかに、とりわけ、初期草稿のなかに取り入れられたのではないかとクラウゼは推定する。この推論を補強したのが、シュモリング・ヴォイツェック・ディースが引き起こした三つの殺人事件の共通点である。クラウゼによると、この三人の殺人者は、貧民、兵士、正式に結婚していない女との関係、その女との間に子供がいること、そして凶器がナイフであったことなどで共通しているという(KW 162f.)。さらに、この三人の殺人者にはいずれも精神障害の疑いがあって精神鑑定を受けその鑑定書が公表されている点も挙げる。

しかしクラウゼが指摘したのとは別のもう一つの重要な共通点がある。それは、犯行を説明するときの彼らの話法（ディスクール）である。先に引用したシュモリングの言葉がその典型である。犯行の経緯を説明する際のヴォイツェックの言葉とシュモリングの言葉は似ている。ヴォイツェックは「刺し殺せ！」という声にけしかけられて殺人を犯したと供述している(CG 515)。その声が誰の声なのかわからない。しかし、その声は聞こえてきたし殺人を犯すときには決定的なものとなった。ヴォイツェックの鑑定書だけではなくシュモリングやディースの鑑定書もまた『ヴォイツェック』の素材になったとクラウゼが推定した背景には、こうしたディスクールの共通性がある。

そのシュモリング・ヴォイツェック・ディースの三人の殺人者たちの精神鑑定の結果を述べておく必要があろう。シュモリングは、先に引用した言葉がもととなって犯罪責任能力がないとの判定を受けた(KW 179)。ディースもまた犯罪責任能力なしとの鑑定結果が出た(KW 203)。その結果いずれも減刑処分である。そして、ヴォイツェックは犯罪責任能力有りとの判断が下され処刑された。

【クラールスの鑑定への反論】

クラールスによるヴォイツェックの鑑定は正しかったのか。ヴォイツェックの処刑後この問題は残った。そのとき、新しい医学を学んだ一人の若い医学者が文学作品という形でクラールスの鑑定に異議を唱えた。それが『ヴォイツェック』である。フィエートアはこうした観点からこの劇を解釈した。

一九三六年の『ヴォイツェック』論[一五]で、フリーメイソンに関する妄想についての実在のヴォイツェックの言葉に注目し彼はこう述べる。

これは、精神的な錯乱の兆候として考えられ、それゆえに、犯行に対するヴォイツェックの責任は弱められ、彼は誤った裁判の犠牲者にされたのだと考えられないだろうか。そうなると、これは、鑑定医クラールスがこれらの現象について表明した見解に対して、より以上に医学に精通していたビューヒナーの側からの答えとなるだろう。(VW 172)

ここでフィエートアは、ビューヒナーが医学を学んでいたことを重く見ている。ヴォイツェックは精神病患者であった。しかしクラールスはその判断を誤り犯罪責任能力を認定した。そしてこの鑑定結果が決め手となって裁判で死刑の判決が出て処刑された。そのクラールスよりも「より以上に医学に精通していた」ビューヒナーは、医学という立場からの反論として『ヴォイツェック』を創作した。これがフィエートアの主張である。だから、この劇は「裁判官に対する裁判である」(VW 162)と彼は断言する。

この論のなかで、クラールスの鑑定に異議を唱えたマルクという医者の説を彼は引用した。ヴォイツェック処刑後の一八二五年、クラールスの鑑定に対してマルクはこう反論している。

ヴォイツェックの犯した行為が被告人の心の状態と必然的で直接的な関係があるのかどうかという問いに対して、確信を持って然りと答えてしまう者はそう多くはいないだろう。しかし、非常に高い確率で、はっきりとこう言い切ってしまう者はかなりいるだろう。つまり、ヴォイツェックの心と身体の病的な状態が殺人行為に影響を及ぼし、そのために犯罪責任能力は疑問視され、いずれにしても軽減されるように思える、と。(強調はマルク。VW 166)

マルクは慎重である。しかし、クラールスの鑑定とは逆に、精神的にも身体的にもヴォイツェックは病気である可能性が高く、犯罪責任能力を認定するのは疑問であるとの判断を下している。フィエートアは、こうした論争やビューヒナーが医学を学んでいたことを重く見た。

ビューヒナー没後百年に出たフィエートアのこの論を一九九〇年になって再評価したのがグリュックである。第二回ゲオルク・ビューヒナー国際シンポジウムの報告書のなかで、『ヴォイツェック ― クラールス ― ビューヒナー (概要)』という題の論文[一六]を彼は発表している。この論は、劇中のドクターと鑑定医クラールスの類似を指摘する。

要点は三つある。一つは、鑑定書を読むかぎり実在のヴォイツェックは「重度の精神病患者」(seelisch Schwerkranker, GW

426)であったこと。二つ目は、その彼を犯罪責任能力があると診断したクラールスの精神医学は「支配のための学問」(Herrschaftswissenschaft, GW 437) であること。三つ目は、ビューヒナーは『ヴォイツェック』でそのクラールスを裁いたという主張。この解釈それ自体はさほど画期的であるとは言えない。なぜなら、第二点の「支配のための学問」という言葉を「ビュルガートゥーム」の学問と言い直せば、いずれも、一九三六年にフィエートアがすでに強く主張していたことだからである。実際、この劇は「裁判官に対する裁判である」というフィエートアの先の言葉をグリュツクもこの論文の中で引用しこれを肯定している(GW 438)。

新しいと思える点はむしろ、ビューヒナーの文学を社会的な階級差の視点から論じようとする研究者がフィエートアの論に関心を示し始めたことだろう。なぜなら、フィエートアの論はマルクス主義を標榜するルカーチによってファショ的であるとの烙印を押された経緯があるからだ。[17]それ以来、ことに第二次大戦以降、フィエートアの論ほとんど顧みられなかった。

それゆえ、フィエートアの論を評価したグリュックのこの論文は注目に値する。しかしながら、『ヘッセンの急使』とクラールスへの批判を支配者階層への攻撃という点で関連づける部分のグリュックの論証(GW 438)には、イデオロギー的色彩が強く出ていて論理的関連が鮮明ではないように思える。さらに言えば、クラールス批判が『ヴォイツェック』全体の中で具体的にどのように表れているのか、それを実証的に明らかにするというところまでには至っていない。クラールスと劇中のドクターの関係を問題とするのであれば、たとえば、「自然」(die Natur) を敵視し嫌悪する劇中のドクターや大尉の姿勢が、人間の衝動や本能の働きなどは考慮しないというクラールスの姿勢と一致しているということについてはどうしても触れなければならない点だろう。人間の衝動や本能というのは「自然」のものだからだ。そして人間のこの「自然」(ヴォイツェックの主張) を人間の「意志の自由」(=ドクターの主張) と「道徳」(=大尉の主張) にビューヒナーは対立させている。この対立こそ、ヴォイツェック鑑定の際にクラールスが念頭に置いたものだった。ビューヒナーはその対立をそのまま『ヴォイツェック』のなかに持ち込んでいるのだ。

確かに、ヴォイツェックの言葉を迷信と決め付ける態度や日常生活の確認や道徳的な批判や脈拍の測定などグリュックが具体的に列記したドクターとクラールスの類似点(GW 436f)は非常に重要であり意味がある。しかし、類似点を指摘するだ

けでは論にならない。彼のこの論は概要であり完結していない。今後、どのような論を組み立てていくのか興味深い。

【ガル】

フィエートアは、『ヴォイツェック』は「裁判官に対する裁判である」と言う。グリュックもまたこのフィエートアの主張を受け継ぎ『ヴォイツェック』には鑑定医クラールスへの批判があるという方向で論証を展開する。それでは、ヴォイツェックの裁判の最中（一八二一―二四年）に、実際に、クラールスの鑑定に対する医者の側からの反論はなかったのか。フィエートアが引用したマルクの反論はヴォイツェックの処刑後の一八二五年である。

この点について医学的な分野から論考したのが八〇年代半ばに出たエーラー＝クラインの論一八である。この論文は、脳および頭蓋についてのガル (Franz Joseph Gall)という医学者の学説とビューヒナーの作品との関連について述べる。

彼によれば、ガルという医者は「部分的精神病」(partiale Geisteskrankheit)は脳の「機能障害」(die Funktionsstörung)が原因で起こる病気であるという新しい学説を提起した医者で、注目すべきことに、エスキロールよりも前に偏執狂という医学用語を導入して殺人・窃盗・放火などの犯罪を解釈していたという(OS 41)。

そのガルの学説についてエーラー＝クラインはこう解説する。

> 人間は自然の器官形成に規定されているということを強調するガルの進歩的な衝動説は、哲学的・理念的な自由の概念やそれらにもとづく精神医学を攻撃した。(OS 42)

この解説は、ヴォイツェックの鑑定書を読む上で重要な示唆を与える。なぜなら、第二鑑定書のなかでクラールスはこう書いているからである。

> 一方で、非日常的なもろもろのきっかけによって動揺して心が荒れ狂ってしまった状態で犯された行為、もしくは、自然の力に雁字搦めに縛られた本能的な意志の衝動に駆られた状態での行為、こういった行為に対する責任阻却事由を見つ

けようとしている一部文人や医学系の教官たちの熱意は高く評価するとしても、にもかかわらずもう一方で、これはすでにもう始まっていることだが、殺人衝動、放火欲、闘争欲、窃盗衝動、果てはどんな犯罪に対しても特定の衝動もしくは本能的拘束、つまり行為の必然性（強調はクラールス）を想定し、ために法の機能を麻痺させ、法医学の然るべき尊厳を奪うところにまで至るとなれば、この学説をむやみやたらと援用することによって生じるであろう混乱や不都合も考慮しなければならない。(CG 528)

ここに出てくる「一部文人や医学系の教官たち」の学説とは、まさに、「ガルに対してのみ向けられたパッサージュ」(OR 43) だとエーラー＝クラインは断定する。つまり、ヴォイツェックの精神鑑定をめぐってクラールスはガルの学説を意識しこれと対抗する姿勢を明瞭に示していた。ということは、ヴォイツェックの精神鑑定に関しては裁判の時点でもすでに論争があったということになる。

その論争の対立点である。エーラー＝クラインによれば、ガルは部分的精神病は脳の機能障害が原因で起こる病気であるという新しい学説を提起した医者であるという。さらに、この学説に従って「哲学的・理念的な自由の概念やそれらにもとづく精神医学を攻撃した」という。それでは、ガルの提唱した新しい学説とはいかなるものなのか、そして、「哲学的・理念的な自由の概念やそれらにもとづく精神医学」とは何をさすのか、この点について考えてみたい。

部分的精神病というのは、ホフバアウアーの著書『法医学概論』について解説したカステルの言葉を借りれば、「狂気と名づけることはできないが、ある行為への衝動を抑え切れない状態」ということであろう。つまり、ガルという医者も精神の一時的錯乱という症状に関心を向けていたと考えられる。日常生活は正常にこなせるが、部分的に、あるいは突発的に精神の錯乱が現われるというあの症状である。ガルはこれを精神病だと見なしていた。しかも、エスキロールよりも前に偏執狂という医学用語を用いて殺人・窃盗・放火などの現実の犯罪を解釈していたという。ということは、ガルの精神医学もまた犯罪の解釈と、より厳密に言えば、裁判での精神鑑定と結び付いていたということであろう。ここもまたエスキロールと同じである。というよりもむしろ、部分的精神錯乱に関するこの時期の精神医学の学説は常に裁判での精神鑑定に直結していたと考えていいだろう。ガルもその医者の一人だった。

そのガルの新しい学説をクラールスはヴォイツェックの精神鑑定の際に意識している。先に引用した鑑定書のなかにあるクラールス自身の言葉、「非日常的なもろもろのきっかけによって動揺して心が荒れ狂ってしまった状態」、あるいは、「自然の力に雁字搦めに縛られた本能的な意志の衝動に駆られた状態」とは、まさに、カステルの言う「狂気と名づけることはできないが、ある行為への衝動を抑え切れない状態」に対応している。簡単に言えば、こうした状態で犯された行為に対しては犯罪責任能力は問えない、なぜなら、脳の機能障害が原因で起こる病気だから。これがガルの論だった。対して、クラールスが右の引用で強調する「行為の必然性」とは、つまるところ、衝動や本能で犯した行為であるからそこには当人の意志の自由がないという意味である。こんなことを認めてしまえば社会秩序は維持できなくなる。これがクラールスの反論であった。

【精神派と身体派】

ヴォイツェックの精神鑑定をめぐるクラールスとガルの対立。より詳しく言えば、部分的な精神錯乱についての診断の相違。二人のこの対立は、一八二〇年代・三〇年代のドイツの精神医学界全体の対立でもあった。ゼーリング＝ディーツの論文『宗教的メランコリーの症例の再構築としてのビューヒナーの〈レンツ〉』は当時の精神医学界のこの動向を分析する。

この論によると、「精神の部分的錯乱」(die psychische Partialstörung) の解釈をめぐって一八二〇年代・三〇年代のドイツの医学界では「精神派」(Psychiker) と「身体派」(Somatiker)との間で論争があったという。その精神派は、「意志の自由(die Willensfreiheit)という公理と、精神の第一次発病についてのキリスト教の教えの原則を引き合いに出すことからはじめ、精神障害を個人の過失(selbstverschuldet) によるものと見た」。対して身体派は、ピネルやエスキロールらのフランスの新しい精神医学の影響を受けた医者たちで、部分的な精神錯乱の原因を個人の過失に求めるのではなく「身体的な病」(eine körperliche Krankheit)のためだと見なしたという(SB 230)。

ゼーリング＝ディーツのこの分析は重要である。これを参考にすると、エーラー＝クラインが論じたクラールスとガルの対立は、精神派と身体派という当時の精神医学界全体の対立のなかで起きたことだと考えられる。なぜなら、エーラー＝クラインが先に述べた「哲学的・理念的な自由の概念やそれらにもとづく精神医学」とは、具体的には、ゼーリング＝ディー

ツがここで説明する精神派の精神医学のことだと断定できるからである。人間の「意志の自由」を大前提とし、「キリスト教の教え」を基本にし、「精神障害を個人の過失」のせいにする。これをまとめれば、明らかに、「哲学的・理念的な自由の概念やそれらにもとづく精神医学」となる。

そしてクラールスはこの対立のなかで精神派の立場にいた。というのも、クラールスの論証の基本がこの精神派の方法と合致するからである。ヴォイツェックの犯行時の精神状態を鑑定するにあたり、彼はまず、犯行の前と犯行の際と犯行の後という三つの部分に区分する。そして、いずれの部分でもヴォイツェックには「意志の自由」があったということを立証するという方法を取る(CG 529f.)。さらに、ヴォイツェック個人の道徳的欠陥や自堕落な側面を彼は強調する(CG 491)。これは、「キリスト教の教え」を原則にして「精神障害を個人の過失」のせいにするという精神派のやり方に該当する。なんのことはない、クラールスは精神派の方法を遵守してヴォイツェックを鑑定したのである。

対してガルは、「人間は自然の器官形成に規定されているということを強調」し、この考えにもとづき、部分的に精神錯乱が現われる犯罪者には脳に機能障害があると診断する。つまり、部分的な精神錯乱の原因は個人の過失にあるのではなく、脳という器官の「身体的な病」にあるとの見方である。だから当然、こうした患者が衝動に駆られて行動する際には意志の自由がない。従って、その患者に対しては犯罪責任能力が認定できない。これがガルの衝動説である。明らかにこれは身体派の立場だろう。つまり、ヴォイツェックの精神鑑定をめぐるクラールスとガルの対立は精神派と身体派との対立でもあった。

そうなると、一八三〇年代のリヴィエールの精神鑑定の際にフランスの精神医学界で起きた対立が、一八二〇年代のドイツでのヴォイツェックの精神鑑定ですでに起きていたと考えられる。つまり、カステルが分析したように、部分的錯乱が認められる犯罪者に対して旧来の医学的知識で対応していた医者と精神医学の新しい学説を武器にしていた医者という対立である。歴史的に見れば、ヴォイツェックの精神鑑定でのクラールスとガルの対立はその雛型であった。しかもガルは部分的精神錯乱を病気だとはっきりと認定しエスキロールよりも早くその病気を偏執狂と名付けていた。ここで、ガルの学説とエスキロールの学説はつながる。リヴィエールの精神鑑定とヴォイツェックの精神鑑定。この二つは、時代や国境を越えて本質的な部分で通底する問題を抱えていたのである。

精神派と身体派のドイツでのこの論争は裁判での精神鑑定のあり方を問題にしていた。その具体例として、身体派の代表者であるフリートライッヒという医者の言葉をゼーリング＝ディーツは取り上げる。この医者は一八三二年に発表した『精神病の診断学』[一九]という著書のなかでこう述べている。

とくに私の立場を決定したのは、精神病の身体的な根源に関しての学説をしっかり擁護しようとする精神医学上のさまざまな見解の今日的動向である。実際、これほどにもすばらしい花を咲かせた精神医学を次のように祝福してもいいだろう。この見解は医者たちの間で数多くの支持者を得ており、やがては、精神的および道徳的に病んだ人間たちに対する信仰に凝り固まったあれほど多くの非人間的な判断を時とともに確実にすっかり駆逐するだろう、と。というのも、これほどの光に満ちた我々の自由思想の時代は、絞首台や刑車が裁判の代表者としてその血に飢えた鎌首を持ち上げたり、あるいは、自らの過失によって罪を犯した者として哀れな狂人を主の祈りや聖水で治そうとすることに決して耐えられないからである。(SB 230)

フリートライッヒがここで、精神病の原因を患者自身の自己責任に求めその患者たちを死刑台に送り込もうとする精神派の見解を厳しく批判していることは明らかだろう。つまり、身体派と精神派の論争は裁判での犯罪者の精神鑑定の問題と直結していた。しかも、この言葉をそのまま受け取れば、一八三〇年代のドイツの精神医学界ではエスキロールの学説を基盤にする進歩的な身体派が「医者たちの間で数多くの支持者を得ており」、旧来の学説を継承する精神派を駆逐しつつあるという状況が読み取れる。一八二四年のヴォイツェックの精神鑑定が一八三六年の段階でも問題となったのはこのためであろう。一八三〇年代になって勢いを増した身体派から見れば、クラールスの鑑定は「精神的および道徳的に病んだ人間たちに対する信仰に凝り固まったあれほど多くの非人間的な判断」の一つであり、これにもとづいた裁判は誤審であるとの可能性が高かった。

さらに、このフリートライッヒの言葉から身体派の医学者たちが目指していたヒューマニズムのようなものが感じ取れる。

具体的には、犯罪責任能力がない人間たちを死刑台に送り込むような野蛮な行いはもう止めようという動きである。犯罪責任能力の問題をもう少し詳しく医学的立場からしっかり検証し、そのことで精神的に病んだ人間たちを一人でも多く救う。そのためにこそ我々の医学がある。そうした社会的な使命感がある。フリートライッヒの右の引用を参考にすれば、ドイツの身体派の医学者たちにはこうした共通認識があったように思える。そして実際に、裁判での精神鑑定に深く関与した。シュモリングやディースの裁判での減刑判決はその成果であったと考えられる。

「犯罪者として罪がない」(als Verbrecher selbst schuldlos)。二〇殺人を犯した者に対してこう言い切ったのは若きゲーテである。『若きヴェルテルの悩み』で、嫉妬心から女主人を殺害してしまう若い作男の話を彼は扱った。「まるで悪霊にでも追い立てられるよう」([...] er sei als wie von einem bösen Geist verfolgt gewesen, GW 77)な精神状態でこの男は罪を犯す。その精神状態をまじかで見ており、自らもそれと似た状態に陥るかもしれないと感じたヴェルテルは、この作男が殺人を犯したと聞いたときすぐさまこう言い切った。言い切っただけではない。この男の裁判で弁護士として法廷に立とうとまで考える。ゲーテもまたここで、自らの意志とは離れたところで「内にある得体の知れない狂暴な衝動」(ein inneres unbekanntes Toben, GW 98)に駆られて罪を犯してしまう人間の犯罪責任能力の問題を扱っていたのだ。

この作品が発表されたのは一七七四年。ゲーテは法学を修め一七七一年から弁護士となりドイツ帝国最高法院で実務も見習っていた。裁判に無知ではなかった。フリートライッヒらの身体派の医学者たちがこのゲーテから影響を受けたかどうかはわからない。しかしその精神には共通するものがある。クラールスは自らの診断に異義を唱える者を想定して「一部文人や医学系の教官たち」という言い方をしている。衝動的に罪を犯した人間に対して簡単には犯罪責任能力を問えない。こうした観点で、文人と医学者の間には接点があったのかもしれない。

第三章　ビューヒナーとエスキロール

【医学者としてのビューヒナーのポジション】

一八二〇年代・三〇年代、ドイツの精神医学界は精神派と身体派に分かれていた。それでは医学者としてのビューヒナーはこの論争のなかでどのような位置にいたのか。

まず、ビューヒナーの父親のエルンスト・ビューヒナーである。彼もまた医者であり鑑定医の仕事もしていた。その父親が身体派に属するヨハン・ヴァレンティーン・ミュラーの論を自らの鑑定書[二]のなかで援用しているという事実をゼーリング＝ディーツは挙げる(SB 206)。彼女によれば、ミュラーという医学者は宗教的メランコリーという症状を扱い、その宗教的な狂気は実際に犯した罪とか自堕落な生活などに原因があるのではなく身体的な病気のせいだと主張したという(SB 228)。そのミュラーの学説をビューヒナーの父が精神鑑定の際に取り入れている。となると、ビューヒナーの父は身体派に与していた精神科医だと推定できる。

それでは息子のゲオルクはどうであったか。『ニゴイの神経システムについての覚え書き』(Mémoire sur le système nerveux du barbeau, 1836) と『頭蓋神経について』(Ueber Schädelnerven, 1836) という題名の付いた解剖学に関する二つの論文[三]を彼は書いている。ゼーリング＝ディーツはこの点についても関心を払う。一八二〇年にフランスで発表され翌年独訳されたエスキロール派のジョルジュの解剖学の論文の一節と、ビューヒナーの『頭蓋神経について』の論文の一節を比較対照させ共通点を指摘する。その共通点とは、「単純な生物についての神経解剖学の研究」であるという。

『頭蓋神経について』の論文でビューヒナーはこの解剖学の研究方法について以下のように述べている。

> 比較解剖学ではすべてのものをある一つの統一性(eine gewisse Einheit)へ、つまり、すべての形態を最も単純な原始的な形(der einfachste primitive Typus)へと還元することを目指している。(BU 293)

おそらく、この方法論にもとづきもう一つの論文『ニゴイの神経システムについての覚え書き』も書かれたのであろう。ニゴイというのは魚類であり脊椎動物のなかでは最も単純な形態である。その神経システムがわかればより高度な脊椎動物の神経システムが解明できる。つまり、複雑なものをいきなり解明するのではなく、単純な生物を研究の対照にして神経システムの基本的な形を知り、これをもとに複雑な生物の神経システムの仕組みを知るという方法である。この方法がジョルジュの解剖学の方法と共通しているということをゼーリング＝ディーツは明示する(SB 198f.)。

さらに、こうした比較解剖学の研究は「精神病理学の基盤」(die Grundlagen der psychopathologischen Wissenschaft) になっていたと彼女は述べる(SB 199)。この指摘は興味深い。彼女の論によれば、ピネルの弟子筋にあたるエスキロールの世代は先に紹介したガルの学説を取り入れ脳解剖学と神経解剖学にとりわけ強い関心を示し、「脳解剖学的・神経解剖学的な研究」(gehirnanatomische und neuroanatomische Forschung)に着手していたという(SB 198)。これは、精神病の原因を「身体的な」(somatisch) 側面から解明するための試みである。つまり、精神的な疾患の原因は脳と神経の身体的な器官障害で誘発されるものであるから、その器官の仕組みを知るために解剖学が必要となるとの考え方である。となると、ビューヒナーの二つの比較解剖学の論文は精神病もしくは部分的な狂気、つまりは、エスキロールの言う偏執狂の解明に照準を合わせた研究であったとの推定が可能になる。単純な生物についての神経解剖学の研究が精神病理学の基盤になるのはこのためである。

そうなると、ビューヒナーは明らかにフランスのエスキロール派の影響を受けた身体派の立場にいたと断定していいだろう。単純な生物の脳と神経に関心の的を絞ったビューヒナーの二つの解剖学の論文は、身体派の研究方法と歩調を合わせたものだと見なせる。さらに、ビューヒナーの父親が身体派の医者の学説を鑑定の際に援用していた事実や『ニゴイの神経システムについての覚え書き』がフランス語で書かれている点を考慮すれば、彼が身体派に属していた医学者であったことはまず間違いない。

それではクラールスは。これは先にも述べた通り精神派の医者であった。これをさらに裏付けるのが脈拍の測定を重視したという点である。ヴォイツェックの幻覚や幻聴はすべて血液循環の障害によるものだとの仮説を彼は立てた。そのため、診断のおりにはヴォイツェックの脈拍を頻繁に測定している。

精神疾患を血行異常と結び付けるこの方法は、フリードリッヒ・ビルトの狂気やメランコリーの解釈にもはっきりと認め

られる。ニミゼーリング＝ディーツによれば、彼は精神医学と生理学との関係の必要性は認めるものの、「器官異常を精神錯乱の第一原因と見なすラディカルな身体派のポジションに対しては激しく拒否していた」(SB 232)。つまり、精神錯乱は脳や神経の器官異常(die organische Anomalien) が主たる原因で起こるのではなく、それよりも、生理学の領域である血液循環の異常によって引き起こされると解釈していた。血行異常を高位に置くこの考えに従い、「診断の補助として脈拍の測定の重要性をビルトはとりわけ強調した」と彼女は言う(SB 233)。つまり、ヴォイツェックを診断する際にクラールスがたびたび脈拍を測定したのは、身体派の見解を激しく拒否したこのビルトと同じ観点からだった。

ビューヒナーは身体派の立場にいた。そしてクラールスは精神派の立場からヴォイツェックを鑑定した。となると、『ヴォイツェック』は「身体派」の医者が「精神派」の医者の鑑定を批判するために書いた劇だとの見方が可能になる。

【エスキロール派のジョルジュ】

ビューヒナーの解剖学の論文はエスキロール派のジョルジュの論文と方法論が共通している。そのジョルジュについてゼーリング＝ディーツはこう解説する。

ピネルによって描かれた病気のイメージを「殺人偏執狂」(monomanie homicide)として新たに生き生きとさせたエスキロール派のジョルジュは、法医学の法律的・国家的領域で認定される部門として精神医学を定着させようとするキャンペーンの中で、一八二五年頃から偏執狂の概念をその戦いのための武器にし、これによって、十九世紀の五〇年代にまで続く論争の引き金を引いた。王政復古期の精神医学の代表者たちと偏執狂を支持するリベラル派との間で、はっきりとした分極が顕著になり、後者のリベラル派は、意志の自由を疑問視し、犯罪者や殺人者たちが無罪であることの弁明条件を拡大し死刑を批判した。(SB 200f.)

エスキロール派のジョルジュのこの動きは、先に引用したドイツの身体派のフリートライッヒの言葉と明らかに重なる。

[二四]彼女がここで言うフランスでの王政復古期の精神医学というのは、人間の「意志の自由」(die Willensfreihet)を公理として犯罪者の自己責任を追及する精神医学のことであろう。これは、ドイツの精神派と同じである。そして、その「意志の自由を疑問視し、犯罪者や殺人者たちが無罪であることの弁明条件を拡大し、死刑を批判した」リベラル派とは、ドイツの身体派の動きと同じである。フリートライッヒもまた一八三二年に発表した著書のなかで、精神病にかかった犯罪者を死刑台に送り込むような野蛮な制度は早く廃止すべきだとのキャンペーンを張っていた。つまり、部分的精神錯乱の症状が現われる犯罪者の診断についてのドイツでの精神派と身体派の対立と同じものが、フランスの精神医学界でもほぼ同時期に起こり、ドイツでの論争はフランスでの論争と並行していたのである。

歴史的に見ればそれゆえ、一八三五年十一月十二日に死刑の判決が下されたリヴィエールをエスキロールを中心とする精神科医たちが一八三六年二月十七日に死刑台から救ったという事実は、フランスのエスキロール派の医学者たちにとってはもちろんのこと、ドイツの身体派の医学者たちにとってもかなり大きな出来事であったと想像される。これこそまさに、ドイツの身体派の医学者たちがドイツの裁判で目指していたことでもあったからだ。一八二四年に一応の決着が付いたヴォイツェックの精神鑑定が一八三六年にドイツで再びクローズアップされたのもこうした歴史的背景によると思える。

このリヴィエールの裁判の後でフランスでは一八三八年に法律改正が起こる。これは、「法医学の法律的・国家的領域で認定される部門として精神医学を定着させようとする」(SB 200)ジョルジュの思いが一つの形になったということだろう。

そのジョルジュから解剖学の分野でビューヒナーは影響を受けている。しかも、その解剖学は精神病理学のための基礎研究である。この事実は無視できまい。ビューヒナーの解剖学の研究もまたジョルジュの研究と同様に偏執狂の解明を目指し、さらにはまた、身体派の医学者として裁判での精神鑑定や法制度の改革を視野に入れていたと推定できるからである。しかもジョルジュは、「ピネルによって描かれた病気のイメージを『殺人偏執狂』として新たに生き生きとさせたエスキロール派」の医学者である。これらのことがらはいずれも、戯曲『ヴォイツェック』の時代背景を見る上で意味を持つことになる。

【エスキロール】

それではそもそも、エスキロールとはいかなる人物なのか。フーコーの研究メンバーの一人であるフォンタナ[二五]はこう解

説する。

（…）ピネルが指し示した、狂気が判然とせずに理性に沿っている海岸の上に、エスキロールは一八一〇年代以降、偏執狂、または部分的狂気という建物を建てた。その語は、エスキロールによれば、部分的錯乱にはすべてあてはまるのである。精神異常者は、依然としてその理性をほとんど完全に行使でき、一つの、あるいはごく少数の点についてしか錯乱していない。しかも彼が病気にかかる以前に感じ、思考し、行動したように、推論し、思考し、行動しているのである。

(FP 275)

右の引用は、エスキロールが命名した「偏執狂」(monomanie) という病気の概念をかなり具体的に解説している。先天的な白痴もしくは頭部の外的損傷による知的障害、そういったものとは別種の精神病があることを彼は発見した。その精神病は実にわかりにくい。なぜなら、その病気にかかっていても「依然としてその理性をほとんど完全に行使でき、一つの、あるいはごく少数の点についてしか錯乱していない」し、この「病気にかかる以前に感じ、思考し、行動したように、推論し、思考し、行動している」からである。つまり、外見だけ見れば普通の人間とまったく変わりがない。しかし一時的に錯乱が起こる。エスキロールはこうした正常と狂気の中間領域に関心を向け、正常と狂気が同居するこの精神現象に対して精神医学という学問的立場からこれを精神病として正式に認定し、部分的錯乱のすべてに対して偏執狂という名を付けた。

そして彼の学説は精神医学界でも司法界でも徐々に認められ実際に裁判を動かした。その経緯はリヴィエールの裁判ですでに見てきた通りである。言ってみれば、エスキロールが打ち立てた偏執狂についての学説は学問的な権威となり精神鑑定の際に最も有効な武器となった。だからこそ、フランスの精神医学者たちもドイツの精神医学者たちもこのエスキロールの学説を継承しこれを補強し発展させることに懸命になった。なぜなら、この学説を裁判の際に導入することで元来は犯罪責任能力がない人間を死刑台から奪還できるからだ。先に引用したフランスのジョルジュやドイツのフリートライッヒの言葉にはその思いがあふれている。

しかし問題は残る。偏執狂という言葉で何もかも片付けられるのか。部分的な錯乱に病名を付けたものの、エスキロール

はこれでこの精神錯乱の現象をすべて理解し処理したわけではなかった。逆に、この現象には途方もない広がりと奥深さがあることを同時に感じていた。

偏執狂全般についてのエスキロールの見解を彼自身の言葉を引用しながら、フォンタナはこう紹介している。

いずれにしても、偏執狂は本質的に、「もっとも奇妙で、もっとも変化に富んだ現象を観察者に提示する病気であり」、それは「あらゆる神秘的な感受性の異常さを含んでおり（一八二〇）」、それを研究することは、「情念の認識と不可分」である。「偏執狂は人間の心の中に座をもち、その病気のあらゆる微妙な様相を捉えるには、その座を探索しなければならない」。(FP 276)

フォンタナのこの要約には、偏執狂という精神病をエスキロールがそもそもの始まりからどうとらえていたのか、その根本的な考え方が表れている。この病気はそれ自体、「あらゆる神秘的な感受性の異常さを含んで」いるとの認識から彼は出発している。これを別の言い方をすれば、この病気は合理的な解釈で説明し切れるものではないということであろう。だから、人智では到底及ばない領域があることを認識しこれを知った上でこの病気を解明しなければならない。偏執狂という命名の背後にはこうした考え方がある。「神秘的な」とエスキロールが言うのはこの意味である。

「人間の心の中に座をも」つという言葉にもこの姿勢は表れている。人間の心の動きは人間の理性ではなかなかつかみきれない。だから決め付けたり確定したりすることは逆にいつも危険をともなう。そうすることよりも、心のなかにある座を虚心に「探索しなければならない」。つまり、偏執狂という言葉でエスキロールはこの病気を限定し処理しているわけではない。むしろ、この病気の奥深さや不可解な部分を常に感じつつそれをも含めて部分的錯乱の症状の全体に偏執狂という病名を付けたと思われる。「情念の認識と不可分」という言葉もこれを表している。この言葉で彼は、患者の生活やそこでの心身の状態まで十分に見極めることが必要であるとの疫学的立場を強調する。症候それ自体だけ切り取って見るのではない。その症状が現れる社会生活全般にも目を配る必要性がある、そうした考え方だ。

そうなると、偏執狂という病気が形成される裾野は限りなく広がり、その裾野全体の広がりは人間の目では到底見極めら

れない。この点について、フォンタナはさらにこう論評する。

偏執狂という、かくも異論を呼び、論議の的となった概念は、ピネルやその弟子たちの体系においては根本的に神秘的で不可解なままであった一連の事象（部分的錯乱、錯乱の欠如、一時的正気）を包括し続けてやまなかった。偏執狂という概念はそうした事象の「不確定性」をつくりあげたのであり、それこそまさに「本質的」不確定性と呼ぶべきである。このピネルの体系からすると、理性的狂気、偏執的な狂気は断層であり、不分明な地帯（ゾーン）であり、不透明な地点であった。(FP 279)

フォンタナのこの説明は、部分的精神錯乱の診断に対するピネルをはじめとするエスキロール派の根本的な姿勢をうまくとらえている。その姿勢とは、一人の人間に連続して現われる部分的錯乱・錯乱の欠如・一時的正気という現象は「根本的に神秘的で不可解」なものであるから、これを「断層」もしくは「不分明な地帯（ゾーン）」あるいは「不透明な地点」としてそのまま受け入れるという態度である。フォンタナがここで言う「不確定性」というのはこの意味である。確定しない。不可解な領域はそのまま残しておく。なぜなら、この病気にはそうしたものがあるのだから。そういう姿勢である。

こうなると、ともすれば何も言っていないようにも受け取れる。しかし、「不確定性」とは筋道を立ててとらえられる論理がないということで、別の表現を用いれば不条理だということである。部分的精神錯乱が内包する不条理な現象をそのまま不条理な現象として認識する。見方を変えれば、そこには、人間の精神の自然現象を正確に見つめようとする科学的な態度とその自然の動きに対する謙虚な姿勢があるように思える。

しかし、彼ら以前の保守的な精神医学の体系はこうした精神現象をそのまま認めようとはせず合理的な理由付けをした。具体的には、当人の道徳の欠如のためだとか意志の弱さや自堕落な生活のせいだとかの理由である。エスキロールの偏執狂についての概念は、部分的錯乱に関するこうした従来の解釈への手厳しい批判の上で成立している。それは当人のせいなどではない。「神秘的で不可解」な病気のせいなのだ。そのことを医者も裁判官も認識しなければならない。そういう姿勢がエスキロール派の精神医学には貫かれている。

第四章　偏執狂と『レンツ』および『ヴォイツェック』

一八二〇年代・三〇年代のフランスとドイツでの精神鑑定の動向を追うと、偏執狂という病理がくっきりと浮き上がってくる。そして、『ヴォイツェック』の主人公にしても『レンツ』の主人公にしても部分的な精神錯乱の現象が認められ、彼らは偏執狂の患者であると見なせる。しかも、作者のビューヒナーは偏執狂の解明を目指していた身体派の医学者であると推定できる。これらのことを考慮すると、偏執狂についての病理は『ヴォイツェック』と『レンツ』を解釈する上で一つの鍵になると思える。そこで、この二つの文学作品のテクストと偏執狂の学説との関係を考えてみたい。

一、　偏執狂と『レンツ』

【シェーネの論】

ビューヒナーは医学者であった。ここを重視したのは一九三六年のフィエートアの論だった。その後、同じくこの点に関心を向けたのはアルプレヒト・シェーネである。『ドイツ文学における狂気の文学的形成についての解釈』という題名の博士論文[二六]を戦後の一九五一年に彼は提出した。しかし、ルカーチの系譜を引くハンス・マイアーの論[二七]が戦後のビューヒナー研究をリードするなかでこの論はほとんど顧みられなかった。

この論文の冒頭でビューヒナーの『レンツ』をシェーネは取り上げる。彼は言う。もともと、オーベルリーンの手記には「現代精神医学の先駆者」が記述したと言えるほどに「心理学的な信用性や正当性」があった。その手記を目にしたビューヒナーは、これを文学の素材としてよりもむしろ医学論文のための資料に役立てようとする「純粋に学問的な関心」の方が強かった。このことが『レンツ』の「文体」(Stilform)に決定的な影響を与える。シェーネは強調する。実在のレンツは「病人」(ein Kranker)であり「精神異常者」(ein Irrsinniger)である、と。そして文体の基本を成す言葉は、その病の「症例の提

示」(die klinische Vorlage) のために正確なものでなければならず、その目的は、ただひたすら「現実に近づけるための表現」である、と。ここでは、「通常の言語の表現手段」は役立たない。そこで、既成の文学的表現を捨て「症例の提示」に絞り込むような言葉が選ばれ『レンツ』独特の文体が生まれた、と。(SI 28-35)。

テーマの解釈も文体の解釈と一体になっている。「小説のライトモティーフという概念がそもそもこの小説にあてはまる限りにおいて、そのライトモティーフとは狂気のみである。その狂気は隠された力として世界の現実を動かす。『レンツ』におけるすべての出来事は、まるで、深淵の上に渦巻く渦でしかない。」(SI 56)ようするに、この短篇での出来事、議論、主人公の言動、これら一切の基底には主人公の「狂気」(der Wahnsinn)があり、すべてはここから生まれてくるという解釈である。その狂気をキリスト教の「聖なる病」(Morbus Sacer)と同等に彼は位置付ける。なぜなら、彼によれば、「狂人は一般世間から疎外されることで神的なものに近づき、苦しむことで同時に彼岸への敷居をまたぎ入口に立つ」からである。その地点こそが彼の言う「Gegenwelt」(SI 52)であり、この領域へ踏み込むから短篇『レンツ』は単なる症例報告にとどまらない文学作品となる。これがシェーネの論の骨子である。

この論で注目すべきは、ビューヒナーはもともと医学的関心からオーベルリーンの手記に向かったとシェーネが断定している点である。レンツの狂気の様態を記録するという点でオーベルリーンの手記には正確さがあった。ビューヒナーがこの手記に目を留めたのはこれが理由である。したがって、『レンツ』のテーマは狂気の現象をそのまま再現することに絞られ、そこには医者としての学識が遺憾無く発揮され、文体のほうもやはり医者がカルテに症例を記録するような形式になる。素材との出会いは純粋に医学的な関心からだったと規定し、ここを起点にして『レンツ』が書かれたとの仮説を展開するシェーネの論は、ビューヒナーが研究していた医学と文学の合一を鮮やかに浮き上がらせる。

さらに、『レンツ』を解釈する上でもう一つの重要な示唆も与える。単なる症例報告にはとどまらず文学作品としての味付けがあると強調している点である。医学的関心から出発しているにもかかわらず、医学に偏りすぎず、かといって文学作品にありがちな曖昧な形で処理するのでもない。これは、狂気というものの様態をそのまま正確にぎりぎりのところまで写し取ろうとした必然的な結果だと思える。なぜなら、狂気には医学だけでは解明できないものがあるからだ。医学者のエスキロールが言うように神秘的で不可解な領域があるのだ。その不確定な領域は文学で表現するしかない。そしてビューヒナ

ーはその領域に果敢にも踏み込んだ。シェーネの論はここを言おうとしている。そしてこれがまさに医学だけではなく文学という形式をビューヒナーが必要とした理由になる。『レンツ』を解釈する上での基本をシェーネは言い尽している。

【ゼーリング＝ディーツの論】

これまでたびたび援用してきたゼーリング＝ディーツの論文『〈宗教的メランコリー〉の一つのケースの再構築としての〈レンツ〉』の主眼は、「宗教的メランコリー」(religiöse Melancholie) に関するエスキロールの学説とビューヒナーの『レンツ』が呼応しているという仮説を立てこれを立証することにある。

この論の新しさは、一八二〇年代・三〇年代のフランスとドイツの精神医学界の動向を視野に入れて『レンツ』を解読しようと試みた点にある。その動向のなかで彼女がとりわけ重視したのがエスキロールである。彼の学説は当時のドイツでも注目され、『エスキロールの精神障害の全般および特殊病理学』二八という題名で一八二七年にドイツ語訳が出て紹介されている。彼女が主として用いた方法は、この独訳書と『レンツ』のテクストを比較することである。

彼女によれば、「メランコリー」(die Melancholie) の症状についてのエスキロールの記述とビューヒナーの『レンツ』は、内容的にも「言葉の上」(wörtlich)でも重なる箇所が多々あるという(SB 209)。とくに顕著な重なりが認められるのは「宗教的メランコリー」との関連である。

この「宗教的メランコリー」というのは、許されぬ罪を犯したと感じ、救済の希望もなく呪われていると思い込み、最後には自殺へと傾く一連のメランコリーに対してエスキロールが付けた病名である。この病気を四つの段階に彼は分類した。第一段階では、周囲の物音や動きに過敏に反応し感覚の錯乱が起こる。第二段階では、一つの対象や一つの考えに精神が集中しこれが「固定観念」(eine fixe Idee)になる。この段階に至ると、一つの苦悩や悲しみにとらわれているため他のことには「無関心」(die Gleichgültigkeit)になり、孤立感や虚無感を強く感じ、同時に、「不眠」(schlaflos)や「拒食」(alle Nahrung verweigern)、自我の統一の喪失感などの症状が現われ、自殺への衝動も起こる。そして第三段階に至ると「痴呆」(die Demenz)状態に陥り、「倦怠感」(die Langeweile)・無感覚・記憶の喪失・精神の錯乱が続く。そして第四段階では「白痴」(der Idiotismus)になる。ゼーリング＝ディーツの論は、この四つの段階と『レンツ』の各部を逐一比較し、「宗教的メランコリー」につい

てのエスキロールの記述と『レンツ』のテクストがパラレルになっていることを立証する。これらの症状はいずれも『レンツ』の主人公の精神状態を際立たせる特徴となるだけにこの比較は実に興味深い。

ことに、その切れ味が最も鋭くなるのは第三段階の痴呆状態と『レンツ』の結末を対比させた箇所であろう。エスキロールはこの段階の症状についてこう説明する。

> 錯乱した者は関心もなければ拒絶もなく、憎しみも愛も感じない。すべての事柄に対して完全に無関心である。(中略)まわりで起こっていることには刺激されず、彼らにとって人生の出来事というのはまったくない。なぜなら、思い出も希望もそれらに結び付けられないからである。すべてに対して無関心。何一つとして心を動かさない。(SB 222f.)

「憎しみも愛も感じない」(weder Haß noch Liebe empfinden)、「すべての事柄に対してきわめて無関心」(die größte Gleichgültigkeit für alle Gegenstände)。これらの精神状態は短篇『レンツ』の主人公の終盤での心の動きを最も際立たせている特徴である。その特徴が「宗教的メランコリー」の患者に見られる症状でもあるというのだ。しかも、エスキロールのフランス語を翻訳したこの箇所のヒレのドイツ語と『レンツ』のテクストのドイツ語には明白な重なりがある。ビューヒナーが『レンツ』を創作するにあたりエスキロールの学説を下敷きにしたことはまず間違いなかろう。

そればかりではない。たとえば、主人公レンツは激しい苦痛によって我に返るという行動をしばしば繰り返す。これは、当時の精神医学が唱えていた「療法」(die Therapiemethode)と関係すると彼女は言う(SB 212)。さらに、水の中に飛び込むという行為も、先に言及したフリートライッヒという医者の唱えた学説に対応していると言う(SB 213)。ゼーリング＝ディーツはここでもまたそれらの学説と『レンツ』のテクストを比較対照する。ようするに、ビューヒナーの『レンツ』はエスキロールを頂点とする一八三〇年代のフランス・ドイツの精神医学の最先端の学識をベースにして書かれた短篇である。そのことを彼女は実証したと言える。

「宗教的メランコリー」という精神病の進行状況を基本にして筋が進行し、しかも言葉の点でもその症状を説明する医学用語が基本になっている。これは他でもない、あのシェーネが指摘したことでもある。ゼーリング＝ディーツの論は、エス

キロールという医学者の病理学を具体的に取り上げることでシェーネの先の論を裏付けたと言える。

【レンツの話法】

だが、ゼーリング＝ディーツはこの論で一つの興味深い疑問を出している。それは「不安」(Angst, SB 224f.) についてである。『レンツ』のテクストでは不安という言葉が何度か出てきて、「名状しがたい」(namenlos, GL 6)、「言いようのない」(unnennbar, GL 7)、「言い知れぬ」(unaussprechlich, GL 27)等の形容詞が付き、これらが主人公の心理状態を表す一つの中心的な言葉になっている。ところが、オーベルリーンの手記でも、メランコリーの症状についてのエスキロールの記述でも、不安はビューヒナーの『レンツ』ほどには重点が置かれていない。これはどうしてか、という疑問である。

エスキロールは「恐れ」(die Furcht)については言及するもののこの恐れには対象がある (objektbezogen)。しかしビューヒナーの短篇ではその対照がはっきりしない。ゼーリング＝ディーツは言う。

不安の感情はレンツでは空虚の感覚と確かにしばしば結び付いているが、はっきりとした因果関係の結び付きはなく (ohne deutliche Kausalverknüpfung)、不安の感情は基本的には対象がない(gegenstandlos)ままである。(SB 224)

『レンツ』の主人公の心身の状態は宗教的メランコリーの病の進行に沿っているように見えた。しかし、主人公の不安を問題にするとなると、確固としているように思えたゼーリング＝ディーツの論に少しばかりほころびのようなものが見え始める。

主人公レンツの不安は確かに「名状しがたい」とか「言いようのない」等の言葉で表現されている。しかし、「はっきりとした因果関係の結び付きはな」いと言い切れるのか。表面的にはまったく脈絡がないかのように思えるレンツの不安には実は理由がある。彼の固定観念や無関心や孤立感や虚無感などの「症状」もこの不安と密接に関連している。そして、この不安は必ずしも宗教的な罪悪感から来るものだけではない。それとは別のもっと切迫した原因があり、不安とその原因との

因果関係はこの短篇のなかで示されている。

問題はそれがわかりにくいことである。なぜなら、その因果関係は誰にでもわかるような形で客観的に説明されているのではなく、主人公のレンツにしか通用しないきわめて主観的な感覚による推論で構成された因果関係だからである。そしてこの短篇は主人公のその話法を基本にして筋が構成されている。その話法で組み立てられた筋にゼーリング＝ディーツはまったく関心を払わない。だから不安が浮いてしまう。しかしもしその筋がわかれば、レンツがなぜあの箇所で不安を覚えるのか、なぜここで孤立感や虚無感に苛まれるのか、それらの理由や必然性がかなり明らかになる。

その筋については『レンツ』の作品論ですでに詳述したことなので、二九ここではその要点だけを述べたい。

短篇『レンツ』のなかにこんな一節がある。

(…) 夜中に母が現われた、白い服を着て墓地の暗い壁から出てきた、白いバラと赤いバラを胸にさしていた、それから隅に沈んだ、バラがゆっくりとそこから生えてきた、母はきっと死んだ(…)。(GL 12)

先に述べたレンツにしか通用しないきわめて主観的な感覚による推論で構成された話法とはこれである。これが夢なのかそれとも幻覚なのか、説明はない。母が壁から出てきてそれから沈んでそこからバラが生えてきた。だから、母は死んだ。これがレンツの因果関係である。墓地の暗い壁や白い服や白と赤のバラも関係しているのかもしれない。バラが生えてきたこともなにかの暗示なのかもしれない。いずれにしてもこうしたことの全体から母が死んだと彼は感じる。手紙が来たとか誰かから教えてもらったというのではない。

オーベルリーンもこれと似たようなことを話す。

(…) 父が死んだときに野原で一人でいた、それから声を聞いた、それで父が死んだことがわかった、家に帰ってみるとその通りだった。(GL 12)

これもまた、主観的で本能的な感覚にもとづいた推論で構成された話法である。声が聞こえたから死んだ。我々に馴染んだ話法によれば、ここには客観的で合理的な因果関係はない。しかし、話法を変えればこれが強い因果関係になる。その話法では理性ではなく感覚が基本になる。言ってみれば、虫の知らせ、胸騒ぎ、第六感。

こうした感覚について作者はレンツにこう語らせる。

(…) 一番素朴で一番純粋な自然は原始的な自然と一番近い関係にある、人間が洗練されてきて精神的にものを感じたり精神的に暮らしたりするようになるとその分だけこの原始的な感覚が鈍化するのだろう、この感覚は高度なものだとは思わないし、この感覚は他の五感のようには十分に独立してはいない、しかしながら、もしもそれぞれの形態がもつ独自の生命と触れ合い、石や金属や水や植物に対して魂を持ち、月の満ち欠けに応じて花が大気を感じ取るように自然のどんなものでもまるで夢のように自分のなかに迎い入れることができれば、それはきっと尽きることのない愉悦であろう。(GL 12f)

ここに、「原始的な感覚」(der elementarische Sinn) という言葉が出てくる。この感覚は「他の五感のようには十分に独立してはいない」。しかし自然とともに暮らしている人間にはこの感覚が保たれている。ここでつまり、虫の知らせや胸騒ぎや第六感という五感以外の感覚を作者は問題にしたのだ。いや、ここだけではない。こうした感覚をもとにして組み立てられる因果関係を作品の冒頭から作者は意識して張り巡らせていた。ここでその手の内を明らかにしたようなものだ。文明化され洗練された街から山を障壁にして断絶されたこの短篇の場の設定。その閉塞された場には、案の定、地下の水脈や鉱脈が感知できる娘がいたり、山で何かに捕まえられて霊と戦う男がいる(GL 12)。そして村人たちは牧師のオーベルリーンに夢や予感について話すことを日常にしている(GL 9)。作者ビューヒナーは用意周到である。すべては、主人公の原始的な感覚で組み立てられる因果関係をこの短篇のなかに持ち込むための準備である。もちろん、オーベルリーンの手記にはこんな記述は一切ない。

そしてこの短篇はその原始的な感覚で主人公が察知した「なにか」でいきなり始まる。書き出し部にこんな一節がある。

(…)彼はなにか(etwas)をさがし求めていた、まるで消えてしまった夢を追いかけるように、しかしなにも見つからなかった。(GL 5)

自分の心が「なにか」をさがしていることは感じている。しかし、それが何なのかは自分ではわからない。けれどもその「なにか」を求める衝動のようなものがこの時の主人公の心に一瞬通り過ぎる。

何かを感じて心と体は騒ぐ。しかし、なぜなのかその原因は認識できない。これは、この短篇の主人公の精神のあり方を特徴づける。もう少し詳しく言えば、主人公の原始的な感覚は何かを感知しているのに、主人公の理性はそれを把握できない。そこに、ずれがある。そしてこの短篇はそのずれを徐々に埋めていく形で進行する。

この後すぐに、その「なにか」はもっとはっきりしたものになる。脳裏を一瞬掠めただけだったものが巨大になり濃厚になる。

何か(was)が後から追いかけてくるような気がした、まるで何かぞっとするもの(was Entsetzliches)に追い付かれてしまうような気がした、人間には耐えられないようなにか(etwas)が、まるで狂気が馬にまたがって迫ってくるような気がした。(GL 6)

あの「なにか」はここではもっと切迫したものになる。「狂気が馬にまたがって迫ってくる」という具体的なイメージも浮かぶ。しかし、あくまでも「気がした」というまでのこと。心も体もぞっとして縮み上がるほどなのに、その原因がわからずにただ震えるばかり。原始的な感覚がなにかをつよく感じているのに、彼の理性はそこに届かない。そのずれは、「気がした」というレヴェルでしか表現しようがない。彼自身としてはまるで身中に得体の知れない生きものでも抱え込んでいる状態。この状態がこれ以降ずっと続く。そして、不安はこの状態から生じる。つまりレンツの不安とは、心身がなにかを

感知して騒いでいるのにそのなにかがわからない状態から来る。

これがこの短篇の始まりである。

本能的な感覚と理性的な認識との間にあるずれ。その状態で彼はたびたび不安に襲われる。しかし、そのずれが埋まる。その詳細な経緯がこの短篇では鮮明に表現される。中盤の山小屋の場面以降の展開である。

山小屋に入る直前にも、山小屋のなかでも、レンツは「夢現つ」(träumend)の状態にいた。「vielleicht fast träumend」、「aber langsam träumend」、「Lenz schlummerte träumend ein, (...)」「(...) und der bald helle, bald verhüllte Mond, warf sein wechselndes Licht traumartig in die Stube.」(GL 17f)。作者はここで「träumend」という言葉を繰り返し、レンツが夢のなかにいるような状態であることをたびたび強調する。そして実際、レンツは居眠りをする。そうなると、この夜の山小屋で彼が見たり聞いたりしたことは現実のことなのかそれとも夢のなかでのことなのか、区別が付かない。つまり、この場面での出来事は夢と同質なのだ。作者はそう設定している。夢のなかであれば理性は後退する。感覚が、それも原始的な感覚が目覚める。

この夢現つの状態で聞いたのが、「山で声を聞き、それから谷に稲光が走るのを見た」(GL 18) というここに住む男の話であり、この状態で見たものがここにいた病身の少女から出ているかのように見えた「不気味な輝き」(ein unheimlicher Glanz, GL 18) である。この二つは結び付いている。男は山で「あれ(es)に捕まえられてヤコブのように戦った」(GL 18) とも話している。この男は土地の人間。それもヴァルトバッハの人里よりもさらに奥まったところに暮らしており、「地下の水脈が見えたり霊を呼び寄せることができる」(GL 19) という噂もあり、土地の者はこの男のところに巡礼するという。これらは明らかに、先の原始的な感覚が最も純粋に保たれている男という設定だろう。その男が山で声を聞きその後で稲光が谷を走るのを見る。これは、オーベルリーンの先に引用した話と同じである。あの話は伏線だった。この男は山小屋に暮らしている少女の死を山奥で感じ取ってきたのだ。この男が「身を伏して小声で熱心に祈った」(GL 18) のもこのためである。娘が死なないようにと男は必死で神に祈っていたのである。しかし、その後でレンツは少女の顔から出ている不気味な輝きを見る。この光とはつまり、死の兆候である。ここで、男が山奥で聞いた声と谷で見た稲光と不気味な輝きが結び付く。これらはすべて、病気の少女に死が間近に迫っていることの合図だった。そして半覚醒の状態で甦ったレンツの原始的な感覚はそ

のことを無意識のままに感じ取っていた。なんのことはない。ようするに作者もまた、母の死を確信した先のレンツの話法にならってこの場面を構成したのだ。

翌朝、しかしながら目覚めてみればレンツの原始的な感覚はすっかり後退してしまう。少女の顔を見てもそこに「幽霊のようなもの」(das Geisterhafte, GL 19)は感じられない。しかしどこかに昨夜の記憶はある。それは、恐い夢を見た後でその詳細は覚えていないが恐さだけが残っているのと似ている。その証左となるのが、帰り道、あのものすごい男が「おそろしい声でなにかを語っているような気がするときがあった」(GL 19) という一文である。

本能的な感覚と理性的な認識との間にあるずれ。山小屋から帰ってきたレンツはこのずれのために振り回される。彼の心のなかでは決定的なことが起こった。身体には「容赦のない力」(eine unerbittliche Gewalt)や「ものすごい衝動」(ein gewaltsames Drängen)があり明らかに何かに反応している。食事も喉を通らず訳もなく祈ったり熱に浮かされたような夢も見る。しかし、振り回されるだけで、どうして自分の心と身体がそうなるのか当のレンツにはわからない。そんな時に、「自分がかつていた状態に関しての予感がぱっとひらめき、この予感が、彼の精神の荒涼としたカオスのなかに幾筋かの光を投げかけた」(GL 19)。過去についての何かの予感が一つの手がかりになりヒントになる。その気配があった。しかしそれ以上のことはまだわからない。

そんな状態にいたとき偶然耳にしたのが女中の歌である。

この世に楽しいことはない
いい人いるのに遠いところ

「これがレンツの心に落ちる」(GL 20)。ここで彼はすべてがわかった。この瞬間、原始的な感覚で感じていたものに理性的な認識が追い付いた。ずれが消えた。

山小屋の一夜の出来事は簡単に言えばレンツの夢である。夢のなかで「遠いところ」にいるフリーデリーケが出てきて死にそうになっていた。この夢はつまり、フリーデリーケの死の暗示だった。そのために彼の心も身体もあんなにもひどく騒

いだ。女中の歌を聞いてそのことに初めて気づいた。「自分がかつていた状態に関しての予感」とは、このことだった。

ここがわかればこれ以降のレンツの言動は理解できる。この後レンツはフリーデリーケのことが心配になり居ても立ってもいられなくなる。「オーベルリーン夫人、あの女性がどうしているのかおっしゃっていただけませんか？　あの人の運命が気懸かりでもう心が潰れそうなんです」(GL 20)。ここで彼はそばにいたオーベルリーン夫人にすがる。誰でもよかったのだ。とにもかくにも確かめたかった。しかしオーベルリーン夫人にわかるはずがない。目を白黒させるだけである。

フリーデリーケに死が迫っている。それがわかれば今度はいよいよ不安になる。しかし彼は何もできない。神に祈るだけである。そんな時に、フディで子供が死んだという話を聞く。「彼には固定観念のようにその意味がわかった」(GL 21)。彼がわかったその意味とは、フリーデリーケが死んだということである。この少女の死は「遠いところ」にいるフリーデリーケの死の報せだった。この後で灰をかぶり荒布に身を包んで死んだ子供のところへ行ったのは、この子供を生き返らせることができれば遠くにいるフリーデリーケもまた生き返ると思ったからである。しかし子供は生き返らない。聖書に書いてある通りに復活の儀式を行なったのに神は何もしてくれない。ここで神などまやかしで何の役にも立たないがらくたであることを痛感する(GL 22)。フリーデリーケは死んだ。そしてもう生き返らない。これが、この時の彼の絶望的な思いだった。

しかしよくよく考えてみればそのことに確証はない。そこで、旅から帰ってきたオーベルリーンに「あの女性はどうしているのか」と早々に確かめる。しかし埒が明かず、「ああ死んだんだ！　まだ生きてるのか？」と口走る(GL 23)。その後でレンツにとって決定的なことが起こる。「ヒエログリフ」によってフリーデリーケが死んだことを確信してしまうという出来事である(GL 26f.)。この謎めいた「ヒエログリフ」というのも原始的な感覚と関連する。「なにか」を感じたのが本能的な感覚を通してのことなら、それを確認するのもまたそれと同じ感覚。レンツの筋道の組み立て方（話法）にはそれなりの一貫性(konsequent)がある。

そしてここで、原始的な感覚で感じた「なにか」を後から頭で認識していくというこの短篇の冒頭から始まった追い駆けっこが完了する。「狂気が馬にまたがって迫ってくる」と導入部で彼が感じたのは、自分の認識がそこに届いてしまうのを恐れて逆転して表現しただけのこと。その「なにか」から彼は逃げ回っていた。オーベルリーンにすがり神と出会ってほっとしたなどと思ったのもひとりよがりの思い込み。そのことを彼もほどなくして自覚する。「底無しの苦しみから逃れるた

めに不安になってこれまで何にでもしがみついてきた、自分がいかに何ごともただただうまく片付けようとしているのか、瞬間瞬間深く感じた」(強調は筆者。GL 17)。名状しがたい不安にレンツがたびたび襲われる原因もここにあった。そしてこの段に至って、自分の原始的な感覚がすでにずっと前から、具体的にはこの短篇の書き出し部から、フリーデリーケの死を感じ取っていたことを知った。「彼はなにかをさがし求めていた、まるで消えてしまった夢を追いかけるように」。あの時には見つからなかった。それが、ここで見つかったのだ。

主人公のレンツにしか通用しないきわめて主観的な感覚による推論で構成された筋道とはこれである。墓地の暗い壁から母が出てきて隅に沈んだから母は死んだ、あの話法と同じである。作者はこれと同質の脈絡でここまでの短篇の流れを構成してきたのだ。

こんなものは当然、レンツにしかわからない。オーベルリーン夫人が目を白黒させるのも、オーベルリーンがレンツの質問の真意がわからぬままに的外れの説教をするのも道理である。はたから見れば気が狂ったとしか思えない。いきなり衝動に駆られて動き回ったり妙なことを突然口走ったり、まさに、振り回されるだけである。しかしレンツの話法を把握すると彼の言動にはそれなりの必然性があることがわかる。そしてゼーリング＝ディーツが問題にした不安もこの脈絡を見ればある程度理解可能になる。「なにか」がわからないままの状態ではレンツはどうしても不安になる。何をしていてもそれがいつもどこかで彼を脅かす。その状態が冒頭からここまで続いていたのだ。

しかしこの後はもうこの短篇は動かない。フリーデリーケは死んだ。この世から消えた。そして自分だけが一人でこの世にとり残されている。これがレンツのこの時の状態である。虚無感、孤立感、そしてそれでもなお自分がいまここにいなければならないという存在の重さ。これらはすべて彼女が死んでしまったと確信したからこそである。ものすごく愛していた人間が死んでしまった後で虚無感と孤立感に襲われる。それは人の常だろう。そしてその虚無感や孤立感はどうすることもできない。そうした精神状態に陥ってしまった人間の心と身体の動きをぎりぎりのところまで正確に描写することにこの短篇はこれ以降焦点を絞り込む。

次の段落がそれである。「ヒエログリフ」でフリーデリーケの死をレンツが確信した後に、「彼の状態はそのうちますます絶望的なものになっていった」(GL 27) という文で始まる段落が来る。この段落は、「彼はしばしば壁に頭を打ち突けた、さもなければ、自分の身体に激しい肉体的苦痛を加えた」(GL 29) という文で終わる。デードナーはこの段落を「Berichtpassage」(DL 9)と名付け、この段落は他の部分との関連が薄いので「補遺」(die Paralipomena, DL 68) として扱ってみてはどうかと提案する。三〇つまり、削除の提案である。こうした見解が出てくるのは、これまで述べてきた主人公レンツの話法を無視しているからであろう。そしてその話法に目を向けないということは、主人公の心を理解できないということにもなる。

話は簡単なのだ。恋人が死んだから虚無感と孤立感を覚え、心と身体がコントロールできなくなるほどにひとりでに暴れ出し、狂気すれすれの状態に陥ってしまった。作者が作り出した短篇の場面配列は自然である。この配列にはそれなりの連続性と必然性がある。「彼には憎しみもなければ、愛もなく、希望もなかった、恐ろしい空虚だけだった、それでもその空虚を満たそうとする拷問のような苛立があった。彼にはなにもなかった。」(GL 27) これは、フリーデリーケが死んだと知った直後の虚無感だろう。「自分が一人きりで存在しているかのような気がした。」(GL 28) これは、孤立感である。どちらも無理はない。そして猫との格闘を一つの頂点としてこの段落で詳しく報告されるいくつかの出来事は、フリーデリーケがこの世から消えたと思った直後からレンツの心と身体が狂い始め心身に変調が起こったということを具体的に示している。

その正気と狂気の中間領域にいる主人公の精神状態を作者は正確に描こうとする。ここで中心となっているのは自分で自分が確認できなくなることへの本能的な不安である。「眠りと覚醒の境界」(zwischen Schlaf und Wachen, GL 28) で恐ろしい状態に陥るのは意識が消えかかるからだろう。意識が消えれば自分がどこへ連れて行かれるのかわからなくなる。それこそ、狂気が彼に取り憑く(der Wahnsinn packte ihn,[...] GL 28) 瞬間だ。そうなれば自分がなくなる。だから、「正気に帰るためには、どんな単純なことでもいいからともかく何かしなければならない」(GL 28) と思う。自殺を試みるのも、「肉体的苦痛によって自分自身を取り戻そうとする」(GL 29) ためでしかない。いずれも自分のありかを確かめるためである。そこまでするのだから、狂人になることをこの時のレンツは本気で恐れていたということだろう。この段落に出てくる「名状しがたい不安」(eine unbeschreibliche Angst, GL 27)、「言いようのない不安」(eine unaussprechliche Angst, GL 27)、「ものすごく激しい不安」(eine heftigste Angst, GL 28)、「ものすごく恐ろしい不安」(die fürchterlichste Angst, GL 29)とは、いずれも、自分の存在が消

えてしまうことへの本能的な不安である。

愛する者を失い苦しみ、狂気すれすれのところまで追い込まれ、その果てに人間の精神の限界を越え狂人になる。これは、『ヴェルテル』で述べられている「死に至る病」(eine Krankheit zum Tode, GW 48)の経緯である。レンツは今その途上にいる。そして、気が狂ってしまうことを恐れ必死になって自分を保とうとしている。逆から言えばまだ狂人ではない。しかし、だからといって、彼を正気に引き戻そうとするのが彼の意志だというのでもない。それもまた一つの強力な自己保存本能である(Eigentlich nicht er selbst tat es, sondern ein mächtiger Erhaltungstrieb,[...], GL 28)。ここでの不安とは結局、この自己保存本能から出てくる。自らの存在の消滅に対する不安というのは最も根源的な不安でこれは本能的なものだと考えられるからだ。

いっそのこと狂気の彼岸へ行ってしまいたいという衝動は強い。猫への突進はその現われである。しかしその衝動を押さえ込む本能もまた強い。レンツはその二つの相反する本能に翻弄され右往左往するばかり。「人形」(eine Marionette, GW 65)同然である。

冒頭からここまで、流れ全体を見れば、愛を失い精神が徐々に破壊して行く一人の人間の苦悩が浮き上がる。「でもぼくが、もしぼくが全能者であれば、分かっていただけますか、もしぼくがそうだとしたら、人が苦しんでいる姿をぼくは黙って見てられないでしょう、ぼくだったら救ってやります、救ってやるでしょう、(...)」(GL 29)。レンツは苦しみに追い込まれた果てにこう言う。しかし救いもなければ安らぎもない。その苦悩はまさに「死に至る病」である。彼は逃げ場のない「独房」(Zelle, GL 25)にいる。その姿は老婆の話すメルヒェンの子供の姿と重なる。この子と同じように彼もまた愛する者を失い最後には真っ暗で何もない空っぽの(finster, nichts, leer)「ひっくりかえった壷」のなかに一人きりで(allein)閉じこめられている(ausweglos)。そしてそのなかで泣くのだ([...] er schluchzte,[...], GL 29)。

【レンツの苦悩とその症状】

ここでゼーリング=ディーツの論に戻りたい。

周囲の物音や動きに過敏に反応し感覚の錯乱が起こる。一つの対象や一つの考えに精神が集中しこれが固定観念になる。それから無関心、孤立感、虚無感。これと並行する不眠や拒食の症状。その後での自我の統一の喪失感、自殺への衝動。そ

して倦怠感・無感覚・記憶の喪失・精神の錯乱。彼女が紹介したエスキロールの宗教的メランコリーの症状とこの短篇の主人公の精神状態は似ている。そこに異論はない。しかし、症状だけを見てそのときどきのレンツの心の動きを見ないとすれば完全ではない。レンツのこれらの症状はすべて苦悩が深まる度合いに応じて現われ、それらの症状が現われる必然性を作者は短篇のなかで示しているからだ。

その原因は必ずしも、恋人を置き去りにしたという罪の意識ばかりではない。すでに見てきたように、レンツが精神錯乱に陥る原因はフリーデリーケの死と関連している。彼女の死についての不安が強いから、彼女が死んでしまうことが絶望的な苦しみだから、そして、彼女が死んでしまったら何もかもなくなるから、だから彼の精神は激しく動揺し錯乱する。作者はつまり、症状の断片だけを羅列してこの短篇を構成しているわけではなく、どうしてそのような症状が現われるのかその因果関係をレンツの身になりきって彼の側から表現している。体験話法を取り入れたのもこのためである。主人公のなかに入りきって彼が見たり聞いたり感じたりしたものをそのまま書き、それらがもとになって組み立てられる筋道もまたレンツの筋道通りに展開している。この短篇のわかりにくい筋の構成は体験話法を選択したことから来る必然的な結果なのだ。

その独特の話法についてである。実在のレンツは、オーベルリーンの手記を見るかぎりこれまで説明してきた原始的な感覚による脈絡だけで実際に動いていた。フリーデリーケという名の少女が滞在先で偶然死ぬと、この子供を生き返らせようとする(OA 458)。その後で、旅帰りのオーベルリーンにフリーデリーケの生死を確かめ、このときの言葉(Ach, ist sie todt? Lebt sie noch?)は短篇に取り入れられている(OA 462)。「ヒエログリフ」で彼女の死を確信するレンツとオーベルリーンの会話は、わずかの変更はあるもののまさに一字一句正確にコピーされている(OA 468)。もちろん、子供の死から「ヒエログリフ」に至る順番はこの通り。ということは、オーベルリーンの手記を読んだビューヒナーは実在のレンツの頭のなかで構成されていた筋道を理解していたということになる。そして短篇の筋を構成するにあたり、ビューヒナーは実在のレンツの頭を支配したこの筋道の本質を把握し、これを作品全体に大胆に広げて筋を作った。山小屋の場面以降の展開はその典型である。つまり、この話法は作者が頭で考え出したのではない。素材に倣ったのだ。

しかし、その筋道である。置き去りにしてきた恋人と同名の少女が死んだから恋人も死んだ。けれど、その子が生き返れ

ば彼女も生き返る。しかしそれも駄目だった。そして最後には「ヒエログリフ」を通してやっぱり死んだんだと確信する。こんなふうに物事を、しかも人の生死に関わることを安易に信じ込んでしまう人間はもともとどこか頭がおかしい。そう見たほうが妥当のように思える。なぜなら、現実はどうかというと、フリーデリーケはこのとき死んでなどいなかったからだ。ビューヒナーも当然そのことは知っていたはずだ。

それでは、これは精神病患者の頭が作り出した特有の筋道だと見ていたのか。気になるのは、原始的な感覚について述べた作中のレンツの先の説明である。ここには、「石や金属や水や植物に対して魂を持ち」という言葉がある。これは、すぐさまノヴァーリスを代表とするドイツ・ロマン派を思い起させる。ビューヒナーの短篇ではこの原始的な感覚は精神病者に特有の感覚として否定的に扱われるのではなく、むしろポジティブに紹介されている。「それはきっと尽きることのない愉悦であろう」という言葉がこれを端的に示している。つまり、こうした感覚を疾患として見るのではなく、もしかしたら人間にはそういう感覚もあるかもしれないという含みを持たせている。こうした姿勢は、『ヴォイツェック』ではさらに顕著に認められる。

さて、それではエスキロールの学説との関係である。レンツは完全に狂ってはいない。「依然としてその理性をほとんど完全に行使でき、一つの、あるいはごく少数の点についてしか錯乱していない」。しかも、「以前に感じ、思考し、行動したように、推論し、思考し、行動している」。この点では、偏執狂の患者であると断定できる。そして実際、ゼーリング＝ディーツが実証的に示したように、エスキロールの学説をベースにしてこの短篇が創作されたことはまず間違いない。

しかし、ここで再びシェーネの論を思い起したい。ビューヒナーはもともと純粋な医学的関心から素材に向かった。その医学的な関心と文学的な創作との合体が『レンツ』であると見た。その理由は、この短篇のテーマがそもそものはじまりから人間の狂気を扱おうとしているからである。狂気というものは合理的には把握できない。奥深さがある。だから医学だけでは解明できない。これがシェーネの見方である。

このシェーネの論は、偏執狂についてのエスキロールの見解と共通するものがある。エスキロールもまた、部分的精神錯乱という精神病について「不確定性」を強調していた。この病気には本質的に神秘的で不可解な部分がある。そのわからな

い部分をいわば尊重しそれをも含めて偏執狂という病名を付けている。だからこそ、「偏執狂は人間の心の中に座を持ち、その病気のあらゆる微妙な様相を捉えるには、その座を探索しなければならない」と説いたのだ。そしてビューヒナーもまた『ヴォイツェック』の初期草稿では、「人間は誰でも深淵だ。のぞき込めばめまいがする」[三]と登場人物に言わせている。知れば知るほど不可解で神秘的なものが見えてくる。偏執狂に向き合うエスキロールの医者としての態度と部分的錯乱をテーマに文学を創作するビューヒナーの姿勢には通じ合うものがある。病理だけをビューヒナーはエスキロールから取り入れたのではない。部分的な精神錯乱という病を通して人間の精神の途方もない奥深さを感じる。ここを学びここを共有していたと思える。

それだからこそ敢えて偏執狂を文学という形式で扱ったのだろう。『レンツ』には広がりがある。奥深さがある。ひとつの合理的な解釈では限定できない。どんな解釈で切り取ったとしてもそこからこぼれ落ちるものがある。そしてこぼれ落ちたものこそ、もしかしたらもっと重要なものかもしれないという思いを抱かせる。それが、『レンツ』であろう。

二　偏執狂と『ヴォイツェック』

【殺人偏執狂】

『ヴォイツェック』と『レンツ』は確かに方法は異なるものの、ビューヒナーの時代ではきわめてアクチュアルな精神医学上の議論のなかに組み込まれるという点で、パラレルなプロジェクトであると見なせる。(SB 236)

ゼーリング＝ディーツは論文の最後をこの言葉でしめくくった。しかし、『ヴォイツェック』とエスキロールの学説との関連はこの論では具体的に言及されていない。

その『ヴォイツェック』とエスキロールの学説を結び付けるのが「殺人偏執狂」(monomanie homicide)という症候である。

エスキロールの言葉を引用しながらこの病気についてフォンタナはこう説明する。

偏執狂が殺人偏執狂になった場合には、それは「部分的錯乱で、それを特徴づけるものは、多少とも狂暴な殺人衝動で、当人は内心の、しかし錯乱した確信や、想像力の昂揚や、誤まれる推論や、錯乱状態の情念などによって挑発され、または、知能や感情に何らの変性も観察されない場合には、盲目的本能、抗しがたい性向、名状しがたいあるもの、などによって挑発されたのである（犯罪者は、その名状しがたいものを、しばしば、「声、悪霊、私を駆りたてたあるもの」と呼んでいる）」。(FP 275f.)

偏執狂に「多少とも狂暴な殺人衝動」が現われればこの症状を殺人偏執狂と名づける。これがこの言葉の基本的な定義であろう。右の引用で注目すべきはその殺人衝動の分析である。殺人衝動が挑発されるのは、一つは、「錯乱した確信や、想像力の昂揚や、誤まれる推論や、錯乱状態の情念など」であり、それらの症状が認められない場合は、「盲目的本能、抗しがたい性向、名状しがたいあるもの」だと断定する。さらに、後者をより具体的に説明するために、犯罪者たちがしばしばその「名状しがたいもの」を「声、悪霊、私を駆り立てたあるもの」（筆者強調）と表現することも付け加えている。

この「声、悪霊、私を駆り立てたあるもの」というのは、現実に殺人を犯した者の口から出てくる言葉と対応している。「聖霊や天使は神の命令によってそうするように告げ」と話したリヴィエール。「その娘を殺害するという考えがやって来た。どうしてだか自分にもわからない。この考えは、犯行を実行するまで自分を落ち着かせなかった」と殺人の動機を聞かれたときに答えたシュモリング。そして「声」にけしかけられて殺人を犯したと述べるヴォイツェック。殺人者たちのこれらの言葉は、いずれも、殺人の瞬間に彼らが「名状しがたいもの」を感じ、それが殺人を行なう上で決定的に作用したということを示している。

彼らだけではない。裁判関係の仕事をしていた若きゲーテは『ヴェルテル』のなかで殺人事件を扱い、後に殺人を犯すことになる作男当人の言葉として、「まるで悪霊にでも追い立てられたように」([...] er sei als wie von einem bösen Geist verfolgt gewesen, [...] GW 77) とか「自分の身に何が起こったのかわからない」([...] er wisse nicht, wie ihm geschehen sei, [...] GW 77)と

いう文を接続法第一式で作品のなかに組み込んでいる。そしてこの話は「文学上の作り話ではない」(keine dichterische Erfindung, GW 78)とヴェルテルに断言させている。

「声、悪霊、私を駆りたてたあるもの」。これらの言葉は殺人者自身の口からたしかにたびたび出てくる。殺人者自身にとってもその時のことは不可解なのだ。だから、後になって犯行を振り返ってみればそれは夢のなかでの出来事のような感じになる。「いやあれは夢なんだ」とリヴィエールは言った。

そして、一九五八年に東京の小松川で殺人事件を起こした季珍宇もまた手記のなかでこう書いている。

私をして事件を起こさせた動機は、いまなお自分の気持ちを探求しても判らない。私の行動が私の意志によって行なわれたものでなければ、これをどう判断すれば良いのか。私は当時の自分を考えるとき、はたしてそれが自分であったのだろうかと奇妙な想念に捕われ、そして最後には忌まわしい不気味な気持ちが私をおおうのを感じるのである。三二

犯行の瞬間に自分の意志を越えた力の存在を季は確かに感じた。だからこそ後になって、「はたしてそれが自分であったのだろうか」という戸惑いを残している。季の身の上に起こったことは決して特殊なことではない。拘置所の元医官で多数の殺人犯と直接対話した経験を持つ加賀乙彦は、彼らの多くが、「絶えずその瞬間を不思議に思っていた。人は、さまざまな心的葛藤のすえに、人を殺す。しかし殺したあと再び日常生活に戻っていき、自分の犯した行為を、何か自分とは無関係なもののように、言ってみれば非現実の出来事のように回想するのである」三三と述べている。

殺人の瞬間、何かわからないものが自分を支配したことは覚えている。しかしそれは言葉にならない。「名状しがたいもの」としか言いようがない。エスキロールはおそらく殺人者たちのそうした生の言葉を何度か聞いていたのだろう。現実に殺人を犯した者たちの言葉がそのことを裏付けている。つまり、殺人の瞬間には殺人者本人の意思とは別の何かある不可解な衝動が殺人者の心と体を挑発するという現象をエスキロールは認識していた。その不可解な衝動を「盲目的本能、抗しがたい性向、名状しがたいあるもの」という言葉で説明したのである。

【殺人偏執狂と『ヴォイツェック』】

殺人偏執狂に関するエスキロールのこの学説は『ヴォイツェック』と直接関連する。なぜなら、エスキロールが指摘した「名状しがたいもの」と「声」を前面に出してビューヒナーはこの劇の筋を組み立てているからである。その構成については作品論で詳細に述べたので[三四]ここではその基本だけを述べたい。

『ヴォイツェック』の筋は『レンツ』について前節で説明した筋とまったく同質である。この劇もまた原始的な感覚で主人公が何かを感じ取ったところから始まる。

ヴォイツェック　な、アンドレース、あそこの草の上のとこに筋があんだろ、あそこにな、首が転がってたんだ、ある時だれかがそいつを拾った、はり鼠だとでも思ったんだろうよ。三日三晩たった、そしたらよ、その男は棺桶の中よ。（小さな声で）アンドレース、フリーメイソンの仕業だ、わかってんだ、フリーメイソンがやりやがった、静かにしろ！

これは、『ヴォイツェック』の冒頭の台詞である。この話の脈絡は、墓地の暗い壁から母が出てきたので母は死んだと確信する『レンツ』の主人公のあの脈絡と似ている。その話に合理的で客観的な筋道はなかった。ここでのヴォイツェックも同じである。草の上にある筋とそこで首を拾った男の死はつながっており、背後にはフリーメイソンがいると確信する。彼にとっては草の上の筋がその証となる。自然界の現象を何かの暗示だと受けとめるこうしたパターンの推論は、クラールスの鑑定書に記載されている実在のヴォイツェックの言葉にもとづいている。[三五]つまり、実在のヴォイツェックもまた実在のレンツ同様に原始的な感覚の働きによる予感や直感や胸騒ぎなどをもとに想像し推論し確信していた。二つの作品の素材にはもともとの共通点があったのだ。

ヴィトコフスキーはここに勘づいた。彼はこう言う。

オーベルリーンのレンツの報告書は『ヴォイツェック』に影響を与えた。そしてそれ以上に、逆に、クラールスの鑑定

書が『レンツ』の狂気と通常の感覚を超えた感じ方との関係(der Zusammenhang zwischen Wahnsinn und transzendentaler Sensibilität)に影響を与えた。三六

通常の感覚を超えた感じ方と狂気との間には関係がある。作品に即して言えば、二人の主人公に特有の妄想は原始的な感覚によって作られる。その生々しい経過を、作品の素材となったオーベルリーンの手記もヴォイツェックの鑑定書も正確に記録している。この共通性があるから、この二つの素材はどちらも、『レンツ』の素材にもなるし『ヴォイツェック』の素材にもなる。つまり、融通性がある。ヴィトコフスキーはこう述べているのだ。そしてこれを話法の観点から見れば、通常の感覚を超えた感じ方、つまり原始的な感覚をもとにして何かを感じ取りそれをもとに推論を組み立てるという話法を実在のレンツと実在のヴォイツェックは共有していたということになる。

そして作者は二つの素材から得たこの独特の話法をこの劇の冒頭で示す。これはつまり、この劇は通常の劇の話法とは異なりこれから先は主人公のこのような話法にしたがって進むぞという合図なのだ。

それからこの後、ヴォイツェックの次のような台詞が続く。

ヴォイツェック　静かにしてろったら！　何か動いてんぞ！(Es geht was!)

ここで作者は「was」という言葉を出す。この「was」はこれ以外の言葉では言いようがない。他の言葉であれこれと限定してしまえばこの時の主人公がここで感じているものとは別のものになってしまう。だから、「何か」が、と漠然としたまま表現する。こうするとこの「was」の不気味な広がりがそのまま出てくる。そしてその何かは彼のうしろでも足下でも動く(Es geht hinter mir, unter mir[...])。しかしその正体を見ることはできない。この「was」はつまり、「名状しがたいもの」なのだ。

その後で、空をまわる「炎」(ein Feuer)を見、「ものすごい音」(ein Getös)を聞く。これは、『レンツ』の山小屋の場面に出てきた男が山奥で声を聞き稲光を見たことに対応する。あの男が山奥で少女の死を感じ取ってきたのと同様に、ものすごく

恐ろしい何かをここの広野でこの瞬間にヴォイツェックは感じ取った。しかし、それが何を意味するのかこの時の彼にはわからない。わからないけれども自分の感覚がどこかで何かを本能的に感じ取り怯えている。そのヴォイツェックの異様な状態はそばにいるアンドレースの台詞が逐一伝える。

自分の原始的な感覚が何かを感知し心も身体も反応している。しかし何を感じ取ったのか自分の頭ではわからない。このずれは、『レンツ』の主人公のずれと同じである。レンツもまた「ぞっとするような何か」を冒頭の夕暮の山頂で感じ取り、この短篇はその何かから主人公が逃げ出すところから始まった。導入部での出来事の設定がパラレルになっているのだ。そして『レンツ』では、そのずれを埋めて行く過程が筋になっていた。それと並行するように、『ヴォイツェック』の二場以降の流れは冒頭で感じた何かを主人公が段階的に認識して行く過程となる。

続く二場でのマリーとの会話で、広野で感じた「名状しがたいもの」に彼が支配されていることが明瞭に示される（「あれ（es）が街の外れんとこまで追いかけて来きやがった。どうなるんだろう?」）。この状態はこれ以降も続く。ヴォイツェックの様子を見て大尉は五場で、「おまえはいつもけしかけられてるみていだ」と言い、大尉が仕掛ける天気の話など彼はまったく聞いていない。これは、ヴォイツェックの心が別のところにあるということだ。そして、八場のドクターとのやりとりでは「おそろしい声」(eine fürchterliche Stimme) が何か話してきたと言い、地面に生えた茸の模様を何かの暗示だと思い、しきりに気にしている（「だれかあれが読めねえかな」）。これもまた、冒頭の場面での「名状しがたいもの」（「es」および「was」）に彼が囚われ続けていることの証となる。

その「名状しがたいもの」はしかしながら、劇が進行するにつれて主人公に少しずつ明らかになっていた。四場で、マリーの耳の片方に付いていたイヤリングに気づき何かを感じる。しかしここでは、居直るマリーの勢いに気圧されたような形になる。けれども七場では、「罪がこんなにもはっきり出るとは」と言い、「マリー、きれいだよ、罪と同じぐらい」とも言う。ということは、鼓手長とマリーの情事をヴォイツェックはこの場で確信しているということだろう。この間、H4の草稿では二人の情事やその気配を彼が目撃した事実は一切ない。大尉やドクターから聞いたわけでもない。それ以前の草稿では二人の情事をほのめかす大尉とドクターの台詞があったのだが最終的なこの草稿ではこの部分は削られている。しかも、

ヴォイツェックはここで「見えるはずなのに」と言いつつも「なにも見えない、なにも見えない」と繰り返す。この確信はつまり、直感の働きである。五感では確認できないのに情事があったことは確かだと本能的に勘づいているのだ。そして十場では、これもまた見たり聞いたりしていないのに「あいつが踊ってる」と言い切る。そして実際にその場に行ってみると、その予感通り、マリーと鼓手長が料理屋で夢中で踊っている（十一場）。

冒頭の広野の場面で感じ取った「名状しがたいもの」とは、つまり、マリーの気持ちが離れていき自分一人が置き去りにされてしまうというこのことだった。彼の原始的な感覚は冒頭の場面でそのことをあらかじめ感じ取っていた。あたりがいやに静まり返り(so kurios still) 宙に浮いたような感じ(Alles hohl da unten) がしたのはこのためだろう。これはマリーを失ったときの虚無感と孤立感を先取りしたものだった。そして二場以降の流れは、胸騒ぎ・直感・予感によって次第にその「名状しがたいもの」に彼の認識が近づいて行く過程となる。そして十一場の料理屋の場面で鼓手長と夢中で踊るマリーの姿を見て、その声を聞いて(Immer, zu, immer zu)、熱気まで感じた(Das Weib ist heiß, heiß!)ということは、原始的な感覚の働きによる胸騒ぎや直感や予感によって事前に感じていたものをここで五感が初めて確認したということだ。

原始的な感覚で言葉にはならない「何か」(was)を感じる。それから胸騒ぎや直感や予感を通してその何かを少しづつ知る。これは、『レンツ』の展開と同じである。別の言い方をすれば、冒頭の場面から十一場までの筋の流れは、広野で首を拾った男のあの話と同じ話法で進行しているのだ。

その話法はしかしながらヴォイツェックだけのひとりよがりの話法である。他者にはまったく理解できないし通じない。アンドレース、マリー、大尉、ドクター。彼らから見ればヴォイツェックは何を言っているのかさっぱりわからない。頭がおかしいとしか思えない。話法が違うからだ。ヴォイツェック自身にしてみれば自分の言動にはそれなりの一貫性がある(konsequent)。しかし彼以外の人間たちから見れば一貫性がない(inkonsequent, GL 28)。そこには「溝」(die Kluft, GL 28)がある。『レンツ』の主人公と同じことが『ヴォイツェック』の主人公にも起きている。これは、話法の違いから必然的に生じた結果なのだ。

それから十二場である。ここは広野。冒頭の場面と同じである。ここで主人公は「刺し殺せ！」という声を聞く。この声

は鑑定書からそのまま引っぱってきたものである。その前の場面で、他の男に夢中になるマリーの姿を目の前で見た。その事実はもう否定しようがない。ヴォイツェックはここでマリーを失った。そのマリーは彼にとってはしかし、たったひとりの女だった。他になにもない。その女を失う。その時の孤立感、絶望感、虚無感。この第二の広野の場面の空間はその彼の精神状態を象徴的に表現する。冒頭の広野の場面で感じた漠然とした不安がここで現実のものとなったのだ。

料理屋の場面からいきなり広野の場面に場が不連続に移行するのは、この瞬間の主人公の精神状態の変化に対応している。鼓手長と踊るマリーの姿を見て彼は気が狂った。それまでの日常の精神の動きはここで止まり、この瞬間に頭が真っ白になり錯乱状態に陥る。その空白の場が広野である。精神の不連続な変化を場の不連続な移行で作者は鮮明に表現した。そこには断層がある。正気と狂気の不連続な境目がある。だから、広野で声を聞いたということは精神が錯乱した状態で声を聞いたということになる。

部分的錯乱、錯乱の欠如、一時的正気という神秘的で不可解な一連の事象。これを場面の不連続な転換で鮮明に提示す。その劇作家としての天才的なアイデアの裏には、部分的精神錯乱に関する医学者としての正確な認識がある。

そしてこの十二場以降は、声に駆り立てられて主人公がマリー殺害へと一気に向かう姿が示される。その作り方は、エスキロールが言う「盲目的本能、抗しがたい性向、名状しがたいあるもの」を前面に出すという方法である。十三場では目の前に刃物がちらつき、十四場では鼓手長に殴られた後で「だんだん来る」(Eins nach dem andern.) と感じ、十五場では刃物を買い、十七場では身辺整理を始める。簡単に言えば人形同然。「刺し殺せ！」という声に命じられてその通りに動いているだけである。

「名状しがたいもの」と「声」。ビューヒナーは明らかにこの二つを基盤にして作品の構成を組み立てている。エスキロールの殺人偏執狂についての病理と『ヴォイツェック』が密接に関連していると思えるのはこうした理由からである。

【劇中のドクターとクラールス】

ドクター　いいか、膀胱括約筋は意志に従うということをおまえに教えなかったか？（八場）

この台詞が、ビューヒナーの『ヴォイツェック』のドクターを最も際立たせている。たしかに膀胱括約筋は随意筋である。したがって意志に従う。しかし、限度を超えてしまえば小便は我慢できなくなる。これが自然の理というものだ。だからヴォイツェックは、「でも先生、自然の成り行きだから」(Aber Herr Doktor, wenn einem die Natur kommt.) と言う。しかしその自然の成り行きがこの医者にはわからない。それどころか、「いいか、ヴォイツェック、人間というものは自由なんだ、人間の中で個性は神々しく輝き自由へと至るのだ」と御託を並べる。それからこの後である。「どうだヴォイツェック、また小便したくならないか？ちょっとあっちへ行ってやってみろ」と言う。小便は一度出したらすぐには出ない。これもまた自然の理である。それは子供にでもわかる。そんなことすらこの医者の頭には入っていない。

小便をテーマにしたヴォイツェックとドクターのこのやりとりは絶妙である。ヴォイツェックは小便を例に取り自然の必然性(die Notwendigkeit) を主張しているのだ。対してドクターは個人の意志の自由(die Willensfreihet)を強調する。これは他でもない、ヴォイツェックの精神鑑定の際に問題となったガルとクラールスの対立点でもあった。その対立がこんな形でそのままここに持ち込まれている。

しかもドクターはこの小便の件でヴォイツェックの契約違反を問題にして、「ヴォイツェック、いいか、これは悪いことなんだぞ、世の中が悪くなる、とても悪くなるぞ」と叱責する。この台詞は、「つまり行為の必然性を想定し、ために法の機能を麻痺させ、法医学のしかるべき尊厳を奪うところまで至るとなれば、この学説をむやみやたらと援用することによって生じるであろう混乱や不都合も考慮しなければならない」という鑑定書でのクラールスの言葉に正確に対応するパロディーになっている。個人の意思の自由を玉座に着けて、部分的精神錯乱の原因を当人の自堕落な生活ぶりや道徳観念の欠如に求める。これは明らかに、クラールスを代表とする精神派の医者たちのやり口である。それをビューヒナーはここで痛快に揶揄した。

次に問題となるのが以下の台詞だろう。

ドクター　ヴォイツェック、きわめて見事な錯乱、部分的精神錯乱、それも第二種が非常に見事に出ておる。ヴォイツェック、手当てをやるぞ。第二種、固定観念、でも全般的には理性的な状態、おまえはいつも通りまだ何でもやり、大尉の髭も剃っておる。

意志の自由を強調し道徳の欠如を指摘し脈拍を頻繁に測定する。これは明らかにクラールスの戯画である。けれども、部分的精神錯乱を認めるような箇所は彼の鑑定書のなかにはない。ここでのドクターはしかし、ヴォイツェックが日常生活全般では理性的な状態を保ち仕事もしているのに、恐ろしい声が話して来たとか地面に生えている茸のことにこだわったりするのを見て、すぐさま部分的精神錯乱(aberratio, mentalis partialis) だと診断する。この診断は明らかに偏執狂を念頭に置いている。しかも「見事な」を連発してたいそう喜んでいるのだから、このドクターは精神の部分的錯乱に大変な興味を持っている。もしかしたらこの部分的錯乱の症状を出させるためにヴォイツェックにエンドウ豆を与えていたのかもしれないと思わせるほどである。もちろんそれはドクターの学問的野心にもとづくものなのだが。

これは何の戯画か。日常生活を確認するのはクラールスの主要な方法の一つであった。しかしその目的は、ヴォイツェックの意志の自由を立証するためである。部分的精神錯乱を日常生活のなかで発見し偏執狂を認定するという方向ではない。そんなことをすればヴォイツェックには責任能力がないという結論に至ることは目に見えている。となるとビューヒナーはここで、身体派の医者たちもまた批判したのだと考えられる。

それでは身体派の何を批判したのか。それは、「第二種」(Zweite species)という言葉が典型的に示している。これは、部分的精神錯乱を言葉で限定し決め付ける医学的な態度である。ラテン語で表記していることも重要だろう。敢えて馴染みのない専門用語で症状だけを見て即病名を付ける。このラッピングの傾向が、身体派と言われる医者たちの間で、もしかしたら実際にあったのかもしれない。

この点に関してフォンタナは興味深いことを述べている。

他方、ジョルジュは一八二五年以来、本能的偏執狂という概念を導入した。(…)
以後、本能的偏執狂、知的偏執狂、そして理性的偏執狂などが交錯し、重なりあってしまい、その混乱ぶりは、医者自身にも、しばしば解きがたいものと見えた。名称や定義づけの問題を超えて重要なのは、ある不分明で、気がかりな地帯(ゾーン)が医学知識の上に張り出しているように見えることで、その地帯をしばしば、理性の回帰や理性の一時的なかげりを伴った犯罪が通過するのである。そのために、一八二七年にエスキロールは偏執狂を(彼によれば、それは観察された事象にすぎない)理論化したり体系化したりする傾向に警告を発したのであり、他方マルクら、司法鑑定を依頼された医師たちは、偏執狂という概念を濫用すべきでないと強調した。(FP 276)

重要なのは名称や定義付けではない。医学的知識では説明しきれない不分明な地帯があり、その地帯を「理性の回帰や理性の一時的なかげりを伴った犯罪が通過する」という現象である。エスキロールはその現象そのものを見据えようとした。だから、やたらに新しい病名を付けて理論化したり体系化したりすることは彼の意に反し、そうした傾向に対しては実際に警告を発していた。つまり、部分的精神錯乱に興味は持つものの、それにオリジナルな病名を付けて喜んでいる『ヴォイツェック』のドクターは、エスキロールが警告を発した身体派の医者たちの戯画だと推定できる。
名前を付けて病気を限定し体系化する。そのドクターの性癖は九場での大尉とのやりとりでも十分に強調される。

ドクター　ふーむ、むくみ、脂肪質、ふくれた首、卒中体質。そうですな、大尉殿、脳卒中になるかも知れませんな、(…)。

ドクターはここでもまた性懲りもなく病名を付けている。その病名を宣告するときはもちろんラテン語である(eine apoplexia cerebralis)。その彼にしてみればこの大尉もまた「興味深い症例の一つ」(einer von den interessanten Fällen)であり「最

大級に不滅の実験」(die unsterblichsten Experimente)のための素材となる。「おまえは一つの興味深い症例」(Er ist ein interessanter casus, […])とヴォイツェックを規定し実験材料にする。その態度は大尉を相手にしても繰り返される。

ドクターのこうした態度は、偏執狂と向き合うエスキロールの姿勢とは根本的に異なり、対極に位置する。このドクターはつまるところ、名称や定義づけにこだわっているのだ。彼のしていることと言えば、生きた人間を一つの病気の枠に強引におさめ、名札を張り、片付けようとする行為でしかない。エスキロールは逆に、偏執狂という精神病には医学的知識だけでは解明しきれない神秘的で不可解な領域があることを強調していた。その医者としての態度には、医学を絶対視し医学的知識をひけらかすドクターのような傲慢さはなく、むしろ謙虚さの方が際立つ。

その姿勢と関連するのだろう。偏執狂を見るにあたって患者の社会的な生活状態にもエスキロールは目を配った。この精神病が「情念の認識と不可分」だからである。そしてビューヒナーの『ヴォイツェック』でも、主人公の生活状態が簡潔なスケッチながら鋭く浮き上がるように作られている。たとえば、実験材料としてドクターに雇われているヴォイツェックが手にする二グロッシェンの日当はナイフの値段と同じであり、これは、ユダヤ人に「ただ同然」(Als ob's nichts wär.)と言わせる程度の額でしかないことが示される。そればかりではない。軍隊では上官にからかわれ馬鹿にされ、妄想ゆえに同僚からもマリーからも理解されず、社会のなかで一人孤立する姿が色濃く映し出される。しかし何よりも印象深く残るのは、彼にとって最後の人間である自分の女が、まるで潮が引いていくように別の男へと少しずつ去っていくのを傍で見続けるときの苦しみであろう。ゲーテにならえば、この苦しみもまた「死に至る病」である。その苦悩の息づかいを主人公に寄り添ってビューヒナーは再現する。なぜなら、ヴォイツェックが突然狂い出し「刺し殺せ!」という声を聞くこととこの苦悩はつながっているからだ。部分的精神錯乱の症状だけを取り出して診断するのではない。その症状へと至るまでの社会生活をできるかぎりこまやかに幅広く見る。疫学を重要視するこうした姿勢でもビューヒナーとエスキロールには共通するものが認められる。

精神派の医者であるクラールスの戯画化。偏執狂の理論化や体系化に向かう一部の身体派に対する批判。疫学の重視。ドクターの登場する場面を見るかぎり、エスキロールの医学はビューヒナーの『ヴォイツェック』に深く根を下ろしている。

注

一　テクストは以下を使用する。Büchner, Georg: Woyzeck. Studienausgabe. Die Handschriften. Differenzierter Text・Quarthandschrift H4. Nach der Edition von Thomas Michael Mayer herausgegeben von Burghard Dedner. Stuttgart(Reclam)1999, S. 145-168. 本論で表記する場面番号はこのテクストに従う。なお必要に応じて、Lese- und Bühnenfassug(S. 5-40), Foliohandschrift H1(S. 108-125), Foliohandschrift H2(S. 126-141), Quartblatt H3(S. 142f.) のテクストも参照した。

二　テクストは以下を使用する。Büchner, Georg: Lenz. Studienausgabe. Hrsg. von Hubert Gersch. Stuttgart(Reclam)1984. この版からの引用は「GL」の略号を用いてページ数を本文中に記す。

三　Clarus, Johann Christian August: Die Gutachten des Hofrats Clarus zum Fall Woyzeck. Die Zurechnungsfähigkeit des Mörders Johann Christian Woyzeck. Über den Gemüthszustand des Mörders Johann Christian Woyzeck. In: Georg Büchner: Sämtliche Werke und Briefe. Historisch-kritische Ausgabe mit Kommentar, Bd. 1. Hrsg. von Werner. R. Lehmann. München (Hanser) 3. Aufl. 1979, S. 485-549. 以下、この版からの引用は「CG」の略号を用いてページ数を本文中に記す。

四　Oberlin, Johann Friedrich: 》Herr L.....《 in der Druckfassung 》Der Dichter Lenz, im Steintale《 durch August Stöber. In: Georg Büchner: Lenz. Studienausgabe. Hrsg. von Hubert Gersch. Stuttgart (Reclams) 1984. 以下、この版からの引用は「OA」の略号を用いてページ数を本文中に記す。

五　Schöne, Albrecht: Interpretationen zur dichterischen Gestaltung des Wahnsinns in der deutschen Literatur. Inaugural - Dissertation zur Erlangung des Doktorgrades der Philosophischen Fakultät der Landes-Universität zu Münster, S. 1- 225. Univ. Bibliothek Münster. 以下の引用は「SI」の略号を用いてページ数を本文中に記す。

六　瀧野隆浩: 宮崎勤精神鑑定書。「多重人格説」を検証する（講談社）一九九七年。文芸春秋編集部: 供述調書。『文芸春秋　三月特別号』（文芸春秋社）一九九八年、一一〇―一六〇頁などを参照。

七　Krause, Egon: Anhang. In: Georg Büchner: Woyzeck. Texte und Dokumente. Kritisch herausgegeben von Egon Krause. Frankfurt

am Main(Fischer)1969, S. 160. 以下の引用は「KW」の略号を用いてページ数を本文中に記す。

八　中谷陽二: 精神鑑定の事件史。犯罪は何を語るか（中央公論）一九九七年。以下、この版からの引用は「NS」の略号を用いてページ数を本文中に記す。

九　ミッシェル・フーコー編／岸田秀、久米博訳: ピエール・リヴィエールの犯罪 ― 狂気と理性（河出書房）一九八〇年（第二版）。以下、この版からの引用は「FP」の略号を用いてページ数を本文中に記す。

一〇　Seling-Dietz, Carolin: Büchners Lenz als Rekonstruktion eines Falls „religiöser Melancholie". In: Georg Büchner Jahrbuch 9(1995-99). Tübingen(Niemeyer)2000, S. 188-236. 以下の引用は「SB」の略号を用いてページ数を本文中に記す。

十一　Erläuterungen und Dokumente. Georg Büchner Woyzeck. Von Burghard Dedner unter Mitarbeit von Gerald Funk und Christian Schmidt. Stuttgart(Reclam)2000, S. 177.

十二　拙論: ビューヒナー研究（一）― 殺人者の言葉から始まった文学 ― 第一部 『ヴォイツェック』〔『広島大学文学部紀要』第五四巻特輯号三（広島大学文学部）一九九四年十二月、一―一二二頁〕。ビューヒナー研究（二）― 殺人者の言葉から始まった文学― 第二部 『レンツ』（1／2）〔『広島大学文学部紀要』第五六巻特輯号二（広島大学文学部）一九九六年十二月、一―八五頁〕。ビューヒナー研究（三）― 殺人者の言葉から始まった文学― 第二部 『レンツ』（2／2）〔『広島大学文学部紀要』第五七巻特輯号三（広島大学文学部）一九九七年十二月、一―九四頁〕。ビューヒナー研究（四）― 殺人者の言葉から始まった文学― 第三部 『ヴォイツェック』と『レンツ』の研究史〔『広島大学文学部紀要』第六十巻特輯号三（広島大学文学部）二〇〇〇年十二月、一―九五頁〕。

十三　Meier, Albert : Georg Büchner 》Woyzeck《. München(Fink)1980, S. 19. 以下の引用は「AMW」の略号を用いてページ数を本文中に記す。

十四　カステル、ロベール: 医師と裁判官。ミッシェル・フーコー編／岸田秀、久米博訳: 前掲書、二五五―二六九頁。

十五　Viëtor, Karl: Woyzeck. In: Wege der Forschung, Bd. LIII. Georg Büchner. S. 151-177. (Aus: Das Innere Reich 3. 1936)以下の引用は「VW」の略号を用いてページ数を本文中に記す。

十六　Glück, Alfons: Woyzeck - Clarus - Büchner(Umrisse). In: Zweites Internationales Georg Büchner Symposium 1987. Referate.

Herausgegeben von Burghard Dedner und Günter Oesterle, Frankfurt am Main(Anton Hain Meisenheim)1990, S. 425-440. 以下、この版からの引用は「AGW」の略号を用いてページ数を本文中に記す。

十七 Lukács, George: Der faschistisch verfälschte und der wirkliche Georg Büchner. In: Wege der Forschung Band LIII. Georg Büchner. Herausgegeben von Wolfgang Martens. Darmstadt(Wissenschaftliche Buchgesellschaft) 1965, 3. Aufl. 1973, S. 197-224. (Aus: Lukács, Deutsche Literatur in zwei Jahrhunderten. Neuwied 1964. Zuerst 1937)

十八 Oehler-Klein, Sigrid: 》Der Sinn des Tigers《. Zur Rezeption der Hirn- und Schädellehre Franz Joseph Galls im Werk Georg Büchners. In: Georg Büchner Jahrbuch 5/1985. Frankfurt am Main(Europäische Verlagsanstalt)1986. S. 18-51. 以下の引用は「OS」の略号を用いてページ数を本文中に記す。

十九 Friedreich, J. B.: Allgemeine Diagnostik der psychischen Krankheiten. Würzburg 1832, S. VII.

二〇 Goethe, Johann Wolfgang von: Eine Episode von einem Bauerburschen. In: Die Leiden des jungen Werther. In: Johann Wolfgang von Goethe. Werke. Hamburger Ausgabe. Bd. 6. Textkritisch durch gelesen von Erich Trunz. Kommentiert von Erich Trunz und Benno von Wiese. München 1982. S. 96. 以下の引用は「GW」の略号を用いてページ数を本文中に記す。

二一 Büchner, Ernst: Gutachten über den Gemüthszustand eines Soldaten im Augenblick seines Vergehens im Dienste durch thätliches Vergreifen am Vorgesetzten. In: Henke's Zeitschrift für die Staatsarzneikunde. 5. Jahrgang (1825), H. 3, S. 39-72.

二二 Büchner, Georg: Probevorlesung. Ueber Schädelnerven. Gehalten in Zürich 1836. In: Georg Büchner: Sämtliche Werke und Briefe. Historisch-kritische Ausgabe mit Kommentar, Bd. 2. Hrsg. von Werner. R. Lehmann. München (Hanser) 3. Aufl. 1971, S. 291-301. 以下、この版からの引用は「BU」の略号を用いてページ数を本文中に記す。ders.: Mémoire sur le système nerveux du barbeau. S. 65-136.

二三 Bird, Friedrich: Pathologie und Therapie der psychischen Krankheiten zum Gebrauche für practische Aerzte entworfen. Berlin 1835, S. 65.

二四 ゼーリングマンによれば、一八二〇年にパリで出版されたジョルジェの狂気についての学説は、イントロートによって一八二二年にドイツ語に翻訳されている(SB 198)。Georget: De la folie. Paris 1820. (Dt.: Über die Verrücktheit.

Übersetzt und mit Beilagen von Heinroth. Leipzig 1821).

二五 フォンタナ、アレクサンドル: 理性の間歇。ミッシェル・フーコー編／岸田秀、久米博訳: 前掲書二七〇―二八七頁。

二六 注の五に記載。

二七 Mayer, Hans: Georg Büchner und seine Zeit. Frankfurt am Main(=suhrkamp taschenbücher 58)1972. Zuerst Wiesbaden 1946.

二八 Esquirol's allgemeine und specielle Pathologie der Seelenstörungen. Frei bearbeitet von Karl Christian Hille. Nebst einem Anhange kritischer und erläuternder Zusätze von J. C. A. Heinroth. Leipzig 1827.

二九 拙論: 殺人者の言葉から始まった文学 ―ビューヒナー研究―（鳥影社）一九九八年。

三〇 Dedner, Burghard: Büchners Lenz: Rekonstruktion der Textgenese. In: Georg Büchner Jahrbuch 8(1990-94), Tübingen(Niemeyer)1995, S. 3-68. この版からの引用は「DL」の略号を用い、その後にページ数を付し本文中に記す。

三一 Büchner, Georg: Woyzeck. Studienausgabe. Die Handschriften. Differenzierter Text・Foliohandschrift H2. Nach der Edition von Thomas Michael Mayer herausgegeben von Burghard Dedner. Stuttgart(Reclam)1999, S. 141.

三二 朴疇南編: 季珍宇全書簡集（新人物往来社）手記（その三）一九七九年、四二頁。

三三 加賀乙彦: 犯罪ノート（潮出版）一九八一年、一五四頁。

三四 注二二に記載。

三五 Büchner, Georg: Woyzeck. Kritische Lese- und Arbeitsausgabe. Hrsg.von Lothar Bornscheuer. Stuttgart(Reclam) 1977.S. 3-5.

三六 Wittkowski, Wolfgang: Georg Büchner. Persönlichkeit. Weltbild. Werk. Heidelberg(Winter)1978. (= Reihe Siegen. Beiträge zur Sprach- und Literaturwissenschaft, Bd. 10). S. 348.

Zweitens werden mit Hilfe von Egon Krauses Bericht(1969), Sigrid Oehler-Kleins Aufsatz(1986) und Carolin Selings Aufsatz(2000) die psychiatrischen Debatten der Zeit Büchners dargestellt. Damals in den 1820-30er Jahren gab es eine heftige wissenschaftliche Kontroverse zwischen „Psychikern" und „Somatikern"; jene sehen psychische Störungen als selbstverschuldet an und betonen die Willensfreiheit, diese, auf der Tradition der französichen Psychiatrie seit Pinel beruhend, führen ihre Symptome auf eine körperliche Krankheit zurück. Beim Gutachten des Woyzecks (1824) kann man diese Polemik erkennen; im zweiten Gutachten kritisiert Clarus, der eigentlich zu den Psychikern gehört, Galls Lehre, der die Geisteskrankheit als eine Krankheit der Organe des Gehirns auffaßt und der schon lange vor Esquirol den Ausdruck „Monomanie" für den blinden, unwiderstehlichen Drang zu morden prägt. Büchners Vater, der als medizinischer Gutachter bei Gericht tätig war, stützte die somatisch orientierte Psychiatrie und sein Sohn schreibt zwei wissenschaftliche Aufsätze, einen auf französich, die somatisch orientiert sind: beide gehören nämlich zu den Somatikern.

Zum Schluß werden gezeigt,

1)daß die damalige psychiatrische Kontroverse ein wichtiger Teil des sozialen Hintergrunds von „Woyzeck" und „Lenz"ist,

2)daß die beiden Werke nach Esquirols Lehre „Monomanie" gestaltet werden. Denn die beiden Helden werden von etwas Unnennbares(„was" oder „es") und von einem blinden und unwiderstehlichen Drang getrieben. Das sind die Symptome, die Esquirol bei „Monomanie" nennt. Büchner wählte nämlich zwei typische Fälle der „Monomanie" als Material aus und schuf daraus seine beiden unterschiedlichen Werke. Daher kann man sagen, daß „Woyzeck" und „Lenz" als „Parallelprojekte" gelten, wie Seling am Schluß ihrer Abhandlung sagt.

□

Studien zu Georg Büchner(5)
-Die Literatur, die mit den Worten des Mörders beginnt.-
Vierter Teil: Ein Hintergrund von „Woyzeck“ und „Lenz“-

Toshio Kawahara

„Möglicherweise kommt deshalb ein weiterer Kriminalfall als Anregung für die Gestaltung des 〉 Woyzeck 〈 in Betracht, der bislang von der Büchner-Forschung noch nicht berücksichtigt worden ist“, so deutete Albert Mayer in der Einführung des „Georg Büchner Woyzeck“ (1980) an; aber leider stellte er weiter keine Betrachtungen an.

Eine Forschungsgruppe, die Michel Foucault gesammelt hat, studiert intensiv „diesen Kriminalfall“(1973). Danach wird der Fall so berichtet: Es passierte 1835. In der Normandie ermordete der 20 jährige Bauernsohn Pierre Rivière seine Mutter, seine Schwester und seinen Bruder mit einem Beil. Esquirol, einer der damaligen Kapazitäten der französichen Psychiatrie und Gerichtsmedizin, untersuchte die Zurechnungsfähigkeit des Mörders und diagnostizierte diesen als einen an „Monomanie“ Erkrankten, denn bei ihm hatten sich deutlich partielle Geistesstörungen gezeigt.

In diesem Aufsatz wird ein Zusammenhang zwischen Esquirol und Büchner hergestellt, denn dieser war als Mediziner im wissenschaftlichen Bereich von jenem stark beeinflußt, und bei beiden Titelhelden „Woyzeck“ und „Lenz“ erscheinen deutlich geistige Partialstörungen.

Dazu werden zuerst Karl Viëtors „Woyzeck“(1936) und Albrecht Schönes Dissertation „Zur dichterischen Gestaltung des Wahnsinns in der deutschen Literatur“(1951) vorgestellt, denn beide Forschungen ziehen auch die medizinische Seite des Autors in Betracht. Viëtor sagt über „Woyzeck“, „es sei ein Gericht über die Richter“, weil der historische Woyzeck als das Opfer eines Justizirrtums hingestellt werde. Dabei waren die zwei Gutachten des Gerichtsarztes Clarus entscheidend, der Woyzecks Verantwortung für seine Tat bewies. Büchner, der ein besser unterrichteter Mediziner als Clarus sei, kritisiere dessen Diagnose mit seinem Werk, so interpretiert Viëtor. Und Schöne meint, „Lenz“ sei eine Novelle vom Wahnsinn, und er faßt dieses Werk als „die klinische Vorlage“ eines geistigen Kranken oder eines Irrsinnigen auf. Er behauptet, Büchner habe eigentlich ein rein wissenschaftliches Interesse für das Oberlinsche Tagebuch; und in dem Doppelcharakter des Verfassers als Dichter und Arzt, des Werkes als Novelle und wirklichkeitstreuem Krankheitsbericht, liege die Einmaligkeit des „Lenz“ begründet.